

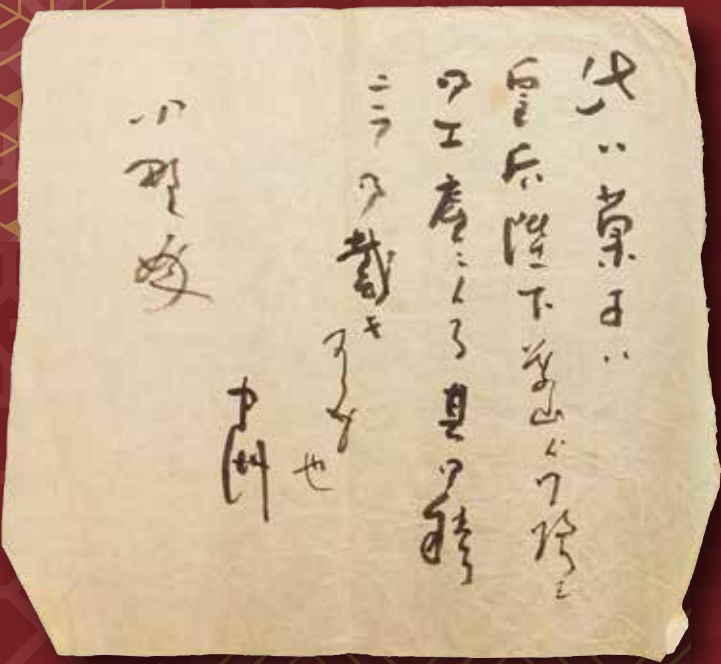
# 三島中洲

Chushu

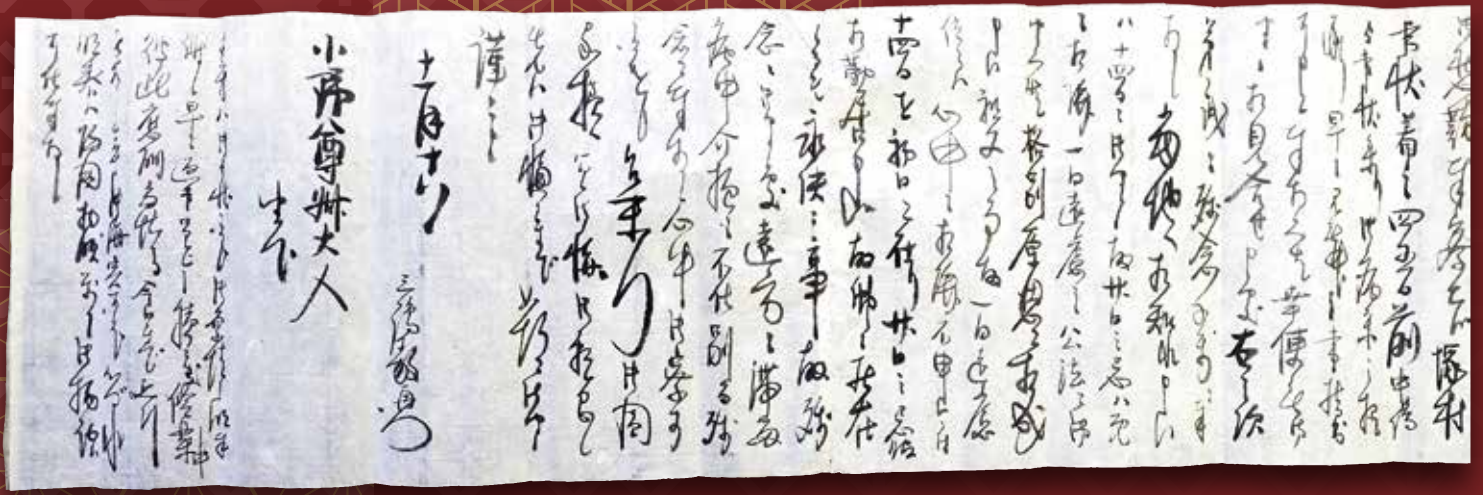
# 近代

Modern

其八



—新収の小野家旧蔵資料—



二松学舎創立一四五周年記念

三島中洲と近代 — 其八 —

新収の小野家旧蔵資料



大学資料展示室運営委員・東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター長 町 泉寿郎

創立一四五周年を迎える本年、恒例となった企画展「三島中洲と近代―其八―」として、新収の小野家旧蔵資料を展示することとした。小野家資料が本学に収蔵された経緯と資料の概要についてここに記しておきたい。

平成三十一年から令和元年に改元された二〇一九年五月、三島中洲の母の生家小野家の子孫である小野重五郎氏（横浜市在住）から筆者宛てに電話をいただいた。折悪しく筆者は海外出張中であったため、帰国後すぐに電話を差し上げると、近日中にご自宅を取り壊すので家伝資料を寄贈を前提として本学に移管したいとのお話である。月末に着工時期が迫るなか、五月二十五日に運送業者を伴って小野家を訪れ、三段重ねの書類箱と長持ち一杯に詰まった三島中洲関係資料・小野家関係資料を搬出した。筆者は翌二十六日に中洲歿後百年の記念講演を三島家の郷里である倉敷市中島で開催し、また三島家菩提寺の實際寺における法要にも参列する予定であったため、新資料の発現を奇しき因縁とも感じた次第である。小野家から本学に寄贈された資料の概要は次の通りである。

- 1 三島中洲書簡（小野慎一郎・小野達郎・小野静夫宛） 約一〇〇通
- 2 三島中洲来簡（宮内庁関係者や渋沢栄一等有名人の書簡） 約一五〇通
- 3 三島中洲書（未表装、六曲一双屏風用三双分を含む） 約六〇枚
- 4 小野氏宛書簡（小野慎一郎、小野達郎等宛） 約一〇〇通
- 5 諸家の書画等 多数

殊に1・2は従来知られていない中洲関係資料として、近來稀に見る質と量を備えている。とりわけ、従来本学に所蔵されていない、もしくは所蔵数が多くない、玉乃世履・渋沢栄一・外山脩造といった漢学者・文人以外の中洲の交友、あるいは侍従や東宮職の諸氏など宮内省関係者からの書簡が少なからず含まれていたことには驚きを禁じ得なかった。従来の中洲関係資料の欠落を補う意味において、小野家旧蔵資料は重要な意義をもつ。

これらの中洲来簡が小野家に伝えられた理由を考えると、中洲が従弟の小野慎一郎とその子達郎に宛てた書簡に答えが見出せる。それによれば、達郎からの割愛依頼を受けて中洲が手元にある有名人の書簡を割譲していることが分かる。中洲来簡は小野家側の依頼を受けて、中洲がその生前に譲渡したものである。譲渡の際に、当該書簡に中洲がコメントを書き付けた例もまま見出だされる（例えば渋沢書簡には「高名之実業家」等）。

右記1の小野家宛の中洲書簡には、外祖父小野光右衛門に対する中洲の追慕の心情が読み取れるものが含まれている。また、慎一郎・達郎父子から中洲へ揮毫を求める内容の書簡が少なくない。明治後期、特に東宮侍講に就任して以降（一八九六年）、一般社会における中洲の文名が高くなるにつれて、郷里備中の多くの人が小野家の仲介によって中洲の書を求めたようすがよく窺える。その結果、中洲は普段、原則として揮毫の潤筆料について口にしない姿勢をとるのだが、揮毫要求があまりに頻繁なため、潤筆料の基準について言及している書簡が散見するのは珍しい。

三年前に寄贈を受けて以来、SRF（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）の予算等を充当しながら、小野家資料の整理・研究を進めてきたが、なお道半ばである。なるべく早くに新収資料展を開催して、小野重五郎氏のご厚意に報いたく思ったが、コロナ禍によって学内行事の多くが制限されてきたため、思うに任せず、今回も併催される講演会はオンラインによる配信となった。

引続き資料整理に勉めるつもりであるので、関係各位のご理解とご支援をお願いしたい。

令和四年九月吉日

## 小野家と啓鑑亭光右衛門

—三島中洲撰文にかかる小野家関係の文—

今回、新収の小野家旧蔵資料を展示するにあたり、小野家の歴史についてその概略を説明しておきたい。

小野家歴代中、特筆すべき人物として、中洲の母柳りゅうの父で、中洲の外祖父にあたる小野光右衛門（一七八五—一八五八、名以正、号啓鑑亭）がある。中洲が撰文した「啓鑑亭小野翁碑」（『中洲文稿』第一集卷一下所収）を主な材料として、その事蹟を紹介しておこう。

小野家の系図は平安時代の小野好古に遡り、その子孫のうち讃岐に住みついて中務を名乗った者を遠祖とする。天文年間に備中に移った者が光右衛門から数えて十一世の祖である。光右衛門の父周春の代に備中国浅口郡大谷村の庄屋となり、父の歿後、光右衛門は一七歳（一八〇一）で庄屋を継承した。二五歳（一八〇五）の時に領主である浅尾藩蒔田侯から命じられて大坂に出張し（蔵屋敷業務か）、認められて翌年苗字を許される。三三歳の時（一八一六）、領内の洪水被害を防ぐことに功績があり、帯刀を許される。四六歳の時（一八三〇）、弁天池を開墾し別に新しい池を開墾する灌漑工事を行って税収を増やし、五〇歳（一八三四）で大庄屋格となり、五六歳（一八四〇）で大庄屋となり、浅尾陣屋に近い賀陽郡井出村に移住した。これにともない長男の四右衛門（名必正、号忠節）が浅口郡大谷村の庄屋を継承。光右衛門は浅口郡内の諸務の検査役と湛井十二ヶ郷用水の管理を兼務した。六六歳の時（一八五〇）、井尻野（現総社市）の荒地の開墾を建言し、これに成果を挙げて賞され、七〇歳（一八五四）で宅地七百歩を賜った。七二歳（一八五六）の時、藩の上層部が増収のために領内の新田の年貢率を上田並としてうとしたので、光右衛門はこれに抵抗し実行されずに終わった。しかしこのことで恨みを買ひ、以後、光右衛門の意見は聴き届けられなくなったため、大庄屋を辞職。以後、若い頃から好んだ数学に専心した。安政五年（一八五八）一月一七日、七四歳で歿した。

光右衛門の容貌は白髪で鼻が高く、白い眉毛が眼を蔽っていた。穏やかで度量が広く、家人や従者たちは怒った顔を見たことがなかった。庄屋の職務に明るく、また幅広く学芸に通じ、中でも天文曆算に精通していた。独学で和算を修め、近

郷の谷東平（小田郡大江村の庄屋、麻田剛立門、伊能忠敬に測量を学ぶ）に師事して、出藍を称えられた。文化年間、公務で一年間江戸に滞在した際に幕府天文方法川景佑に学び、更に学問が進み、帰郷後は従学する者が増えた。嘉永年間に朝廷の陰陽師土御門氏に招かれて下問に答え、紋服を賜った。著書『啓迪算法（指南大成）』五卷附録一卷は既刊で、その他十数部の未脱稿の著作があるとのことである。

光右衛門の表彰すべき業績は数多く、数学はその最も愛好した分野であるが、その在世中には世間で用いられることがなかった。しかし、明治維新後、数学・算術が流行し、光右衛門の門人藤田秀斎ら後継者の功績によって光右衛門の学問が始めて世間で用いられることとなった。それは、新政府の命によって全国各県で新しく地図を製作することとなり、藤井らが小田県（岡山県西部・広島県東部）内を測量して地図を完成したことを指す。藤井氏らは、このたびの地図の完成はもとをたどれば光右衛門の功績であると考え、小野慎一郎（光右衛門の嗣子四右衛門の長男、中洲の従弟）を介して外孫の三島中洲に撰文を依頼し、笠岡の公道脇にその顕彰碑を建てることを計画したのである。

光右衛門の子孫について附言すれば、光右衛門の長女で、光右衛門の嗣子四右衛門の姉が、中洲の母柳（一八〇九—一八七二）である。柳は備中窪屋郡中島村の庄屋三島寿太郎（名正昱）に嫁し、結婚十年余りで夫が江戸で客死したため、舅姑に仕え、長男舒太郎・二男中洲・長女増を教育し、使用人を使って耕作や織物を営み、困難な家政を維持した。その賢婦人としての生涯は、法諡「秀貞勤恵大姉」によく表れている。

光右衛門の三男で、中洲より一歳年長の叔父に小野随鷗（一八二九—一九〇八、名懷之、字士徳）という人物がある。山田方谷に学び、江戸遊学して昌平坂学問所に学び、相州大磯で開塾し漢学を講じた。明治以後は大磯小学校の初代校長となり、同地の教育に尽くした。

浅口郡大谷村の小野家は、その後、四右衛門—慎一郎—達郎—鐵之助と継承され、鐵之助は尾道で産婦人科医を営みながら、洋画家としても知られた。

### 【原文】

#### 啓鑑亭小野翁碑

小田県知数学者、曰藤田秀斎。乃者介内弟小野慎一郎寓書毅曰、方今朝廷令各県新製地図、余輩数人実承命測量県内。而余輩学元出小野翁、則図之成皆翁之功也。翁

其可付湮沒哉。因相謀、將建碑笠岡村官道側、以表之。先生翁之外孫、能知其履歷者。請為之銘。毅乃扼所曾撰行狀、經緯其略曰、翁諱以正、字子物、稱光右衛門、号啓鑑亭。備中国浅口郡大谷村人。系出自小野好古、好古苗裔住讚岐者、稱中務。天文中徙居本国。是為翁十一世祖。曾祖父諱忠通、祖考諱茂卿、考諱周春、始為本村里正。妣富山氏。翁少穎悟、好数学。会喪父、襲里正、終不能肆力。文化六年奉井出邑主蒔田氏命、于役大坂、稱旨、許称族。十三年封内大水、防禦有功、許佩刀。天保元年墾弁天池、更鑿新池、灌溉便、而租入多。官民俱利焉。五年進班大里正、賜俸若干。十一年為真、兼検査郡中諸務、管湛井閘事。嘉永三年、初翁建言墾井尻野荒田八町、至此蕃熟、賜金若干賞之。安政元年賜宅地七百步。三年要路欲增封内新田租、悉准上田。百姓洵洵不安業。翁百方辨疏拒之、事遂不行。然為其所嘆、翁言自此多阻格、遂告老辭職。封民莫不惜焉。於是專力夙好、矻矻述作不輟。五年十月十七日病歿。得寿七十有四。葬先塋之次。翁娶土師氏、誕男女各四人。長男必正嗣家、

實慎一郎父。而長女即為毅母。翁狀貌魁梧、白髮隆準、眉雪龐然蔽眼。天資淳愨温恭、器度尤宏恢、子弟婢僕未嘗見憤怒之色。其於吏務、精練明達、決疑處變、敏捷如流。其於藝學、俳詞禪理下筮切音相宅方鑑、靡不該通。最精曆象算數、雖自少好之、寒鄉無師友、独読沢口佐藤氏等書、略通其理。既聞隣郷谷東平伝閑・宅間・最上三氏術、就問不避寒暑。亡幾有出藍之稱。文化中以吏事在江戸、每暇日遊天文博士洪川氏門、研精一年、其學大進。既帰称譽籍籍。四方來訪者履恒盈戸外。嘉永中陰陽頭土御門氏聞其名、請邑主使入京。既至、対問称旨、有章服之賜。翁所著啓迪算法五卷附録一卷既刊行。其餘十數部未脱稿云。嗚呼翁之可表、豈独数学。然数学其所最好、而當時不為世用、今日皇政維新、數術大行、依秀齋諸子継述之功、而翁之學始有用於世矣。則毅輩子孫將代翁陳謝之不暇。而諸子謙退讓其功於翁、將碑而表之。毅惡得不欣然銘諸。銘曰。

古矣哉數、象垂八卦。貴矣哉數、教列六藝。世降聖徂、俗学支離。背矣馳空、數乎始卑。吾翁卓見、私淑斯学。世俗弗知、独伝後覚。

聖運循環、古道復崇。小子斐然、呈技猷功。於戲吾翁、死而不死。

銘詞昭昭、垂績悠久。

〔中洲文稿〕第一集所収

### 【訓読】

（小田県に数学を知る者、藤田秀齋と曰ふ。さきに内弟小野慎一郎を介して書を毅

に寓して曰はく、方今朝廷各県に令して新たに地図を製せしめ、余輩数人実に命を承けて県内を測量す。而して余輩の学は元と小野翁より出づれば、則ち図の成るは皆翁の功なり。翁は其れ湮沒に付すべけんや。因つて相謀りて、將に碑を笠岡村官道の側に建てて、以て之を表せんとす。先生は翁の外孫にして、能く其の履歴を知る者なり。請ふ之が銘を為れ、と。

毅乃ち會て撰する所の行狀に扼つて、其の略を経緯して曰はく、翁諱は以正、字は子物、光右衛門と稱し、啓鑑亭と号す。備中国浅口郡大谷村の人なり。系、小野好古より出づ。好古の苗裔にして讚岐に住する者、中務を称す。天文中居を本国に徙す。是れ翁の十一世祖と為す。曾祖父、諱は忠通。祖考、諱は茂卿。考、諱は周春、始めて本村の里正と為る。妣は富山氏。翁少にして穎悟、数学を好めども、会たま父を喪ひて、里正を襲ぎ、終に力を肆にすること能はず。文化六年、井出邑の主蒔田氏の命を奉じて、大坂に于役す。旨に称ひ、族を称することを許さる。十三年封内に大水あり、防禦に功有り、佩刀を許さる。天保元年、弁天池を墾ぎ、更に新池を鑿し、灌溉に便にして租入多く、官民俱に利す。五年進んで大里正に班し、俸若干を賜はる。十一年真と為り、兼ねて郡中の諸務を検査し、湛井閘の事を管す。嘉永三年、初めて翁井尻野荒田八町を墾くことを建言し、此の蕃熟するに至つて、金若干を賜はり之を賞さる。安政元年宅地七百歩を賜はる。三年、要路、封内新田の租を増さんと欲し、悉く上田に准ず。百姓洵洵として業に安んぜず。翁百方辨疏して之を拒み、事遂に行はれず。然れども其の嘆する所と為り、翁の言此れより阻格すること多く、遂に老を告げて職を辞す。封民惜しまざるは莫し。是に於いて力を夙好に専らにし、矻矻として述作して輟めず。五年十月十七日病歿す。寿を得ること七十有四。先塋の次に葬る。

翁土師氏を娶り、男女を誕むこと各四人。長男必正家を嗣ぐ、実に慎一郎の父なり。而して長女は即ち毅が母と為す。翁、狀貌魁梧、白髮隆準、眉雪龐然として眼を蔽ふ。天資淳愨にして温恭、器度尤も宏恢なり。子弟婢僕いまだ嘗て憤怒の色を見ず。其の吏務に於ける、精練明達、疑を決し變に処し、敏捷流るるが如し。其の藝学に於ける、俳詞・禪理・卜筮・切音・相宅・方鑑、該通せざるはなし。最も曆象・算數に精しく、少きより之を好むと雖も、寒郷に師友無く、独り沢口・佐藤氏等の書を読み、略ぼ其の理に通ず。既にして隣郷の谷東平、閑・宅間・最上三氏の術を伝ふると聞き、就きて問ひて寒暑を避けず。幾くも亡くして出藍の稱有り。文化中、吏事を以て江戸に在り、暇日毎に天文博士洪川氏の門に遊び、研精すること一年にし

て、其の学大いに進む。既にして帰り称誉籍籍たり。四方より来訪する者、履恒に戸外に盈つ。嘉永中、陰陽頭土御門氏其の名を聞きて、邑主に請ひて京に入らしむ。既にして至り、問ひに對へて旨に称ひ、章服の賜有り。翁著はす所の「啓迪算法」五卷附録一卷、既に刊行す。其の餘十数部はいまだ脱稿せずと云ふ。

ああ翁の表すべきは、豈に独り数学のみならんや。然るに数学は其の最も好む所なれども、而れども当時世用と為らず。今日皇政維新、数術大に行はれて、秀齋諸子の継述の功に依つて、翁の学始めて世に用有り。則ち毅輩ら子孫、將に翁に代はつて之に陳謝せんとするも、暇あらず。而して諸子謙退にして其の功を翁に譲り、將に碑して之を表せんとす。毅惡んぞ欣然として諸に銘せざるを得んや。

銘に曰はく、

古なるかな数、象八卦に垂る。貴いかな数、教六藝に列す。

世降り聖祖き、俗学支離す。実に背き空に馳せ、数や卑きより始まる。

吾が翁の卓見、斯学に私淑す。世俗知らず、独だ後覺に伝ふ。

聖運循環し、古道復び崇ばる。小子斐然として、技を呈し功を獻す。

ああ吾が翁、死して死せず。銘詞昭昭として、績を悠久に垂る。

### 【参考資料1】

#### 先妣小野君墓碣銘

嗚呼吾先妣小野君之歿也、既五閏年矣。当初家兄命毅撰墓銘、而遲緩至今日者、蓋有追悔平生不忍援筆焉。天保中先考之客死于江戸也、君家居追慕、且夕不已。毅等幼駿、遊戯其側、猶竊悲之。時始学字、乃手記小冊子曰、成人後、奉母謁父墓。稍長、遊学十年、遂霸官藩国、公事鞅掌、未能酬素志。一日君謂毅曰、汝等既樹立矣。吾復何望。唯望謁亡夫墓而後死已。汝忘童時冊記乎。毅赧然不能答。不幾、致仕居閑、乃謂宜以此時達母望、而君適罹疾溢逝、遂負大罪於幽冥之中。每思之、慙悔不能自安。何以忍屬銘詞哉。既而毅應徵來拜官於東京、每忌日、携妻兒、展先墓、乃泣曰、使先妣而在、其喜何如也。低徊不能去者久之。会兄寄書申促前命。於是序其梗概曰、君諱柳、備中浅口郡大谷村大里正小野君諱以正長女。來配先考諱正豆、僅踰十年而寡。上事舅姑、侍養温清、莫不尽。下教育毅兄妹、嚴慈兼至、又能御婢僕以恩、織耕俱舉、遂維持一家於危側之間。兄繩正君既長、能修家政、襲職里正。妹增嫁備前豪族日笠榮頭、而毅以文学仕松山侯。於是君優遊来往於三子之間、撫弄諸孫以自樂。明治四年九月廿四日歿、享年六十又三。葬于窪屋郡中島村實際寺先姑墓側。

兄与毅等泣議曰、君為人聰敏知道理、有丈夫所不及、可謂秀矣。寡居四十年、一節不渝、可謂貞矣。孜孜執女工、老而不倦、可謂勤矣。節約自奉、有餘以窮乏、可謂惠矣。遂請浮屠氏、諡曰秀貞勤惠大姉。而貞為其大節、乃使之不展先考墓而終、則毅不孝之罪實無所容。然而今移家東京以守先墓、或可以少慰其心於泉下乎。乃為銘以碣其墓曰。父也天迎、母也知角、窀穸東西、何其杳邈、弟克祭父、兄克祀母、靈可以安、墳墓有守。

〔中洲文稿〕第一集所収

### 【参考資料2】

#### 隨鷗小野先生碣

子思曰、君子之道、淡而不厭、簡而文、温而理。若我隨鷗先生、其庶幾乎。先生諱懷之、字士德、号隨鷗。備中浅口郡大谷村大里正小野翁以正第三子。翁毅外祖、而先生毅舅氏、長毅僅一年、幼時遊嬉如兄弟、同入松山藩儒山田方谷師門。詞藻夙成、弱冠發遊方志、飄然出郷曰、志不成、不復還。遂抵江戸、入昌平黌、業成、周遊海内。文久中過大磯駅、父老欽其才学、請留住、先生乃下帷授子弟。時海内多故、駅吏無文字、不能処事、受先生指導者不少。明治之初頒学制、先生就師範校、受授業法、伝之洵綽大住二郡小学教員、監督二郡学務、教化大行。十六年文部省賜一等賞品。先生自出郷既四十年、未嘗消息、家人以為已亡、建碑招魂。先生聞毅移住東京、突如來訪。毅疑其為幽鬼、迎之則真也。相抱而泣、自此源源往來、舅甥之情、切於少時。先生齡躋古稀、辭職而老。郷親聞其生存、招之不已。先生謂志未成、稍成家、亦足面郷親。乃往、大受款待而還。四十一年一月七日病歿、寿八十。举馭悼惜、用馭費葬之善福寺塋。配小宮氏、無子、養坂部氏子權次郎為嗣。先生天資淡泊寡欲、不為人所厭、簡易沈黙、而文才煥發、温柔不忤物、而処事有条理。可不謂備君子之道者乎哉。頃門人相謀建碣、徵毅銘。銘曰、

〔中洲文稿〕第三集所収

### 【参考資料3】

#### 鑿池墾田記

中備大谷村有池、号竈人。地勢平行、堤土白壤、水每漏泄、弗可備灌溉。村民相謀、欲修築之。里正小野君曰、此地宜田、而弗宜池。縱令修之、不久復漏泄。不若墾之為田、更鑿新池、無再修之患。乃相地于夕崎尻曰、此地勢汚而土墮、弗宜田、而宜

池。請鑿之、衆謂俞。然因循弗興役者有年矣。會比年旱災、窮民束手就饑。小野君謀曰、及此時興役、窮民獲力作以救其饑矣。衆又謂俞。遂以安政甲寅二月始、以其乙卯九月成。号曰藻塩池、没田凡六段餘。因又墾竈人池、以丙辰三月始、以其四月成。得田凡一町六段餘。此兩役也、給費者、為小野君、及村之豪農川出元俊、中島舒行。官因分給其一町于三人以償之、以其六段餘、償新池没田云。小野君、名以正、余舅氏也。頃日就訪、語次及此、遂徵余記。余謂、凡事有利必有害、有得必有失。今君鑿池而弗没良田、墾田而弗費官財、又救饑而弗耗廩米、有利而無害、有得而無失。自匪謀事之詳而処物之宜、惡克如此哉。是弗可以弗記。 桐南居士三島毅卿

〔中洲文稿〕未収、小野家旧蔵資料

【參考資料4】

養志亭記

毅之客歲出郷也、舅氏小野君來餞且告曰、吾將為家翁築一小亭。汝宦學之暇、幸能記之。毅謹諾而別。方是時亭未成、舅氏蓋以意命之耳。既而毅寓于勢之津藩、異書奇編之多、良友佳交之広、且夕研討、無操觚之暇。而舅氏之命未嘗不來往於意中。歲月匆匆既過一期、料亭既成矣。將欲為之記、而山川悠遠、音信契濶、營構之時月与亭舍之広狭、猶且不及知焉、將何以記之也。雖然嚮也舅氏以意命之於亭未成之前、今毅以意記之於亭已成之後、何不可之有。舅氏中備大谷人、而父君即毅外大父。大父之為大保正、其居幽僻、不便奉職務。乃独寓于封君治邑之側、与旧居相距殆一日程。一歲告帰、僅々不過一兩次。於是舅氏不能左右就養、思慕之餘、命画工製肖像、昕夕拜跪以当定省、意猶不厭也。遂有宮築之舉、蓋以供其婦休燕息之所也。因知亭舍之修潔、筵茵之重厚、固足以安四肢百体。而山巒之奇秀、花木之燦爛、禽鳥之啾々然、可以悅目可以娛耳。与夫陸珍海錯之可以適口、亦必莫不備矣。雖然是形体之孝耳、口腹之養耳。若使親之意不安於亭舍耶、修潔与穢陋何異焉。不悅於山巒耶、奇秀与童緒何挾焉。苟安之悅之耶、穢陋亦修潔也、童緒亦奇秀也。推之而言、可娛可適、亦惟顧親之意如何耳。然則志意之養至焉、形体之孝次焉。舅氏學之修、道之明、其必有見於此者。姑述毅之意見以待他日之質叩。適舅氏書到曰、亭既成。吾有慕會子、名曰養志。汝盍亟記之。嗚呼奇哉、舅甥之意不謀而合、足可以記也。遂書其言以付郵筒。

嘉永歲次尚章赤奮若猶清和月、選於伊勢安濃津橋居楓窗下。甥三島毅拜。

〔中洲文稿〕未収、小野家所蔵資料中に會見

鑿池墾田記

中備大谷村有池。號竈人。地勢平衍。堤土白壞。水每漏泄。弗可備灌溉。村民相謀。欲修築之。里正小野君曰。此地宜田。而弗宜池。縱令修之。不久復漏泄。不若墾之為田。更鑿新池。無再修之患。乃相地于夕崎尻。曰。此地勢汚而土填。弗宜田。而宜池。請鑿之。衆謂俞。然因循弗興役者有年矣。會比年旱災。窮民束手就饑。小野君謀曰。及此時興役。窮民獲力作以救其饑矣。衆又謂俞。遂以安政甲寅二月始。以其乙卯九月成。號曰藻塩池。没田凡六段餘。因又墾竈人池。以丙辰三月始。以其四月成。得田凡一町六段餘。此兩役也。給費者。為小野君。及村之豪農川出元俊。中島舒行。官因分給其一町于三人。償之。以其六段餘。償新池没田云。小野君名以正。余舅氏也。頃日就訪。語次及此。遂徵余記。余謂。凡事有利。必有害。有得必有失。今君鑿池而弗没良田。墾田而弗費官財。又救饑而弗耗廩米。有利而無害。有得而無失。自匪謀事之詳。而處物之宜。惡克如此哉。是弗可以弗記。

桐南居士三島毅卿



目次

○はじめに (二松学舎大学教授・大学資料展示室運営委員 町泉寿郎)

○小野家と啓鑑亭光右衛門 ―三島中洲撰文にかかる小野家関係の文―

「小野家系図略」

I 三島中洲の小野家宛書簡

- 1 小野四右衛門宛 三島中洲書簡 (安政5年11月18日付)
- 2 小野四右衛門宛 三島中洲書簡 (文久3年11月7日付)
- 3 小野慎一郎宛 三島中洲書簡 (明治38年2月28日付)
- 4 小野慎一郎宛 三島中洲書簡 (大正5年12月7日付)
- 5 小野静夫宛 三島中洲書簡 (明治15年8月9日付)
- 6-a 小野達郎宛 三島中洲書簡 (明治43年3月14日付)
- 6-b 小野達郎宛 三島中洲書簡 (明治43年4月4日付)
- 7 小野慎一郎 (松蔭) 宛 三島中洲書簡 (大正元年9月12日付)
- 8 小野慎一郎 (松蔭) 宛 三島中洲書簡 (大正4年12月8日付)

II 三島中洲宛 諸家書簡

- 9 入江為守書簡 (明治36年3月1日付)
- 10 田内三吉書簡 (大正2年10月14日付)
- 11 土屋鳳洲書簡 (大正5年10月5日付)
- 12 外山脩造書簡 (明治23年頃 某月25日付)
- 13 林学齋書簡 (明治33年8月28日付)
- 14 依田学海書簡 (明治42年12月24日付)
- 15 上直侍従書簡 (落合為誠の筆跡、大正初期5月27日付)
- 16 尚書侍従書簡 (明治某年4月24日付)
- 17 東宮職書簡 (明治35年5月29日付)
- 18 東宮職内廷掛書簡 (明治某年4月25日付)
- 19 渋沢栄一書簡 (明治43年1月12日付)

18 ~ 27

10 ~ 17

- 20 渋沢栄一書簡 (明治42年6月2日付)
- 21 渋沢栄一書簡 (大正5年12月付)

III 小野家旧蔵の三島中洲の書

22 三島中洲揮毫「六言成句屏風」六曲一双

右隻「満招損謙受益」「後其身而身先」「人心陰於山川」

「窮亦楽通亦楽」「特人不如自恃」「與師處與友處」

左隻「利不百不變法」「百聞不如一見」「前車覆後車誡」

「必有忍其乃濟」「養心莫善寡欲」「禍起於不知足」

28 ~ 29

IV 資料篇

(1) 小野家宛三島中洲書簡

小野四右衛門宛、小野静雄宛、小野慎一郎宛、小野達郎宛

30 ~ 44

(2) 三島中洲宛諸家書簡 (五十音順)

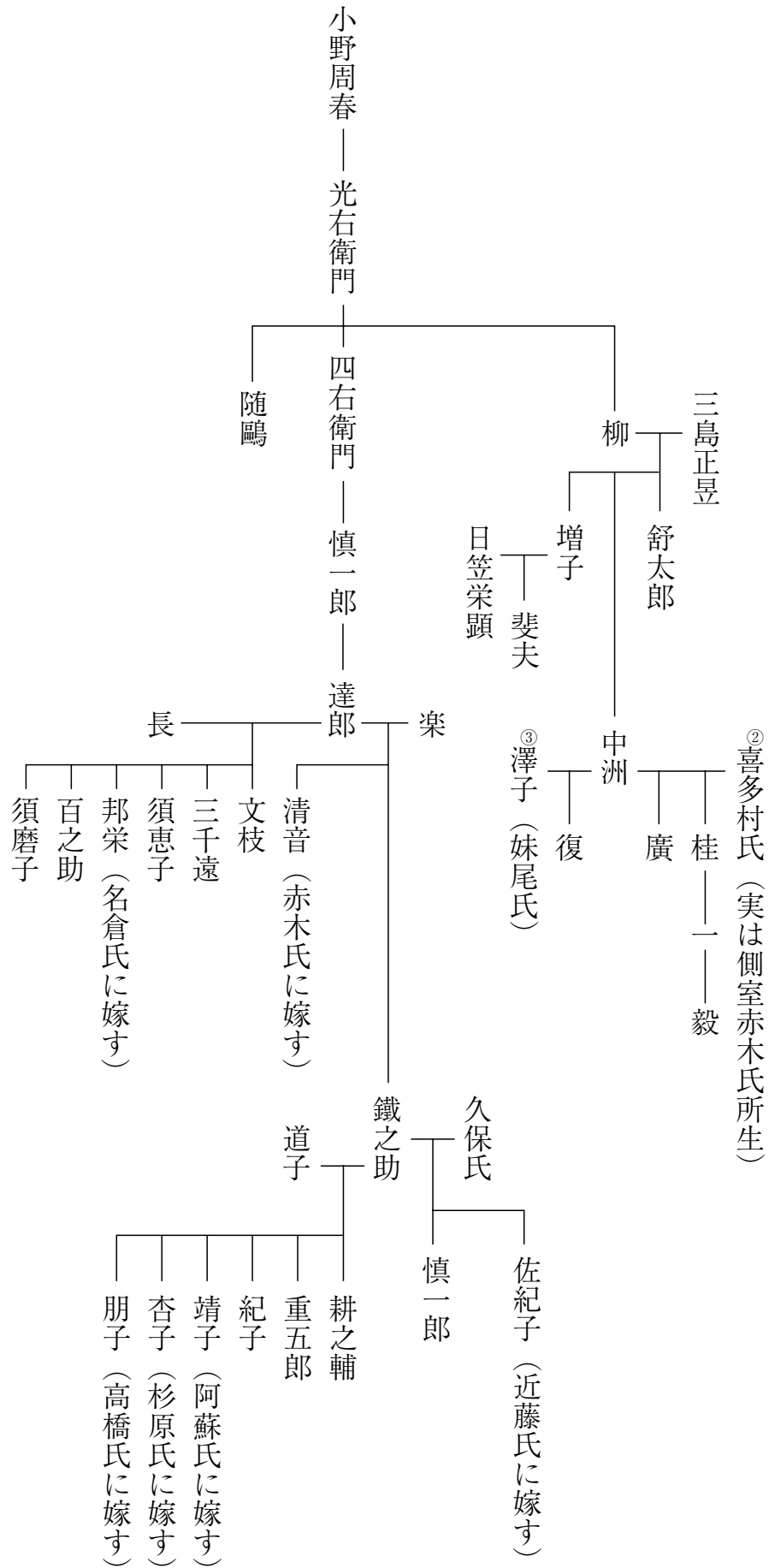
足立正聲、板倉勝達、稲葉正繩、入江為守、岩倉具定、岩崎奇一、  
 岩溪蓑川、大森鍾一、岡内重俊、落合為誠、小野湖山、楳取素彦、  
 川北梅山、川田甕江、日下部鳴鶴、栗野慎一郎、皇后宮職、郷純造、  
 小松原英太郎、近藤久敬、西郷吉義、齋藤桃太郎、阪谷芳郎、阪本鈺之助、  
 侍従、信夫恕軒、柴原和、渋沢栄一、島田篁村、島田泰夫、杉孫七郎、  
 関義臣、高辻修長、竹内正策、竹添進一郎、田内三吉、玉乃世履、  
 土屋鳳洲、東宮職、外山脩造、永坂石球、南摩綱紀、西穀一、錦小路在明、  
 野口寧齋、花房義質、馬場三郎、林学齋、原田一道、土方久元、広橋賢光、  
 福島安正、増戸武平、股野琢、松浦詮、松浦厚、萬里小路幸子、村岡良弼、  
 本居豊穎、横田香苗、吉田庫三、依田学海、渡邊千秋

45 ~ 62

凡例

- 一 本書には、小野家旧蔵資料のうち、小野家歴代に宛てた三島中洲書簡と、諸家から三島中洲に宛てた来簡、および三島中洲の書を取めた。
- 一 資料篇には、小野家歴代に宛てた三島中洲書簡八二通と、諸家から三島中洲に宛てた来簡一一九通を収録した。
- 一 本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。
- 一 人物の呼称は姓名を基本としつつ、姓号で表記した場合もある。
- 一 年齢表記は、旧暦の生年を起点とした数え歳による。
- 一 図版キャプション・解説・翻刻・訓読は、町泉寿郎が担当した。
- 一 本書は、二松学舎大学資料展示室の「二松学舎創立二四五周年記念企画展」三島中洲と近代―其八―新収の小野家旧蔵資料」(期間 2022.10.6 ~ 11.26)の展示図録を兼ねるものである。

# 【小野家系図略】



※本系図は、小野重五郎氏、および小野百之助の長男晃嗣氏のご教示を得て作成したものです。







光右衛門様  
 謹啓  
 三島中洲

傳中洲法部去後分大谷  
 小野慎一郎宛  
 下段

奉書  
 小野公王十四条控社孫三島中洲

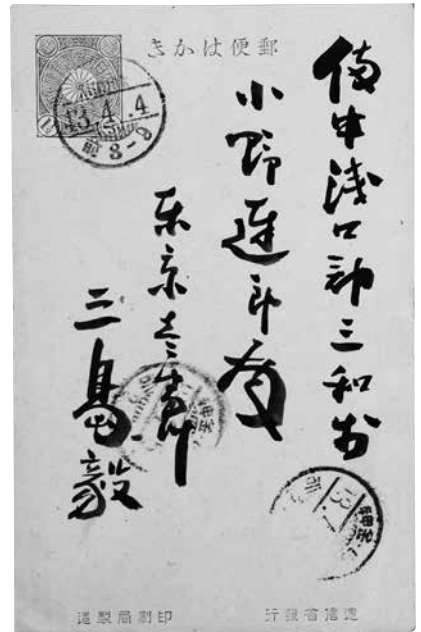
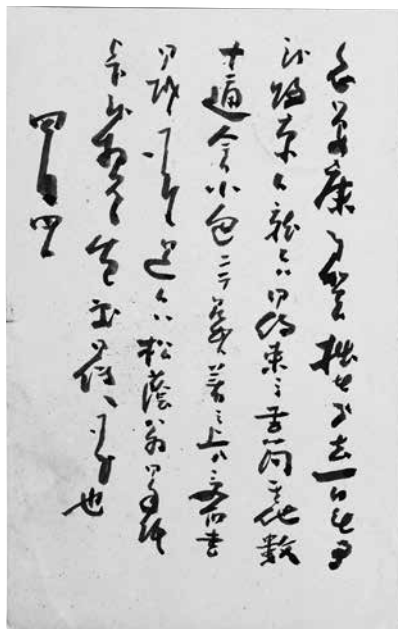
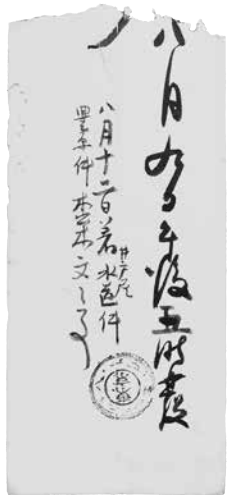
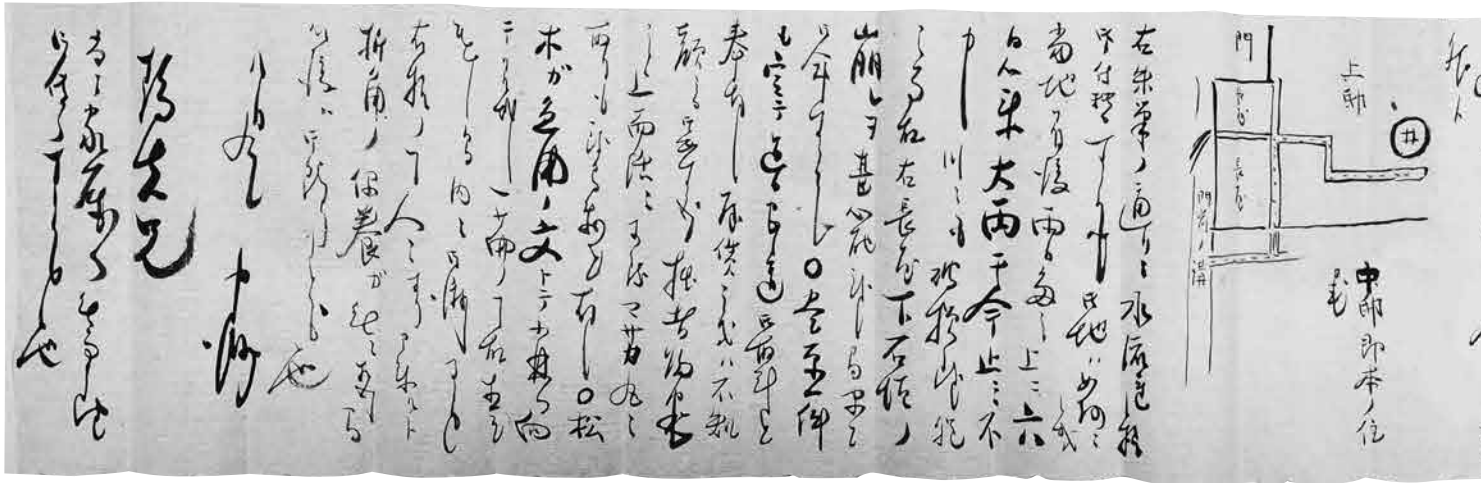
小野公王十四条控社孫三島中洲  
 光右衛門様  
 謹啓  
 三島中洲

光右衛門様  
 謹啓  
 三島中洲  
 先覚ト申字ハ孟子ヨリ出タル語  
 世間ニ数学ヲ知ラサル時ニ師匠ナシテ数学ヲ發明シタリト云コトニテ、輕ク御覽被下間敷候也  
 岡山県先覚  
 先覚ト申字ハ孟子ヨリ出タル語  
 世間ニ数学ヲ知ラサル時ニ師匠ナシテ数学ヲ發明シタリト云コトニテ、輕ク御覽被下間敷候也  
 岡山県先覚

4 | 下段：小野慎一郎宛 三島中洲書簡（大正5年〈1916〉12月7日付、翻刻Ⅳ（1）69）

小野家では光右衛門の顕彰、贈位を念願しており、中洲に対しても機会あるごとに働きかけた。本書簡は中洲が撰文した碑文中の表現に慎一郎が異議を唱えたことに対する中洲の回答である。先年、光右衛門に学んだ数学者藤田秀齋（1822～1878、総社の葉種屋）が岡山県下の測量・地図作成事業が終了したことを記念して、中洲にその撰文を依頼し光右衛門の顕彰碑を建てた（「啓鑑亭小野翁碑」『中洲文稿』第1集卷1下所収）。本書簡からは、当該碑中、優れた和算家で耕地測量を提唱した光右衛門を評して「岡山県先覚」と表現したこと、それに対して孫の慎一郎が光右衛門の評価としてそれでは不十分であると不満を漏らしたことが分かる。中洲は「内心ニハ天下ノ先覚トカ世界ノ大家トカ申シ度ハ山々ナレトモ、縦令適當ニテモ自負自慢ヨリハ謙遜ノ方ユカシ」と言い、また「先覚ト申字ハ孟子ヨリ出タル語」であって、「世間ニ数学ヲ知ラサル時ニ師匠ナシテ数学ヲ發明シタリト云コトニテ、輕ク御覽被下間敷候也」と書き送って、慎一郎の理解を求めた。但し、「啓鑑亭小野翁碑」には「岡山県先覚」という表現は見えない（或いは題字として書かれたものであろうか）ので、この措辞については更に検討の余地がある。





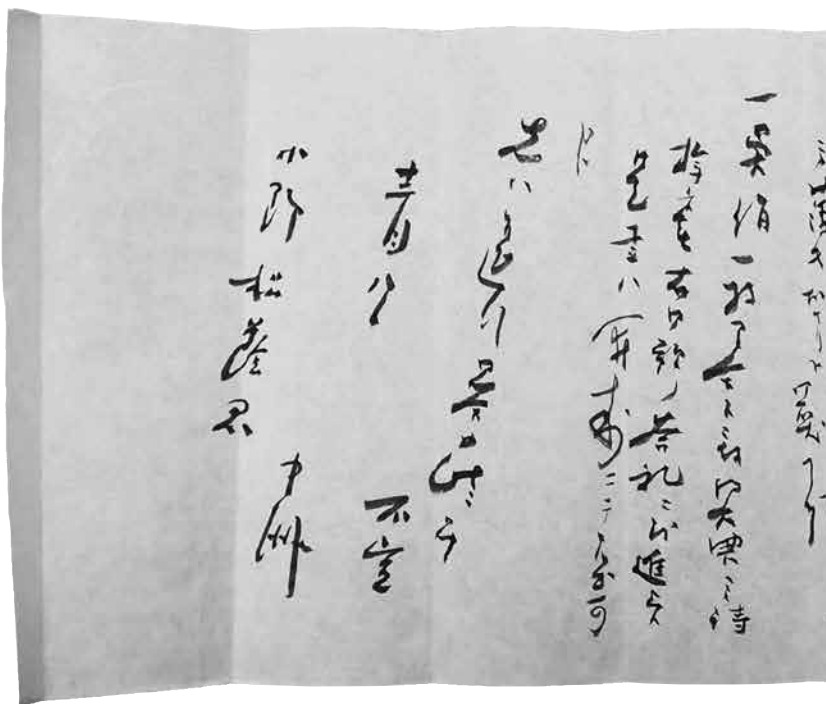
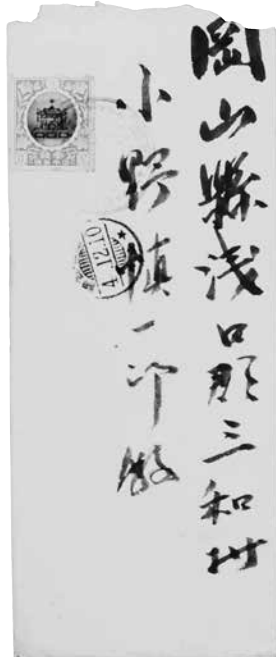
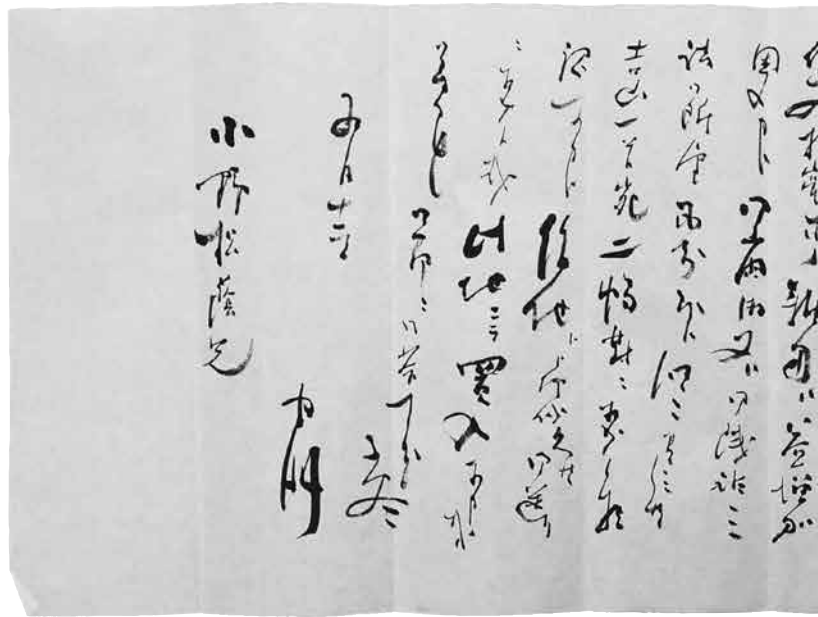
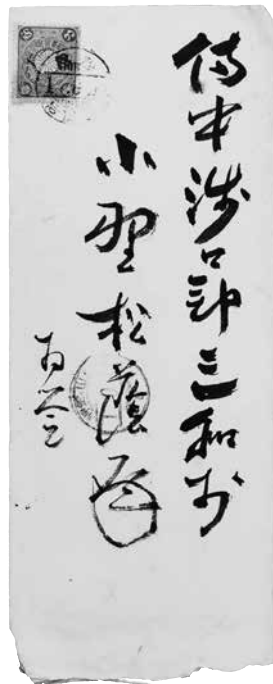
6-a 前頁下段：小野達郎宛 三島中洲書簡 (明治43年〈1910〉3月14日付、翻刻Ⅳ (1) 44)

6-b 本頁下段：小野達郎宛 三島中洲葉書 (明治43年〈1910〉4月4日付、翻刻Ⅳ (1) 46)

書簡⑥-aから、従弟小野慎一郎の子小野達郎が中洲に手元にある有名人の書簡を譲ってほしいと所望したこと、また葉書⑥-bから、中洲がこれに応じて多数の書簡を小野家に譲ったことが分かる。現存する小野家旧蔵の中洲來簡の量から考えて、何度かに分けて譲渡されたと見られるが、この時に譲られた数十通がその最初であった可能性が高い。この時期の中洲は、1月12日に宮中で講書始の進講を行い（『論語』禹吾無間然章）、1月23日から東宮に従って葉山に避寒し、4月1日に帰京した。宮内省御用掛として東宮に奉仕し、また渋沢栄一と「論語と算盤」説で意気投合した晩年の中洲の交流範囲は、従来の学者・文人に加えて、宮内省関係官僚や渋沢栄一をはじめとする実業家など新たな広がりを見せていた。



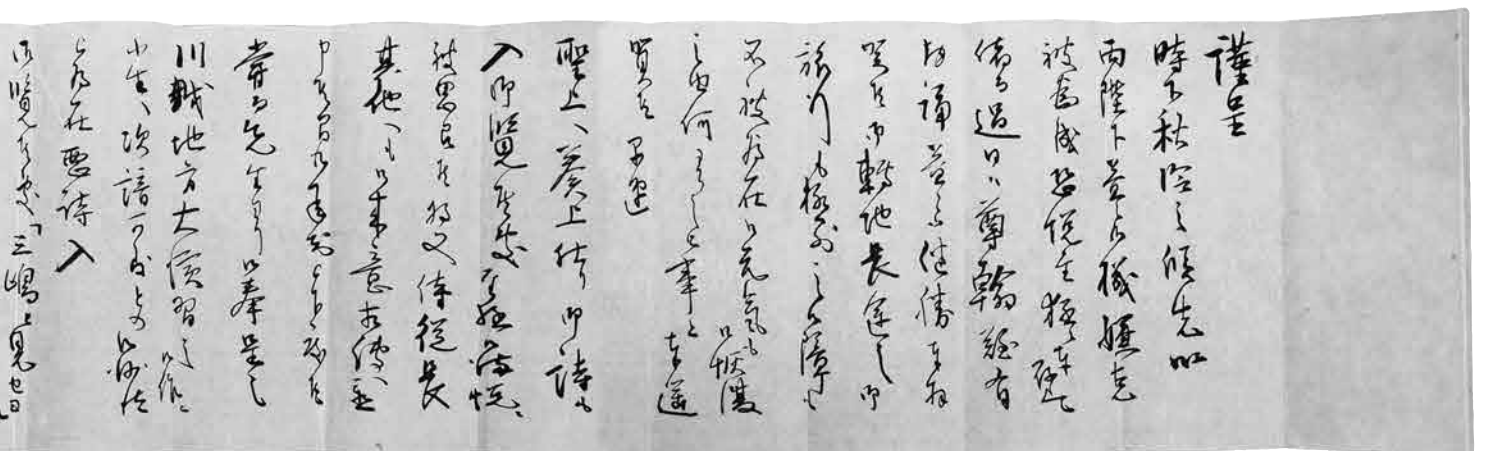




8 | 下段：小野慎一郎（松蔭）宛 三島中洲書簡（大正4年（1915）12月8日付、翻刻Ⅳ（1）66）

大正天皇の即位礼・大嘗祭は当初、大正3年（1914）に予定されていたが、同年4月に昭憲皇太后が崩御したため一年延期となり、大正4年（1915）11月10日に京都御所で即位礼、同14日に大嘗祭が挙行された。この年86歳の中洲は、6月21日に参内した際に階段を踏み外して負傷し、更に軽度の脳卒中を併発して言語不明瞭となり、大典にも列席できなかった。大典の際に中洲に男爵叙爵の誤報が流れたため、小野慎一郎から御祝が贈られたので、中洲は漏れ聞いた裏事情を語っている。首相大隈重信に公爵昇叙、宮内大臣波多野敬直に子爵昇叙、併せて中洲に男爵叙爵といったん決定していたが、大隈・波多野が辞退したため、中洲の叙爵も流れて勲一等・銀杯・賞金の御褒美に終わったと言うのである。なお、本書簡の封筒の筆跡は中洲とは別筆であり、中洲の三男復の筆にかかる。

II | 三島中洲宛 諸家書簡

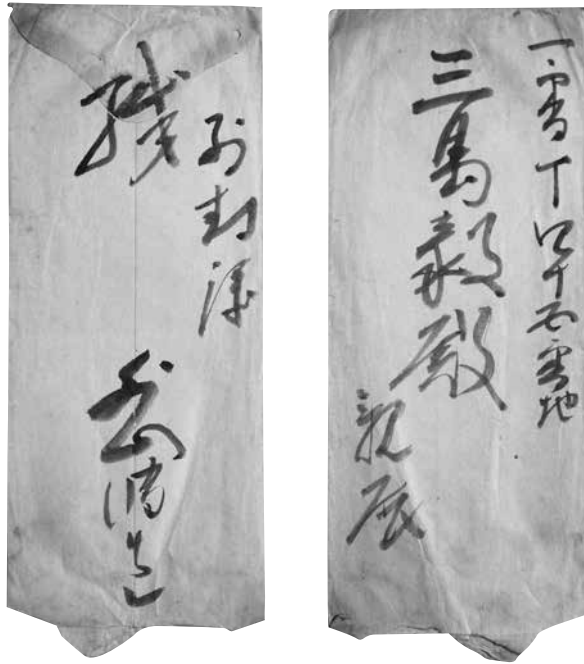


9 | 上段：入江為守書簡(明治36年(1903)3月1日付翻刻Ⅳ(2)04①)

入江為守(1868～1936)は公家冷泉為理の三男として生まれ、入江為福の養子となり入江子爵家を継いだ。入江為守は明治11年(1878)に開塾間もない二松学舎に学び、貴族院議員、御歌所長などを歴任。この当時は東宮侍従長の職にあり、東宮侍講の中洲と親交があった。本書簡は、その内容から判断して、明治36年1月から3月にかけて両者が東宮に随従して沼津に滞在した時のものと判断される。この2月15日に中洲は入江と医師安藤正胤を案内して澤田山大中寺(臨済宗妙心寺派)を観梅に訪れ、文事に堪能な第24代住職月潭玄璋の歓待を受けて詩文を唱和した。これが縁となって、大中寺に明治37年1月15日と明治38年1月28日に東宮行啓、明治42年に昭憲皇后が三皇孫を伴って行幸し、その後も沼津御用邸に滞在中の皇族が頻繁に訪れるようになった。大中寺には中洲と入江の合作の書画など、当時の資料が伝存している。なお、入江はこの年に二松義会(二松学舎の運営組織)の会長にもなっている。





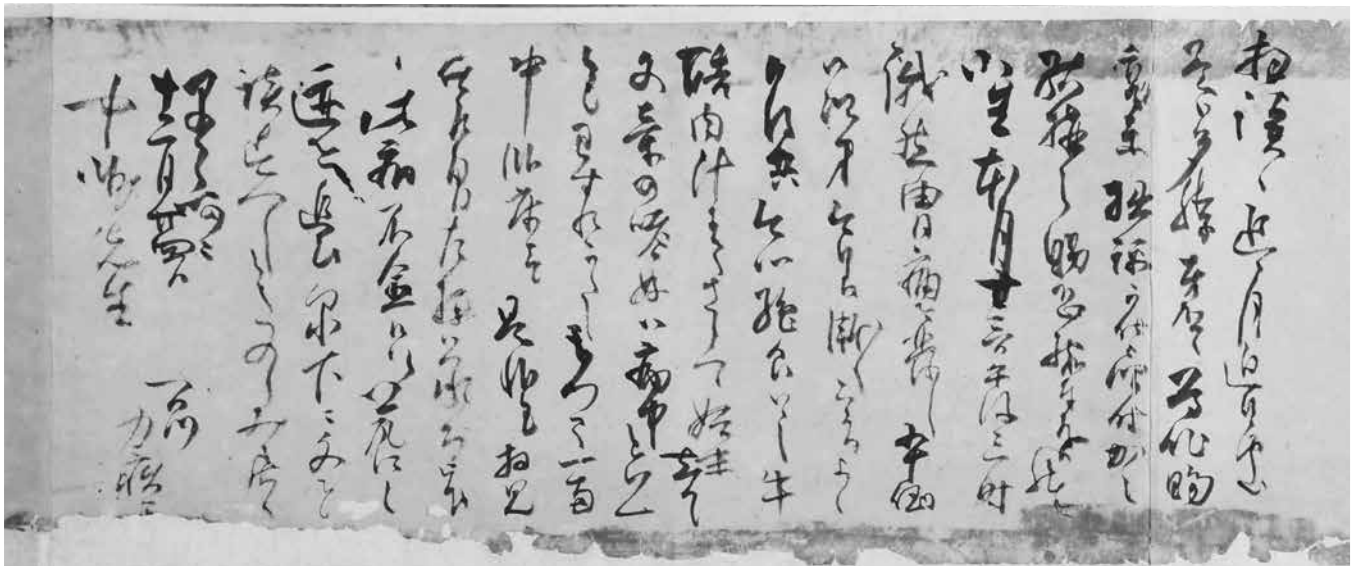
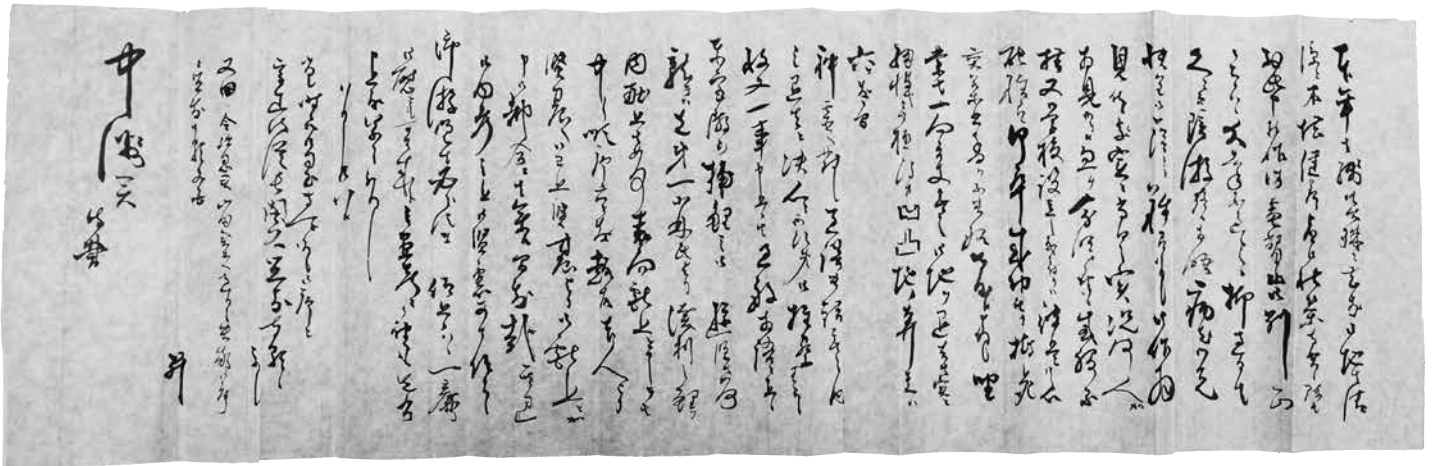


◀三島中洲宛て外山脩造書簡の封筒



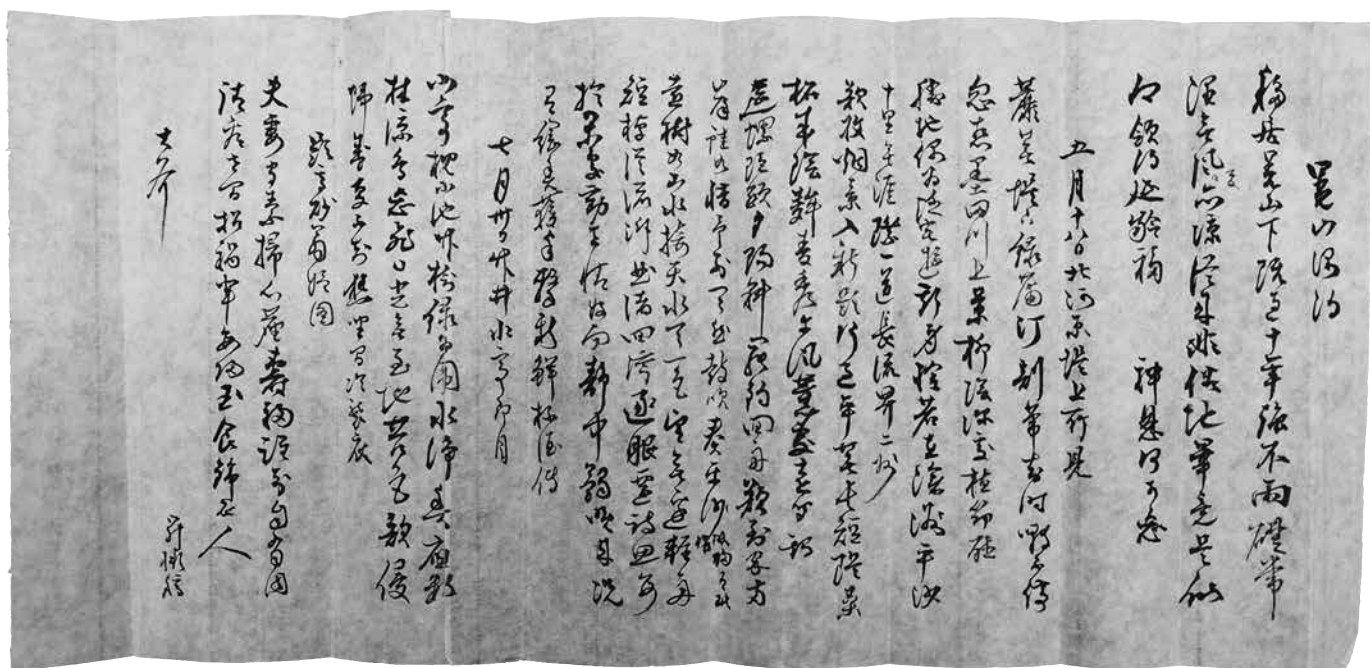
## 12 下段：外山脩造書簡(明治23年(1890)頃 某月25日付、翻刻Ⅳ(2)40)

外山脩造(1842～1916、幼名寅太、号雲外)は越後長岡の庄屋安井家に生まれ、長岡藩士外山家を継ぎ、河井継之助や清川八郎に学び、18歳で昌平坂学問所書生寮に入った。この時中洲は二度目の書生寮遊学中であったため、山田方谷門下で親交のあった河井は中洲に外山の監督役を依頼した。外山は戊辰戦争の際に官軍に徹底抗戦した河井に従い、奥会津まで転戦してその最後を看取った。外山は河井の遺命に従って商業に従事すべく慶應義塾に学び、大蔵省銀行課に入り、渋沢栄一の斡旋によって大阪の第三十二銀行の総監を振り出しに、日本銀行大阪支店長、浪速銀行頭取などを歴任して大阪銀行界をリードした。また阪神電鉄をはじめ関西の数多くの会社設立に関与し、関西財界の発展に足跡を残した。本書簡は、河井継之助の碑文(『中洲文稿』第二集所収)を撰文することになった中洲が外山脩造に意見を求めた時のもの。長岡市悠久山に現存する「故長岡藩総督河井君碑」は明治23年に建立されているので、本書簡も同年頃に書かれたものと推定される。外山には必ずしも中洲の文に承服できない箇所があったらしく、一言半句も死者(河井)の精神に違背しないようにしたいと言って具体的な意見を書き送り、併せて参考のために一書をしたため、その取捨選択を中洲に委ねている。なお、大正5年の外山歿後、中洲は外山の墓碑も撰文している(『中洲文稿』第四集所収)。

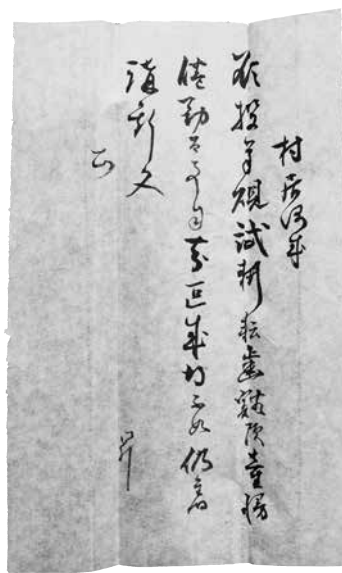
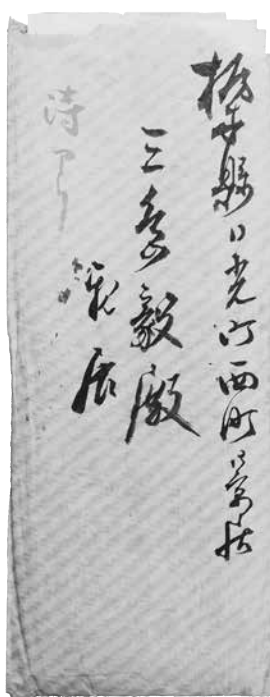


### 13 | 上段：林学齋書簡（明治33年〈1900〉8月28日付、翻刻Ⅳ（2）48）

林学齋（1833～1906、名昇、字仲平、諡号文靖）は幕府儒官林復齋（1801～1859、述齋の六男）の二男。はじめ分家（しょうりけ小林家）の家督を継承していた父復齋が、嘉永6年（1853）甥壯軒の早世によって大学頭家を継承。復齋の長男鶯溪は分家を継承していたので、復齋没後、二男の学齋が大学頭となった。明治維新後、静岡藩に移り、明治7年（1874）に東京に戻り司法省明法権大属となる。同10年（1877）に群馬県師範学校教師に就任、これには県令楫取素彦と芳野金陵（久坂玄瑞の師）の交流による斡旋があった。同21年（1888）に日光東照宮主典、のち禰宜を勤めたが、同33年（1900）に病気のため辞職し、旧領の武蔵大里郡大幡村柿沼に隠棲した。学齋が日光の神官を辞職した年の8～9月、東宮の日光御用邸避暑に随従して中洲が日光に滞在した。本書簡からは、学齋が日光を訪れて中洲らと交遊したこと、十数年の日光滞在経験を持つ学齋が「捕鯉」など東宮の遊覧について提案したことが知られる。晩年の学齋が、神官業が体力的に難しくなってからも、座業には問題なく教育事業に意欲を持っていたことも知られる。なお、中洲撰文にかかる「幕府大学頭従五位下文靖林先生墓銘」（『中洲文稿』第3集）が市ヶ谷林家墓地に残っている。



▲林学斎詩稿

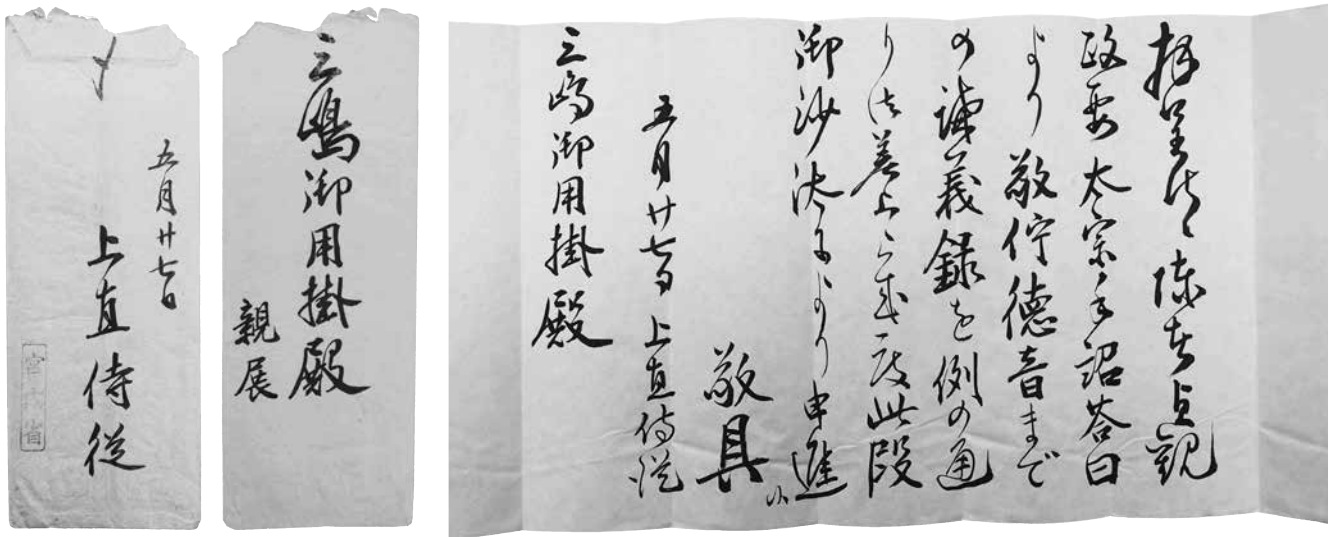


三島中洲宛て  
林学斎書簡の封筒▶

14 | 前頁下段：依田学海書簡(明治42年(1909)12月24日付、翻刻Ⅳ(2)62)

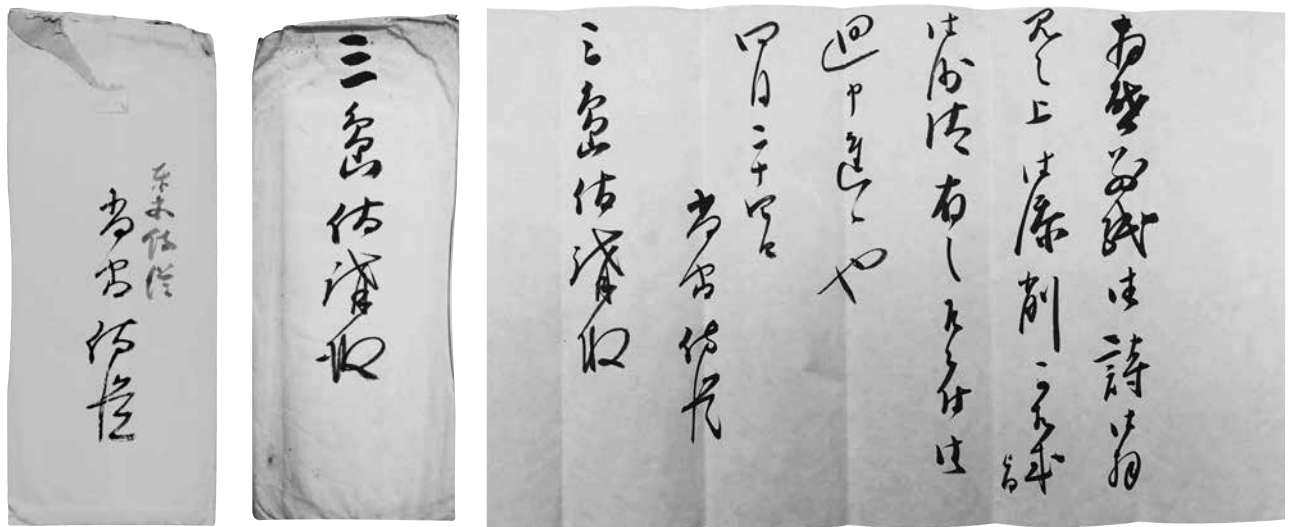
依田学海(1834～1909、名百川)は下総佐倉藩生まれの漢学者。江戸で藤森弘庵に学び、同門の川田麴江(1830～1896、名剛)と生涯にわたる親交があった。維新後は藩公議人、権大参事となり、廃藩置県後、新政府に出仕して太政官修士局編修となる。修史局内の川田麴江と重野成斎の対立により、文部省権少書記官に転出し教科書編集などに従事した。文筆を能くし、森鷗外ら若い世代の文学者とも交流し、演劇改良運動にも関わって戯曲を執筆している。本書簡は学海が12月27日に逝去する3日前に「疾を力めて」執筆した絶筆というべきもの。中洲が近作の文を学海に送って批評を依頼したところ、学海は去る12月13日に胃痛にて卒倒し病床にあり、この日小康を得て返書をしたためた。学海は一二日中に拝読し批評したいと述べつつ、この病気が治らなければ、川田麴江の後を追って泉下に文を談ずることを楽しみにしていると記しており、自らの最期を覚悟していたことが知られる。





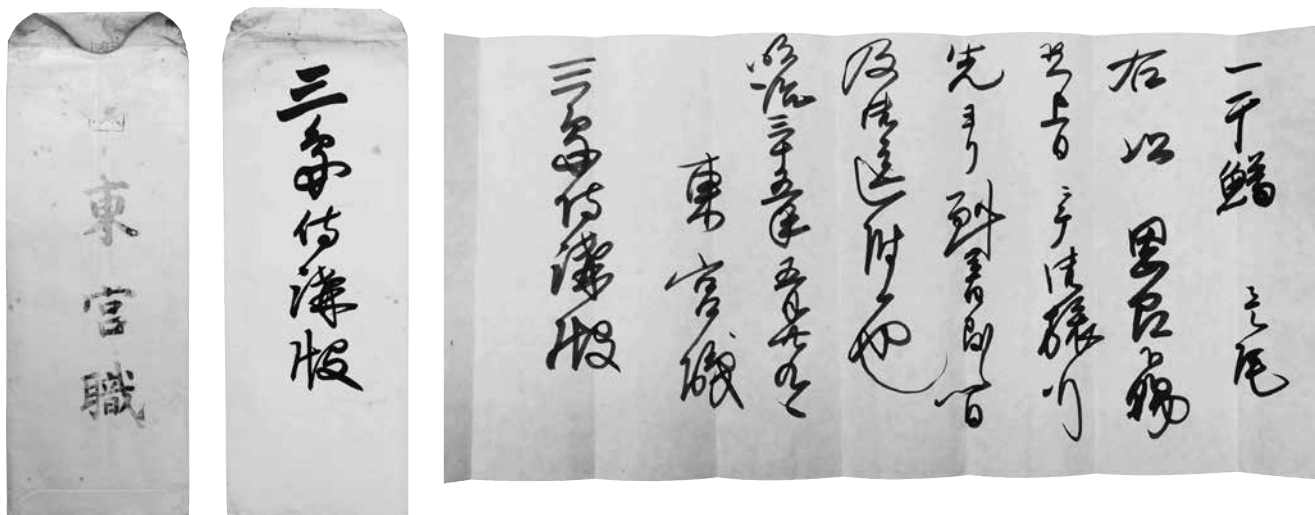
### 15 | 上段：上直侍従書簡（落合為誠の筆跡）（大正初期5月27日付、翻刻Ⅳ(2) 25④）

落合為誠(1866～1942、号東郭)は熊本出身で、明治天皇侍講元田永孚の外孫。帝大文科大学選科に学び、漢詩に堪能であった。五高・七高教授を経て、宮内省に召され、大正天皇侍従となる。本書簡は、天皇の命によって中洲が進講した『貞観政要』の講義内容を提出するようという依頼。



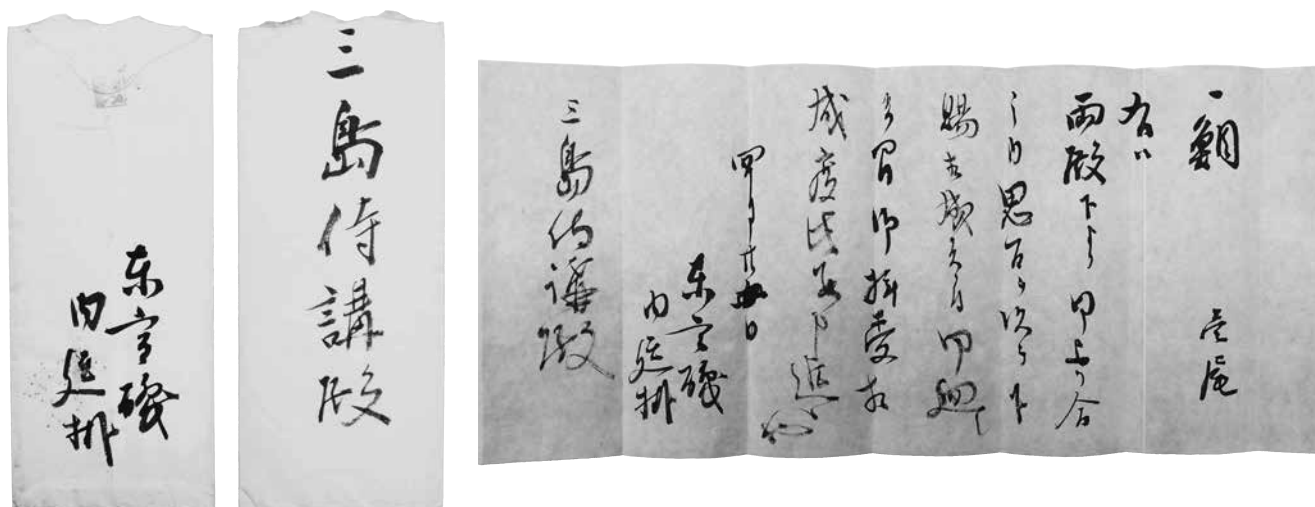
### 16 | 下段：尚書侍従書簡（明治某年4月24日付、翻刻Ⅳ(2) 25①）

本書簡は、東宮侍従から中洲に、東宮が作った漢詩に対して添削を求めたもの。中洲は添削を加えた東宮の詩稿を東宮侍従に宛てて郵送で返却することもあったらしく、本学には、侍従落合為誠から詩稿は使者の内舎人に渡すように、万一の事態を考えて決して郵送しないよう申し入れた書簡も残されている。



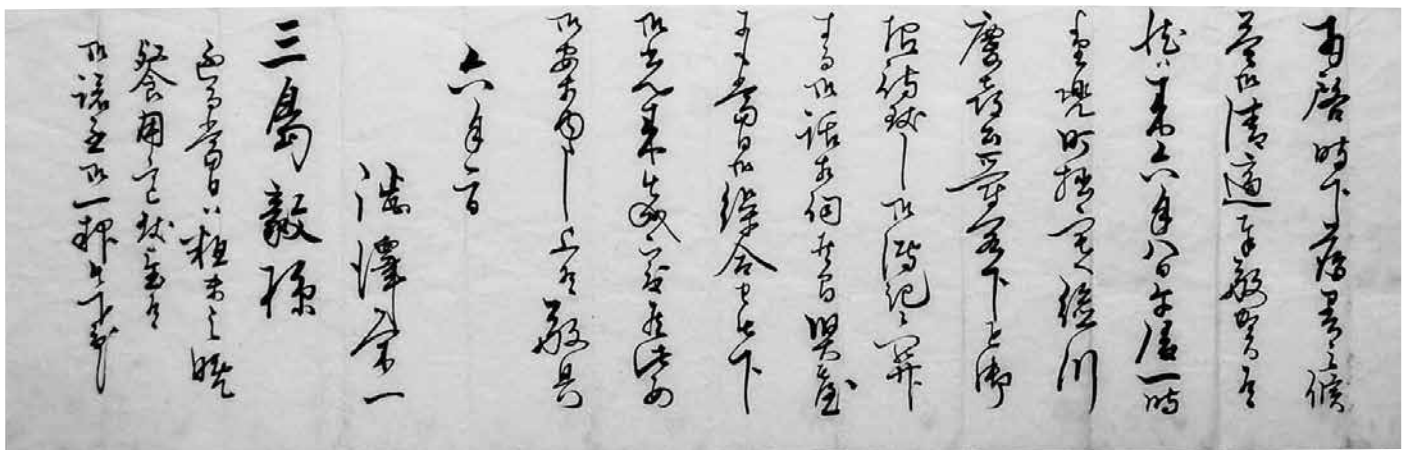
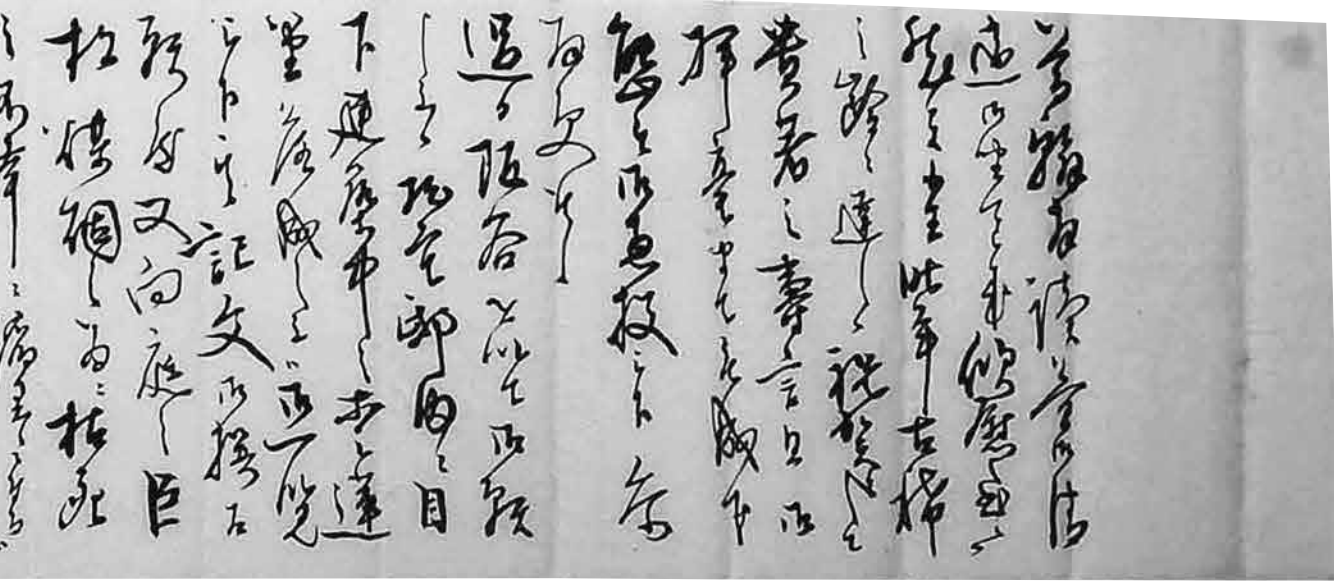
17 | 東宮職書簡 (明治35年〈1902〉5月29日付、翻刻Ⅳ(2)39③)

明治35年(1902)5月、東宮は信越北関東各地を18日間にわたって巡啓したが、前年に脳溢血を再発している中洲は随従せず、東宮が行啓先で目にするであろう川中島古戦場や佐渡の順徳天皇陵に言及した詩を贈った(七絶「壬寅夏奉送東宮巡遊信越」)。旅先の東宮からは、本書簡に見える干鱒や凍蕎麦(5/27)など各地の名産がしばしば贈られた。中洲は贈られた蕎麦について詠じた漢詩を、随従している同じく東宮侍講の本居豊頼に送っており、東宮と侍講たちの間に親密な詩歌の交流があったことが窺える。



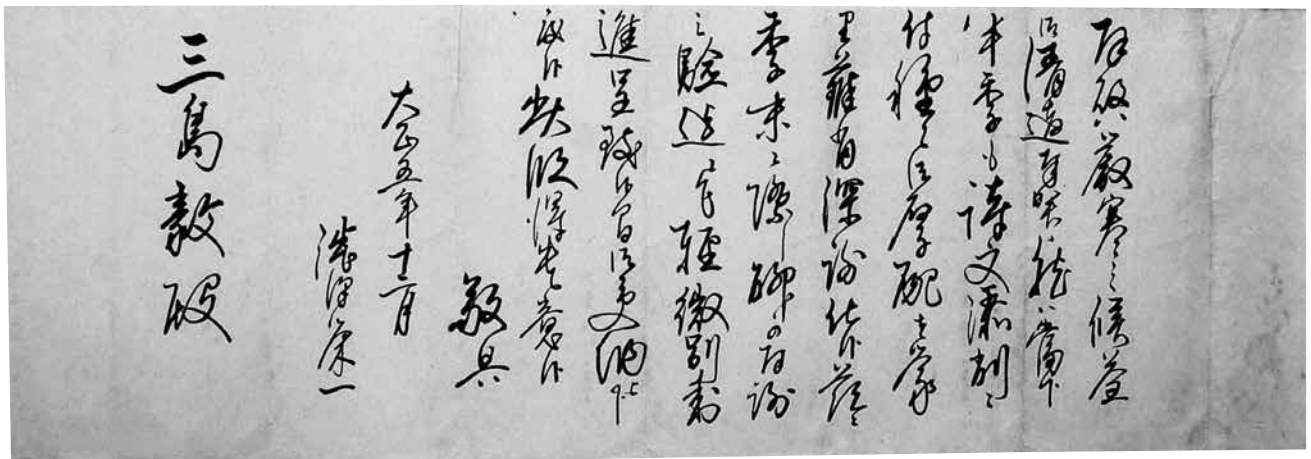
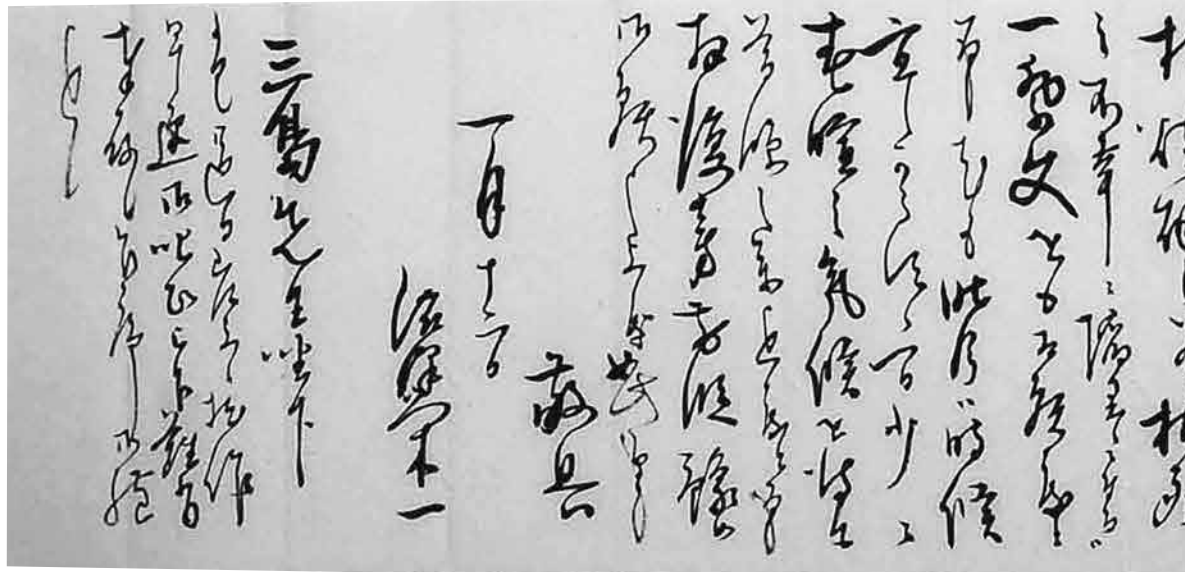
18 | 東宮職内廷掛書簡 (明治某年4月25日付、翻刻Ⅳ(2)39⑦)

東宮・東宮妃両殿下の召し上がり物として用意された鯛のうちから一匹、贈られた時の書簡。菓子などが下賜されることもしばしばあり、時には小野家ら親族にお裾分けされている場合もあり、その時の短かい書簡も残されている(表紙・翻刻Ⅳ(1)80参照)。



### 19 | 上段：渋沢栄一書簡（明治43年〈1910〉1月12日付、翻刻Ⅳ（2）28①）

中洲は明治42年に渋沢邸に招かれた際、渋沢が古稀記念に贈られた書画帖『介眉帖』を見、その中の小山正太郎画「論語算盤図」に興味を惹かれ、この絵に関する文章を作って贈りたいと考えた。12月に米国から帰朝した渋沢が渡米中の詩を中洲に送付した。この機会を捉えて、中洲は「題論語算盤図賀渋沢男古稀」を作文し、同43年（1910）1月9日に清書して渋沢に贈った。1月9日の書簡において三島は、「ちょっと諧謔に等しく聞へ候へども、実は小生年来の持論、義利合一の理、真面目のものに御坐候」と述べており、この文が「義利合一論」以来の持論であり、その趣旨に自信を持っていたことが窺える。本書簡はその返書であり、「御揮毫」（上段5～6行目）が「題論語算盤図賀渋沢男古稀」のことと推定される。「貴著之壽言」（上段5行目）は中洲の古稀記念に刊行された『従心壽言』（1901年刊）。渋沢からは、飛鳥山邸内に移築中の朝鮮古建築「愛蓮堂」と枯死した巨松に対する文の依頼があった（ともに『中洲文稿』第4集所収）。



**20** | 前頁下段：渋沢栄一書簡（明治42年（1909）6月2日付、翻刻Ⅳ（2）28②）

古稀を迎えた明治42年（1909）の渋沢は、日糖疑獄事件が誘因となって多くの役職を辞任した後、米国実業界からの招聘を受けて渡米実業団を組織して8月に渡米する。また渋沢は旧主徳川慶喜の復権を願い、その伝記編纂に使命感を持った（『徳川慶喜公伝』1917年刊）。当初編纂を依頼していた福地源一郎が病没したため、渋沢はあらためて国史学者三上参次に相談して新進学者を集め、慶喜から直に経験談を聞く「昔夢会」を組織し、明治40年～大正2年（1907～13）に26回の会合を開いた。中洲は幕末の老中板倉勝静の側近山田方谷の高弟であることから、渋沢が中洲を昔夢会に招き、中洲は計11回出席して自身の見聞を発言している。本書簡は、中洲が初めて出席した第4回昔夢会（6月8日）の招待状である。昔夢会は中洲が渋沢と面会する機会を増やし、翌年の「論語と算盤」の共感につながる。

**21** | 本頁下段：渋沢栄一書簡（大正5年（1916）12月付、翻刻Ⅳ（2）28④）

本書簡は、渋沢が中洲に継続的に詩文の添削を依頼していたことを示す資料。その添削に対して、渋沢から中洲に半期ごとに謝礼が送られていた。このほか、渋沢は和歌については、中村秋香や小出榮に添削を依頼していた。

### III 小野家旧蔵の三島中洲の書

22 三島中洲揮毫「六言成句屏風」六曲一双（大正3年（1914）、中洲85歳の時の揮毫）

右 隻



右から順に

- ①満招損謙受益（満は損を招き謙は益を受く）『書経』大禹謨
- ②後其身而身先（其の身を後にして而も身先んず）『老子』第七章
- ③人心險於山川（人心は山川よりも險し）『莊子』列禦寇
- ④窮亦樂通亦樂（窮するも亦た楽しみ通ずるも亦た楽しむ）『莊子』雜篇讓王
- ⑤恃人不如自恃（人を恃むは自ら恃むに如かず）『韓非子』外儲説右下
- ⑥與師處與友處（師と処り友と処る）『戦国策』燕策一

本作品は、小野達郎からの依頼を受けて、中洲が特別に大字で揮毫したものであったようである。「八十五翁」印が捺されていることから大正3年の揮毫にかかるものと分かる。この印は80歳台に入った中洲が頻用したもので、鳩居堂から改年ごとに贈呈されたもの。

左 隻



右から順に

- ⑦利不百不變法（利百ならざれば法を変ぜず）『史記』商君列伝第八
- ⑧百聞不如一見（百聞は一見に如かず）『漢書』趙充国伝
- ⑨前車覆後車誡（前車の覆るは後車の誡め）『漢書』賈誼伝
- ⑩必有忍其乃濟（必ず忍ぶこと有りて其れ乃ち濟す）『書経』周書君陳
- ⑪養心莫善寡欲（心を養ふは欲を寡くするより善きは莫し）『孟子』尽心下
- ⑫禍起於不知足（禍ひは足るを知らざるより起こる）『老子』第四十六章

大正2年2月・5月の中洲の書簡によれば(小野家宛三島中洲書簡60・63)、病後の中洲にとって大字の揮毫は疲労が甚だしく、大字による屏風一双といった特別な注文は潤筆料5割増しくらいと考えてほしい旨を小野氏父子に書き送っている。多方面からの依頼に忙殺されていた中洲はこの揮毫に数か月を要したらしい。中洲晩年の筆致がよく表れている。

## IV 資料編

※以下の翻刻文中における括弧は、( ) は翻刻者が加えた注記を示す。  
「」は欠損箇所を示す。「」は印字された文字であることを示す。

## (1) 小野家宛三島中洲書簡(年代順)

## 01 小野四右衛門宛三島中洲書簡(安政中 二月一三日付)

寸牘奉呈候。初暄之候、御体況愈御清勝可被遊御座、奉賀候。小子無事消暑仕候。乍憚御放慮可被遣候。誠ニ先月者山川御障無御座、御帰國被遊候御由、千萬御目出度奉敬賀候。久々の御面話、御大父様方御欣慰之段、奉遙察候。小子早速御款ニ参上可仕本意之處、修業中故、失禮仕候間、御海容可被遣候。乍憚御叔母様方へ御帰杖之御款奉願上候。先は右御款申上度、如許ニ御座候。惶恐々々。二月旬三日 小野尊舅坐下

追啓、御蔵之國史略、拝借仕候間、急便ニ八田部へ御出置可被遣候。偏ニ奉祈候。

## 02 小野四右衛門宛三島中洲書簡(安政五年(一八五八) 一月一八日付)

一書奉呈候。然ハ去月十八日塚村分書状到着、承り申候へバ、惣社御祖父様近来少々御不例ニ被為居候處、邊ニ指重り十七日ニ御卒去被遊候由、誠ニ仰天仕申候。嗚々御皆々様始御親類様中御愁歎奉察上候。塚村書状着之四五日前、中嶋分書状参り御病氣之様承り、早々見舞之書指出可申と奉存候へ共、幸便無御座候。相見合せ申候處、右之次第、誠ニ残念千萬ニ奉存候。当地へ相知れ申候ハ十四日ニ御座候故、廿日之忌ハ既ニ相済、一日遠慮之公法ニ御座候へ共、格別厚恩ニ相成申候祖父之事故、一日遠慮位てハ心中ニ相済不申候ニ付、十四日を初日ニ仕り、廿日之忌服相勤居申候。故郷ニ罷在候而も永訣之事故残念ニ御座候處、遠方ニ滞留病中介抱も不仕、別而残念ニ奉存候。心中御察可被遣候。乍末行、御圖家様へ宜御悔御頼申上候。先ハ御悔まで如斯ニ御座候。謹言。十一月十八日 三嶋毅再行 小野尊叔大人坐下

春方ハ御尊状被下、御厚情之段、奉謝候。早々返書呈上之積候處、修業中彼此應酬多忙ニ而、今日まで延引罷在候。真平御海容可被下候。いづれ明春ハ帰國拜晤萬々御物語可仕奉存候。

## 03 小野四右衛門宛三島中洲書簡(文久三年(一八六三) 一月七日付)

幸便啓上仕候。寒冷中、高館御揃御清寧御坐可被成、奉敬賀候。拙宅母始無事、乍憚御降心可被成下候。扱私義も京撰より直ニ江戸へ参り、当節柄思様も参兼候へ共、内々御政務密議ニも預り難有事ニ御座候。然る處、当藩勝手役かけ候ニ付、跡役を被申付、去九月末ニ帰國仕申候。是も一國安危ニ拘り候役にて、心配ものニハ候へ共、主人態々目金にて被申付、新参ものニハ規模之事故、相勤居申候。此節金銀出入最中、晝夜繁勤無寸暇、困入申候。無人にて困候故、縁談段々聞合居候處、勝山藩北村前後と申て、百式拾石程取候大臣之娘、山田先生之世話にて来十三日ニ先客分にて引受候積ニ御座候。右前後義、家柄ハ勿論、血統も申分無之、当人義も段々聞合被遣候處、母之氣ニ入申候。参不申てハ分兼候へ共、先御安心可被成下候。

一江戸滞留中、御屋敷之坪和錦蔵と申人少々御屋敷之義ニ付頼筋有之、毎度私處へ被参、懇意ニ致申候。一度其宅へ被招、種々饗應ニ預り、親父麻之進殿ニも面會、殊之外尊敬ニ逢ひ申候。叔父小野四右衛門義不調法ものニ候へ共、宜御頼申と頼置申候。右等之訳柄にてか四五日前麻田御陣屋分陣屋人少ニ御座候間、非常之節ハ御加勢被下度と、当藩へ御頼有之、委細承知仕候返答有之候事ニ御座候。一当夏奥州三春藩人ニ出逢候處、十年斗前ニ備中之小谷梅莊と申書生三春へ被参、来光院と申山伏にて讀書人之宅ニ半年斗滞留被致候と相話候ニ付、其跡ハ何れへ参候哉と相尋申處、仙臺へ被参候ものと見へ、仙臺分一年斗して手紙を被送候と話居申候故、鳥渡御耳ニ入れ申候。

一江戸も九月中分横濱鎖港之御掛合始り、今ニ訳付不申候。大和生野浪士騒キも討手之大名衆にて夫々召捕又ハ打取、先ツ平定致申候。

久振何角申上度奉存候へ共、斗角多用、不取敢右之次第程申上候。勿々不宣。癸亥十一月七日夜 三嶋貞一郎再行 小野叔父様坐下  
乍末行、叔母様始皆様へ宜御傳聲可被下奉願上候。  
キセル壺本御笑艸迄差出申候。晋二郎様へ御上可被下候。

## 04 小野静雄宛三島中洲書簡(明治一五年(一八八二) 四月一四日付)

九日附御状致拜見候。愈御安祥奉賀候。然ハ御身上一件も愈御出京と定り候由、於当方ハ何時ニ而も差支ハ無之、唯々御長滞留故、君ヲ当テニ不致、塾中役員も餘ル程有之、困却中故、直ニ是迄之通御給与申事ニ参兼候間、此段御承知御出被下候へは、其内差繰り御滞費不入様取計可申候。國元へ用向云々御申越し候へ共、

過日依頼、日笠武一郎上京遊覧中故、何も取寄せ候品も無之。唯々中島、藤戸へ用向ハ無之哉ト、御一聲之上、御出可被成候。乍末行、御學家様へ可然御傳聲可被下候也。 四月十四日 中洲 静雄君

(封筒) 備中浅口郡大谷村 小野慎一郎君御同居 小野静雄様 御答  
× 「東京麹町區壹番町四十五番地 三島毅」 四月十四日出

### 05 小野静雄宛三島中洲書簡(明治一五年(一八八二)八月九日付)

本月四日出御書状、六日午後着、致拜見候。留守中皆々御無事之由、安心致候。拙者も無事、追々気分も宜敷、詩文等考候而も障りニ不相成、餘程被頼之文章も出来、療治中も内職半分、御一笑且御安心可被下候。御申越之件々拝承、安心致候。尚此上宜敷奉頼候。水道、分水樋破損ハ案外之至、臨時入費ニハ困却ナレトモ無致方。修繕御着手被下候由、致安心候。右ニ付思出候ハ、本塾ノ長屋ノ下へ井戸尻ト雨水ト一緒ニナリ落子候處、大雨之節ハ斗角樋口より外へ漏レ候故、石垣崩壊難斗と兼テ心配致候へ共、修繕多ニ付、突延居候へ共、当年之如キ多雨ニテハ、早ク豫防致置候方上策ト存候間、右長屋下へ落ルコトハ止メ、今ノ邸へ落ル様ニ水道御付替ヲ植木屋ニ早々御命可被下候。植木屋間ニ合ひ不申ハ、木村糸藏ト申出入之仕事師ニ御命ニ而も可然候。(図アリ)

右朱筆ノ通りニ水流れ候様御付替可被下候。御地ハ如何ニ候哉。当地着後、雨日多之上、六日以来大雨于今止ミ不申、川々も破損致候程之事故、右長屋下石垣ノ崩レヲ甚心配致候間、早々御命可被下候。○豊原一件も定テ過日申上候通、御取斗と奉存候。屋賃之義ハ不知顔ニ而御出可被成候。拙者帰宅之上、面話ニ可致。マサカ丸々取りも致間敷と存候。○松木ガ急用ノ文トテ小林へ向テ差越し、一篇ノコト故、直シ遣候間、内々御渡し可被下候。右様ノコト人々より申来ルト折角ノ保養方無ニ相成候間、以後ハ御断り可被下候也。 八月九日 中洲 静夫兄

尚々、家屬へ無事之由、御傳へ可被下候也。  
尚々、巻紙、状袋、羽書ノ如キハ書斎ノ黒柿箱ニ有之候間、お澤ニ御申、御遣ひ可被成候也。

(封筒) 「東京」麹町区「壹番」町四五番地 「三島」毅留守居 「小野」静

夫様 上州群馬郡伊香保小暮武太夫宅四十四番室寓 三島毅 平安  
要書

× 八月九日午後五時發

(別筆) 八月十二日着 井戸尻水道件 豊原件 松本文之事

### 06 小野静雄宛三島中洲書簡(明治一五年(一八八二)八月一九日付)

十二日十三日出之書状夫々拜見、留守中無事之由、安心致候。爰元も無異之由、お澤へ御申聞可被下候。○拙堂文稿も着致申候。○此節ハ塾金御取建之時節ト相察候。彼盜ハ内情ヲ能承知ト見へ候間、別而御用心可被成候。金ハ箱ニ入れ、夜分ハ夜具之間ニ置キ御休ミニ而も可然カトモ存候。雪隠之窓ヲ切ルナレバ、奥之雪隠窓モ油断ナラズ、奥ヨリ雪隠へ參ル開キ内ヨリツ、バリニテモ致シ休候様、お澤へ御申聞可被成候。○小生も来ル廿五日三周二相成候故、廿六日立、廿七日着ト定候間、此段御承知可被下候。然し晴雨ニより一日位延候事ハ難斗候。○朝野新聞送りモ廿二日位ニテ御止メ、宅へ御取り置可被下候。餘ハ不日帰宅之上ニ仕申候也。 八月十九日 中洲 小野子

小野子へ内啓  
本文ニモ申上候通、既往ヲ咎メス、善後第一之事ナレハ、塾中モ入費ヲ省キ繁昌ノ方へ御注意被下候へは、五十円之損ハ忽ニ戻り可申候。是ヲ以テ謝罪ト思召、決シテ未練之慙悔有之間敷候也。

### 07 小野静雄宛三島中洲書簡(明治一五年(一八八二)八月二一日付)

川田帰京便ニ托候。愈留守中御無事奉賀候。川田車夫へ三品御托し被下、当地物價騰貴ハ先年ニ倍候故、大ニ甘キ申候。先便申上候通、小生も廿六日出立、廿七日ニハ帰京可致候。

一中島手紙ニ而承り候へは、義藤太出奔致候よし。同人ニハ席次郎目金其外書畫等相托置候。右ハ如何ニ相成候哉。守一郎へ急ニ手紙遣、問合せ候様、民之丞へ御申聞可被下候。余ハ帰京之上ニ譲り申候也。 八月廿一日夕 中洲 静夫君

### 08 小野慎一郎宛三島中洲書簡(明治二二(一八八九)年三月一日付)

拜見仕候。春暄相催候處、愈御安健奉賀候。拙生無事、御降心可被下候。先般ハ武治太君急ニ御帰國ニ相成、御秀閣様御大患之趣ハ承知仕候へ共、少々不審之廉も有之、態ト御見舞も不申上相控へ居候處、果シテ電信ニテ眞事ニハ無之トノ事相分り、何ハトモアレ目出度吉信ト申而安心罷在候處、今般之御手紙ニ而ハ御不快ニ相違無御座之由相分、御療養專一二奉存候。先ハ乍延引御見舞申上度、如



此二御座候也。三月十日 三島毅 小野慎一郎様  
再啓、武治太君へ宜敷御傳へ可被下候也。

(封筒) 備中浅口郡大谷村 小野慎一郎様 拜復「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

三月十日

09 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二四年(一八九二)八月五日付)

大暑中、愈御安健奉賀候。拙宅無異、御省慮可被下候。陳ハ先日ハ倅桂婦朝二付、御賀書品々被下、又今般ハ暑中御見舞狀二預り、御厚意奉多謝候。然ルニ同人婦朝後來客多、又引續キ同居間小宮繕等相始メ、彼此取紛、御返書延引、不悪御海恕可被下候。先ハ右御札迄如此ニ御座候也。八月五日  
桂分も宜敷申上候様申出候。皆様へ宜敷御傳へ可被下候也。  
尚々、小野モ無事、御安心可被成候也。

備中浅口郡吉備村大谷 小野慎一郎様／東京壹番町 三島毅

10 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二四年(一八九二)一〇月二五日付)

愈御安健奉賀候。拙老頑健、御降心可被下候。陳ハ今般倅桂妻ニ大隈伯之養女貴受候事ニ結約いたし、来十一月十五日婚儀執行致候。此段御吹聴申上候也。

十月廿五日

尚々地頭叔父へ御序ニ御通知置可被下候也。

備中浅口郡吉備村大谷 小野慎一郎様／東京壹番町 三島毅

11 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治二五年(一八九三)二月七日付)

春寒中、愈御安健奉賀候。老生頑健、御省念可被下候。陳ハ過日香取生分倅へ序文之求有之、承知ハ致居候へ共、久々洋行中、文章も書き不申とて着筆延引、漸ク別紙之通り簡短之文出来候由ニ而差出候。一見候處、甚粗末之文ニ候へ共、洋学者之文ト思召、御用ニ立テハ御用ひ有之度、香取へ御申添へ、御渡し可被下候。勿々不乙。

二月七日 三島毅 小野哲兄様下

(封筒) 備中浅口郡「吉」備村大谷 「小」野慎一郎様  
二月七日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」平安信

12 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二六年(一八九三)七月二五日付)

拜啓、過日ハ御父子様沙美村へ御出張被下、種々御配意被下、奉謝候。其翌当地へ引取申候。然ルニ明後廿七日玉島連中之招請ニ應シ参り候間、其夕ハ柚木へ一宿卜約置候へ共、事宜ニより貴宅へ直ニ罷出候も難斗、無左ハ廿八日早朝地頭へ墓参ニより、午前貴宅へ帰り、一宿願ひ、廿九日早朝沙美へ廻り、両兄ヲ見舞候経画ニ御座候間、此段前以申上置候也。乍憚地頭へ御通置可被下候也。

浅口郡元大谷村 小野慎一郎様／中洲村ニ而 三島毅／七月廿五日

13 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治二六年(一八九三)八月二四日付)

沙美入用

一金八円十七錢四厘 吉田屋通シテ

一金壹円八十六錢 海浴料

一金拾八錢 薬價

一金五拾錢 診察料 凡五度位 但シ大谷ト相談

一金五十錢 吉田屋茶代

一金五十錢 吉田屋婢僕五人へ十錢宛

拾壹円七十一錢四厘

外ニ凡三四円 本参院挨拶 是ハ大谷ト相談之上取斗ひ之事。

右手当ニ拾六円差出置候間、過不足トモ御申越可被下候也。東京三島

八月廿四日 小野様

14 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二六年(一八九三)九月一日付)

秋炎中、愈御清適奉賀候。然ハ小生儀、去月中旬高梁へ帰展仕り、夫ヨリ一昨日当地へ参り申候。鳥渡御尋可申上候處、兩三日中ニ藤戸へ廻り、夫ヨリ帰京仕候ニ付、御無沙汰申上候。此段御断申上候。乍末行、皆様へ宜敷御伝声奉頼上候也。

九月一日

浅口郡大谷村 小野慎一郎様／中嶋ニテ 三島毅

15 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治二六年(一八九三)九月一九日付)

秋冷中愈御安健奉賀候。先般帰國中ハ罷出、御厚遇ニ預り難有奉謝候。又沙美浦子供海浴中ハ毎々御見舞被下、最後ニハ會計迄御托申上、出立之節ハ達郎君遠方迄御送り被下、重々御丁寧之御取扱、不知所謝、唯々出立之節ハ御他行中ニ而不

得拜顔、遺憾之至ニ奉存候。兼テ御承知之静雄子周旋一件ハ、岡山へ参候節、書記官ニ直談相頼ミ、又手紙二而も申遣し、出立之節岡山停車場迄書記官送呉候故、其節モ相頼ミ、昨日ハ当地ハ礼状遣候序ニ、又々催促仕置候。多分出来トハ存候へ共、此節柄物ヲ極リタル上ナラデハ確ト難申上候。併不遠内ニ成否相分リ可申候。先ハ右御礼旁如此ニ御座候。勿々頓首。九月十九日 毅 小野慎一郎様同達郎様

尚々塚村永原等へ御序之節宜敷御傳へ可被下候。御舉家様へ過日之御礼宜敷奉頼候。書後レ申候。出立之際ハ結構之御餞別ニ預リ、恐縮之至ニ候へ共、拜戴仕候。是亦皆様へ宜敷御礼御申傳へ可被下候。御安産後、母子とも御健康御肥立と奉察候。御大切ニ可被成候也。

#### 16 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治二六年(一八九三)一〇月二七日付)

拜啓、秋冷且多雨、不順之氣候ニ候へ共、愈御安健奉賀候。拙老無異、御降心可被下候。却說過日ハ中国筋一般之洪水ト申、内ニも岡山縣最甚敷、又中島ハ別而困難、于今水引不申由、追々詳報有之、実ニ不忍讀慘状ニ御座候。然ルニ貴宅ハ御無難之由、大幸之至ト奉賀候。

一 先般ハ佐美會計書御廻し被下、早々御返書可差出候處、帰後多忙ニ取紛れ大ニ延引仕候。右御立替金七拾八錢四厘、些少之事ニ而返上も失敬ニ候へ共、勘定之事故ニ郵便切手ヲ以テ返上仕候間、御照収可被下候。

一 静夫子一件も岡山今日之場合故ニ催促も難出来、困入申候。乍去近日ニ知事上京ト申事ナレハ、此地ニ催促之手段も可有之と相待居申候。先ハ兩度之御答旁如此ニ御座候。 十月廿七日 毅 小野賢兒

#### 17 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二八年(一八九五)七月二五日付)

朶雲拜見仕候。大暑中皆様御安健奉賀候。拙宅無異、御降心可被下候。当年ハ土用前ハ御地邊多雨、不順之由、当地も同様、殊ニ土用ニ入り一日晴天有之候のミ、今日ハ可也晴候へ共、暴風ニ御座候。何卒吹晴し候様祈り申候。悪疫も日々廿人位ハ有之由ニ候へ共、大都之事故、区内ニハ一向聞キ不申、御同安可被下候。乍末行皆様へ可然御傳へ可被下候也。

備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様 同達郎様

／東京一番町 三島毅 七月廿五日

18 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治二九年(一八九六)七月一八日付)  
御返書拜見仕候。園名、左ノ通三名撰申候。

知足園 猗丘園 詩ノ語 鴻溪園 大谷ト云コト

右之内御取り可被下候。小生モ来廿一日、皇太子殿下供奉ニテ日光へ参り、出立前多用、不及餘事候。○隨鷗老人此節皮膚病ニテ都下病院ニテ療養中、併シ心配ハ無之候也。七月十八日。

備中浅口郡吉備村大谷 小野慎一郎様／東京一番町 三島毅

#### 19 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治三〇年(一八九七)七月二八日付)

御細書拜見仕候。大暑中愈御安健奉賀候。老生頑健、御省念可被下候。春方ニハ聊樂園記ニ付縷々被仰越候儀拜誦。旅中匆卒之作、耻入申候。何卒再遊、貴園拜見仕度ものと相心掛居り申候。乍末行皆様へ宜敷御見舞奉折候也。 七月廿八日

備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様／東京一番町 三島毅

#### 20 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治三二年(一九九九)一月一六日付)

新年奉賀候。小生も去七日御講書始御用為相濟、八日ニ当地へ参候處、御年始状参居、拜見仕候。平生御無音、御海恕可被下候。差急艸々頓首。 中洲 一月十六日 小野兒

尚々、皆様へ宜敷御傳可被下候也。

#### 21 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治三二年(一九九九)三月三日付)

過日ハ中島家兄不幸ニ付、早々御吊書被下、奉謝候。老生も七十年来友愛を受たる家兄ニ被別、大ニ愁傷致候。別箋之詩ニ而御憐察可被下候。和歌高作御示し被下、感吟仕候。供奉中之儀、早々除服被仰付、出勤罷在候へ共、帰寓獨坐蕭然、心淋敷事ニ御座候。今後之尊長ハ大磯之小野老人アルノミ。時々文通相樂申候。明日ハ殿下葉山之御用邸へ御移轉ニ付供奉。車中より老人ノ拜ニ被出候を遙ニ一見仕度と樂申候。余は付後鴻候。艸々頓首。 三月卅日 毅 小野哲兒

尚々皆様へ宜敷御傳へ可被下候。地頭叔父は無事なりや。宜敷御傳へ可被下候也。

#### 22 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (明治三二年(一九九九)七月二八日付)

毎々御細書被下、奉謝候。多忙中一々御返書不申、御海恕可被下候。不順之氣候

二候へ共、愈御多祥奉賀候。老生儀其後皮膚病ニ感し、一ヶ月斗り苦ミ、稍宜敷相成、六月中旬分沼津へ供奉、七月中旬帰京、無間残病療治之為当地ニ参り大有効驗、明日ハ帰京、一二日休息、直ニ日光へ供奉之積リニ御座候。却説、二帖之題字御申越、又大磯分も序文被申越有之候へ共、迎も其暇ハ無之、今日題字ノミ差送り申候。是ニテ御勘弁可被下候。御行状之儀ハ後日閑暇之節、相綴り可差出候。右御答迄。艸々不具。 中洲 七月廿八日 小野貞

(封筒) 備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様 拝復

相州箱根芦之湯紀井國屋 東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅

七月廿八日出

### 23 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治三二年(一八九九)一〇月二一日付)

東京及当地へ御差出之両通共、拜見致候。御申越之東宮舞子へ行啓ハ無相違事ニ御座候。然ルニ岡山縣内御陸行ハ、水風災後御遠慮ニテ御見合ニ相成哉ト多分被察候。小生儀は月末迄ニ陸行ニ而舞子へ参り、十一月中ハ同地滞在之筈ニ御座候。其間ニ慕參丈ハ相願可申積ニ候へ共、御地邊迄ハ迫モ難罷出候。○兼テ御申入有之候梨献上之義、舞子へ御送ニ相成候へば、御取次可申候。イゾレ同地着之上ハ御申報可申上候也。

(封筒) 備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様

十月十一日 駿州沼津保養館 三島毅

### 24 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治三二年(一八九九)一〇月三一日付)

拜啓、小生儀昨日当寓へ着、今朝は岡山へ出、東宮御迎申上、又御暇ヲ乞ヒ、小野静雄ヲ一寸相尋、直ニ中島へ参、慕參。一日休息、二日ニ味野へ参り、三日晩藤戸へ参り、五日早天、日笠妹ヲ同行シ当地へ帰寓致候。右之次第ニテ貴宅迄罷出候暇無之、乍遺憾御海恕可被下候也。

備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様

／十月卅一日朝 播州明石郡垂水村周布別荘寓 三島毅

### 25 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治三三年(一九〇〇)六月二三日付)

梅雨中、愈御清福奉賀候。貴書日附ハ無之候へ共、沼津分此節相廻り、拜見仕候。井上碑文承知仕候へ共、多用中急ニハ難出来候。且拙筆揮灑之事御申越ニ候へ共、細字揮毫ハ老腕困難ニ付、一切謝絶中ニ付、御断り申候。書家ニ頼可然候へば、

紹介可仕候。其餘被仰越候義、皆々承知仕候。先日は御慶事ニ付御歎状被下、奉謝候。多用中一々御返書不呈、御海恕可被下候也。

備中浅口郡吉備村大谷 小野慎一郎様

／六月十三日 東京麴町區一番町 三島毅

### 26 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (明治三五年(一九〇二)一月二一日付)

新禧萬福申納候。先以貴家御健全奉賀候。小生も昨秋大患、不思議ニ全快。去七日、兩陛下御開講も相勤メ、直ニ其日当地へ出張し、八日東宮御開講相勤メ、其後引続奉務罷在候。御同喜可被下候。東宮岡山御巡行之事御尋、成程其御内意も御座候へ共、御都合ニより御延引ニ相成居申候。当夏共は御決行難斗候。乍去、拙老は老衰病後之事故、軍艦上下も困難ニ付、定テ供奉は御免ニ相成候ものかと相察申候。新年玉作御示、致感吟候。拙詩御求メ、僅ニ二絶有之、別箋ニ相認、供笑正候。詩中ニ有之候三男復新婦ハ、野崎武吉郎養女ニテ、実ハ備中水田村太田鹿五郎長女、武吉郎分も愚妻分も皆再從兄弟位ニ当り候ものニ付、引受申候。其後居合宜敷處見受、当地へ参り申候。御同安可被下候。乍末行皆様へ可然御祝詞御申上可被下候。先は御祝詞御答如此ニ御座候。謹言。 一月十一日 三嶋毅 小野賢兒

### 27 小野達郎宛三島中洲葉書 (明治三五年(一九〇二)五月三〇日付)

貴書拜見、愈御安祥奉賀候。然ハ額字御紹介、致承知候。就テハ潤金參円御送り、確受致候。近日揮毫相送り可申候。乍末行御大人始、宜敷御傳聲可被下候也。

五月卅日

備中浅口郡吉備村 小野達郎様／東京一番町 三島毅

### 28 小野慎一郎・達郎宛三島中洲葉書 (明治三六年(一九〇三)八月七日付)

御念書拜見、山中也御地同様近日天氣復常、暑氣随分嚴敷候處、愈御安健奉賀候。拙老も瓦全ニハ候へ共、与昨年変り暑氣ニハ困却、乍併豊年は可卜奉存候。有一作。 溪亭苦熱糜吟哦 沃野遙知長稻禾 囊底縦無金石響 待聞豊熟擊壤歌 御一笑可被下候。御佳什御示シ、感吟仕候。拜復。 八月七日

備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様 同達郎様／野州塩原満寿屋寓 三島毅

29 小野慎一郎・達郎宛三島中洲葉書（明治三十七年（一九〇四）二月二十五日付）

過日は貴書被下、東京へ相廻り拝見仕候。愈御安靜奉賀候。拙老頑全、御安慮可被下候。然ハ揮毫被囑、潤筆金參円被下、拝受。即額字大小五枚、今日、開封ニ而差出申候。又寸法違御申越二候へ共、已ニ揮毫後二付、御免可被下候也。駿州沼津保養館ニ而。 三島毅

備中浅口郡吉備村 小野慎一郎様 小野達郎様 二月廿五日

30 小野慎一郎宛三島中洲書簡（明治三十八年（一九〇五）二月二十八日付）

春寒稍退候處、挙家御安健奉賀候。老生瓦全、御降心可被下候。過日は御祖父様五十回忌祭典今年ニ御取越被成候二付、拙詩奉奠候様御申越、猶静雄ハ絹本も相廻り候二付、即拙詩二首相綴り、童時御役介ニ相成候事思出し序文を添候二付、長文と相成、老筆細字困難ニて甚不出来二候へ共、御堪弁御祭壇へ御供被下候へは、本懐之至ニ奉存候。今日小包ニ而別ニ相送候間、御落手可被下候。却説、静雄子今般奮發、感心之至候。然ルニ同人ニ少シ癖アリ。是迄斗角長持不致候二付、敵敷説得致候上、周旋致置申候。先ツ宜敷都合ニ聞へ候へ共、成否如何と懸念罷在候。乍末行、皆様へ可然御傳聲可被下候。勿々不一。 中洲 二月廿八日 小野老兄

尚々、大磯老人へも御案内被成候由、近來輕中風症ニ而被參不申趣、老年之事故、致方無之。然し此節は八九全快之由ニ過日被申越、御同喜之至ニ奉存候也。

（上封）奉奠 小野翁五十回祭壇 外孫三島毅 拝艸

外祖考小野翁五十回忌辰、恭賦二絶奉奠。有序曰、往時邦人少修数学者。翁独学之、称三備之魁。今日数学大行、故及。

曆算夙称三備魁 欽翁知見先人開 誰囿五十年餘学 諸科多從数術來

其二序、毅十歳前後、不好嬉戲、唯願揚名天下。時随先妣帰寧、翁毎朝早起、

奠香火祭愛染辨天二尊。謂毅曰、汝祈二尊、所願必成矣。既帰、謂家祖購二

尊木像、毎早先人起、浴水焚香祈之者兩三年。既而自知、揚名在読書。自此

問学至今不已。雖不能達素願、亦免為郷人、皆翁之賜也。故及。

童心唯願脱常倫 祖訓循々勸敬神 五十餘年如一夢 白頭纔免伍郷人

明治三十八年四月廿八日、蓋翁歿于安政五年十月十八日、其忌辰实在明年、

設祭典有故先一年云。東宮侍講文学博士三島毅拝艸、時齡七十六。

（封筒）備中浅口郡吉備村大谷 小野慎一郎様 拜復

封 駿河沼津保養館 三島毅 二月廿八日

31 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（明治三十九年（一九〇六）六月二十九日付）

御手帯拝見、梅雨之候、愈御安康奉賀候。老拙頑健、御省念可被下候。然ハ豫テ御頼之川手家傳記之義御催促被下候處、右之頃ハ四方ハ戦死碑如雨降請求有之、困却中、又々木戸公碑文之勅命有之、日々出勤之暇ハソレニ打懸り居候へ共、何分多忙ニテ于今成稿不致、別テ困却中ニ付、今暫クハ他事ニハ着手難致候間、少シ延引之段御承知置可被下候。且猿掛ハ本村へ移住前之系譜拵へ候トノ御注文、是ハ全ク偽作ニ付、何分出来不申候。御含置可被下候。何角御家ニ言傳へ聞傳ノコト有之ハ御申越し可被下候。ソレナレハ偽作ニ無之、安心シテ綴り可申候。勿々不一。 中洲 六月廿九日 松蔭君

（封筒）備中浅口郡三和村大谷 小野慎一郎様 拜復

32 小野慎一郎・達郎宛三島中洲書簡（明治四〇年（一九〇七）三月一〇日付）

拜啓、春寒料峭之處、皆様御清健奉賀候。先般は揮毫之御紹介御座候處、老生義一月分顔面ニ腫物發生シ、大ニ相悩居候二付、返書遅延仕候。二月末ニ八九直り候故、当地へ出張、供奉中ニ御座候。因テ御詔之七枚、外ニ小切三葉相認、今日小包ニテ相送候間、御落手可被下候。尤聯落一枚ハ楠公之詩ト有之、旅中旧稿不相携、老耄シ楠公之詩思出不申候二付、帰京後一枚ハ相認相送可申候。多分此月末ニハ帰京可仕候。右潤筆金拾式円御送り、正ニ落手仕候。猶勤務之餘、残病療養中ニ付、不及他事、艸々不備。 三月十日 中洲 小野御父子君

（封筒）備中浅口郡三和村 小野達郎様 拜答

33 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四〇年（一九〇七）三月二日付）

去十八日出御状、并ニ潤儀十六、正ニ受領致候。被仰越候義、委細承知。此月末ニハ帰京候間、其上相送可申候也。 三月廿二日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／相州葉山長者園 三島中洲

34 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（明治四〇年（一九〇七）五月八日付）

寒暖不定之氣候二候へ共、愈御安康奉賀候。却説、去四日、大磯三菱別荘牡丹満開ニ付被招、一宿シテ帰り、于誠好機會ニ付、小野老人相見舞、久振緩話可致と樂テ相尋候處、此兩三月持病大ニ不出来之趣ニテ、言語不通、唯眼丈キロ／＼ト被致、小生タルコトモ御承知無之御様子ニテ大ニ驚歎、是ガ永別ト存ジ落涙拜辞候事ニ御座候。看護致候老婆之話ニ、当春は國元ガ東京博覽會見物旁尋呉可申ト先日ハ御楽被成候ト申事ニ御座候。養子夫婦モ有之共、横濱ニ隔居、一周間ニ忝度位見舞ニ参候様子、大磯ニ二三ノ門人ハ有之候へ共、始終詰切りモ出来ス、何分氣之毒千萬之次第ニ御座候。右之様子ニ而は実ニ重体ニテ、長持ハ不致と被存候。唯可頼ハ、食事丈ハ重体ニ不似合、三度ツ、上り候故ニ、案外長持致カモ不被斗候。最早右之重体御承知トハ存候へ共、念ノタメ申上置度候也。 五月八日 中洲 小野松蔭兄

（封筒）備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様 御直披

封 五月八日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

35 小野達郎宛三島中洲書簡（明治四〇年（一九〇七）七月七日付）

貴書拜見、皆様愈御安康奉賀候。拙宅、他は無事ニ候へ共、老妻は昨春以来痲質斯病ニテ臥床、起立六敷、于今同様困入候。拙老モ早春ハ顔面神経痛ニテ大ニ相惱ミ、春末漸々平癒候處、痲質大ニ起り起坐不自由、直ニ温泉へ参り効驗有之、先月帰京致候。此節は八九平癒候處、揮毫之被頼澤山溜り居、催促ニ困入り、二三日、一日二四五枚ツ、揮毫候處、今日ハ肩痛再發、大ニ困却。御憐察可被下候。却説、今般は又々揮毫澤山御取次ニ相成、承知は仕候へ共、右之次第故ニ、此秋中又当年中ニ出来ト思召可被下候。且又追々老衰、揮毫ヲ厭ひ候上ニ、依頼は益多キニ付、潤筆ヲ左ノ通ニ定メ居申候。

全紙 額字—金式円ツ、 半折—壹円 小切 扇子—半円ツ、

然シ今般ハ已ニ六枚へ對シ八円金御贈り、定額ニハ不足スレトモ、貴兄之御取次故、承知仕候。然ルニ皆絹本ト有之、絹ハ半折ニテモ小壹円、全紙額トナレハ壹円余又ハ半ナラデハ買入六敷、御贈り之八円金ハ絹代ニ入り、潤筆ハ少モ無之事ニ相成申候間、何卒六枚トモニ紙ニテ御勘弁可被下候。此段御相談申上候。是非絹ト申事ナレバ、一切御断り可被下候。右金は直ニ御返却可申候也。 七月七日 中洲 小野達郎君

尚々、以来御取次は右之定額ヲ御承知ニテ奉願候。尤少々之義ハ減額不苦候也。

（封筒）備中浅口郡三和村大谷 小野達郎様 拜答

封 七月七日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

36 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲葉書（明治四〇年（一九〇七）七月二日付）

御細書拜見、大暑中皆様御安全奉賀候。拙老無異、御安意可被下候。却説、承候へは、昨今ハ段々御病氣、又ハ御不幸御座候由、一向不存、失敬仕候。吉凶循環ハ人間之有様、安天命ノ外無之候。大磯老人当春見舞候節ハ身体ハ不自由、人事ハボケテ不省、永持ハ不致ト存候處、于今何之沙汰モ無之、按外永持致候。近日手紙ニテ尋遣し可申候也。皆様へ御傳聲奉願候也。 七月廿四日 備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様／東京 三島中洲

37 小野慎一郎・達郎宛三島中洲葉書（明治四一年（一九〇八）一月一日付）

今日は川出眞平君御尋被下、御状拜見、愈御安康奉賀候。老妻へ結構之御見舞被下、難有奉謝候。病氣モ先持合居候間、御安意可被下候。老妻モ宜敷御札申出候。過日は大磯小野老人遠逝、御同傷之至ニ御座候。三男ヲ會葬ニ遣候。町葬之式有之、老人モ榮譽之至ニ御座候。塚村老人遠方會葬、泉下満足ト被察候。塚村老人モ此節拙家滞在中ニ御座候。先ハ御札旁如此ニ御座候也。 一月十四日 備中浅口郡三和村 小野松蔭様 小野達郎様／東京壹番町 三島中洲

38 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四一年（一九〇八）五月一日付）

貴書拜見、皆様愈御安康、奉賀候。拙宅無異、御安慮可被下候。然ハ拙書三枚御紹介、潤金六円御贈り、正ニ受取、今日揮毫、開封相送候間、御落手可被下候。松蔭君へ宜敷御傳へ可被下候。去三月ニハ大磯へ御墓參致置候。此段モ御話置可被下候也。 五月十八日 岡山縣浅口郡三和村 小野達郎様／東京 三島中洲

39 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲葉書（明治四一年（一九〇八）二月一日付）

拜啓、寒冷之節、愈御安靜奉賀候。拙老頑健、御省念可被下候。然ハ大磯町小學校長朝倉敬之ト云隨翁先生門人尽力ニテ二百五十金募金シ、拙老都下ニテ彫刻ノ世話シ、今般石碑出来ニ付、石摺壹枚別封進呈候。掛物ニシテ御祭り可被成候。モシ思召アレバ、右朝倉へ宛テ札状御遣し、又來ル一周忌香料トシ三五円御遣しナレバ、亡靈地下ニテ満足可被致と奉存候也。 十二月十日

備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様／東京壹番町 三島中洲

40 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四二年(一九〇九)九月二七日付)

貴札拜見、秋冷之節、皆様御健全奉賀候。老生義、八月分會津仙臺邊避暑旅行致し、今月初無事帰京致候。御安意可被下候。然ハ屏風三雙、絹本へ揮毫候様被仰聞候處、近來益老衰シ、多数之揮毫ハ成丈相断り候へ共、今春塚村老人之取次ニテ紙本屏風一雙揮毫仕候事も有之候故、御断りモ如何と存ジ、先ツ絹本代金為積候處、別紙之通ニ御座候。拙老揮毫潤筆ハ紙本聯落一枚式円宛之内定ニ付、塚村老人之分ハ式拾円位かと覚へ申候。絹本は倍ト申定ニ付、一枚四円、凡ソ四拾円ナレトモ、減シテ一雙三拾円位ナレバ可然力。其内ニ貴宅之分一雙有之由、是は大減シ三分ノ一トシテ拾円ナリ。右三雙ニテ都合七拾円ニ当り申候。其上ニ絹本代凡三拾円ナレハ、先ツ壹百円ナリ。此段承知ナレバ承諾仕候へ共、何分一度ニ多数書キ候へは疲レ候故、多用之隙間ニ一日五枚ヅ、トシテモ半月、又ハ壹ヶ月仕事故ニ、当年は逆モ六敷、来春早々葉山等へ避寒之御供致候へは静閑ニも有之、揮毫之閑可有之カト存候。右御熟考之上、御申越可被成候。艸々拝復。九月廿七日 中洲 小野達郎君 尚々、松蔭翁へ宜敷御傳聲可被下候也。

積書

一金式拾八円八十銭 繪絹式丁ヒ上等 屏風三双分 則三拾六枚 但四尺長サ 一枚分八十銭

上様 右之通り 玉川堂筆舖「東京今川小路壹丁目五番地 齋藤 玉川堂」

(封筒) 岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野達郎様 拝答

封 九月廿七日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

41 小野達郎宛三島中洲葉書(明治四二年(一九〇九)一二月二日付)

貴札拜見、皆様御安泰、奉賀候。拙宅無異、御省念可被下候。然ハ屏風之義巨細御申越し、致承知候。然ルニ赤松之旧作は無之二付、先ツ二双丈御受合申候。来春早々取掛り可申候間、絹本代年内御廻シ可被下候。松蔭君御手紙ニ付、大二延引罷在候。近日御答申候様御傳へ可被下候也。 十二月二日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／東京一番町 三島毅

42 小野達郎宛三島中洲葉書(明治四二年(一九〇九)一二月八日付)

貴札拜見。然ハ屏風絹本代当年トシ金式拾五円也、右御送り被下、正ニ御預り申候。早々買求可申候。餘は追々可申上候也。 十二月八日

備中浅口郡三和村大谷 小野達郎様／東京一番町 三島毅

43 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四三年(一九一〇)二月九日付)

去五日出御状、東京分相廻り、拜見仕候。愈御清福奉賀候。屏風拙書御潤筆、四十五円金御贈り、辱奉謝候。復手元ニ而御預り置候由、帰京之上、拝納可致候。○大家書簡之義被仰越候へ共、旅中持參不致候ニ付、帰京之上、取集メ差出可申候。暫ク御待可被下候。玉章紅富士之額御入用之由、拙老、玉章ト面識無之二付、帰京之上、友人中面識ノ者分問合せ、何分之御答可仕候。唯多用之身ニテ、書畫之取次ハ迷惑ナルモノニテ、豫テ御頼之重野之書、潤筆マデ先ニ遣候へ共、于今不出来、困却罷在候。ソレモ彼レ遅延致候中ニ去冬より病氣ニ罹り候故、巖谷モ不出来、見合居候へ共、近來殆ント全快之趣ニ付、催促可致と心組居申候。先ハ右御答迄、如此ニ御座候也。 二月九日 中洲 達郎君 尚々、過日之屏風、絹本ノウラニ二三方書シ有之候間、表装之時、順次ヲ不誤様御注意可被成候也。

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拝答

封 二月九日 相州葉山長者園ニテ

「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

44 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四三年(一九一〇)三月一四日付)

春暖相催候處、皆様御安健奉賀候。老生瓦全、御省念可被下候。然ハ會テ御所望之有名人手紙、大二延引仕候。此旅中ニ而溜り候分、差出申候間、御収手可被下候。老生も此月末ニハ供奉ニ而帰京可致候。乍末行御大人様始皆様へ可然被仰上可被下候也。 三月十四日 中洲 小野君

(封筒) 備中浅口郡吉備村 小野達郎様 小包郵便

封 三月十四日 駿河國沼津保養館

「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

45 小野達郎宛三島中洲葉書(明治四三年(一九一〇)三月二日付)

御葉書拜見、大家書簡御催促被下、此儀ハ決シテ忘レ不申候へ共、旅中所持不致

故、今月末多分帰京と被存候間、其後迄御待可被下候。○乍序、御尋申候。先日松蔭君三神之儀ニ付細記シテ御送り申候処、其後御返書無之、右ハ御落手ニ相成候哉否。御尋御答可被下候也。三月廿二日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／相州葉山長者園 三島毅

46 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四三年（一九一〇）四月四日付）

愈御安康奉賀候。拙者義、去一日無事致帰京候。就而ハ御約束之書簡其他數十通、今日小包ニテ差出候。着之上ハ受取書御越し可被下候。過日ハ松蔭翁御手紙被下、致拜見候。宜敷御傳へ可被下候也。 四月四日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／東京荳番町 三島毅

47 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四三年（一九一〇）七月二〇日付）

高崎、杉、山縣等之書畫頼具トノ御書状拜見候へ共、老齡且多忙ニテ、自分之事サへ遅延勝之場合、他人ニ頼候義ハ手数掛り甚困却候間、何卒御免可被下候。御承知之通り一昨年ハ重野へ取次、毎度催促スレトモ于今不出来、始終氣ニ掛り老懷ヲ悩マシ候間、御諒察可被下候也。 七月廿日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／東京荳番町 三島毅

48 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲葉書（明治四三年（一九一〇）二月八日付）

御手紙只今相達し、建碑式ノ代理云々、乍御苦勞御勤可被下候。因テ即座ニ別紙之詩ヲ賦シ差出候間、其節御代誦可被下候。差急キ不及他事候也。 十二月八日午後二時 中洲 松蔭兄

明治四十三年十二月十一日、備中鴨方林李溪翁門人為翁拳建碑式、招余臨之、余老衰不能遠行、因賦一絶使内弟小野慎一郎代誦之。

報恩能盡門生分 大碓拝来人感奮 久矣世間師道亡 一郷猶奉拙翁訓 毅拝卿。

（封筒）備中浅口郡三和村 小野松蔭様 大至急拝答

封 十二月八日午後二時「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

49 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四三年（一九一〇）二月三日付）

貴札拜見、愈御安康奉賀候。然ハ方谷先生京都之凶ニ被題候軸、御為見被下、是ハ一見眞筆ニ相違無之候。保證仕候。御大切ニ可被成候。松蔭兄モ建碑式場御代

理被下候由、後便其景況御申越し被下候様、御申上可被下候。艸々拜復。 十二月十三日 中洲 達郎君

（封筒）備中浅口郡三和村 小野達郎様 御答

十二月十三日「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

50 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲葉書（明治四三年（一九一〇）二月五日付）

御細書拜見、建碑式御苦勞被下、奉謝候。当日之景況委敷御報知被下、臨場之心地致候。拙翁ノコト御尋、即拙齋之事ニ御座候。拙齋ニテハ呼捨ニ当り候故ニ、貴デ翁ト云タルナリ。詩ニハ自由ニ遣ヒ申候。先ハ右御礼迄、艸々不一。 十二月十五日

備中浅口郡三和村 小野松蔭様／東京一番町 三島中洲

51 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四四年（一九一〇）三月十九日付）

拜啓、春寒去兼候へ共、愈御安康奉賀候。陳は先般は両度御手紙被下、又書畫帖二箱御送りニ相成候處、葉山供奉中ニ而御返書延引仕候。此節帰京、夫々拜見仕候處、右畫帖ニ序ヲ作り、富岡・吉嗣ノ畫ヲ頼ムコトヲ入候様御申越有之、又書ト畫ト一枚替りニ頼ムトノ義モ有之、不審ニ相考候事ニ御座候。右様書畫一枚替りニ頼メハ、一枚宛テ人ガ替り可申候。ソレニ序文へ富岡・吉嗣ノ二人ノミニ頼ムト云テハ序文ノ主意ト帖ノ中ト違ヒ申候テ、不都合千萬ナリ。右様不都合ノ序文ハカケ不申候。右ハ御書取りノ間違カト被察候間、今一應能分り候様御申越可被下候。然ル上ニテ、閑暇之節、序文ヲ作り可申候へ共、御承知之多忙之身分、迎モ急ニハ六ヶ敷、緩々御待可被下候。却説、潤筆及運賃当ニ金拾五円御贈被下、入手仕候。先ハ右御尋申上度、如此ニ御座候也。 三月十九日 中洲 小野達郎様

尚々、此書状認候處へ、板物ニ包御送りニ相成候へ共、書状無之ニ付、如何致宜哉、分り不申、後便委細御申越可被下候也。

（封筒）備中浅口郡三和村 小野松蔭様 拝答

封 三月廿日「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

52 小野達郎宛三島中洲葉書（明治四四年（一九一〇）四月二八日付）

貴墨拜見、愈御多祥奉賀候。陳は揮毫四枚御申越、拝承。潤金拾円、辱受納候。然ルニ老生義、先月中旬ハ腰痛感冒并發シ、追々宜敷候へ共、于今引籠療養中ニ

付、先般御申越之書畫帖等モ着手不致仕合ニ候間、氣長ニ御待可被下候。何分追々老衰、御隣察可被下候。艸々不尽。 四月廿八日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拜願

封 四月廿八日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

### 53 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四四年(一九一一年)五月二五日付)

新緑可人之節、愈御皆々様御安全奉賀候。拙老義三月中旬迄近日追腰痛ト感冒ニテ臥藤罷在、御頼之揮毫大ニ致延引候。此節全快ニ付、最後御頼之四枚丈相認め、今日小包へ出置申候。御受取可被下候。其餘は數多ニ付、病後急ニハ六ヶ敷候へ共、其内相認可申候。因テ御相談有之書畫帖二帖トモニ拜山へ相送候様御申越ニ候へ共、二帖トモニ一人之畫ハヒツコクハ無之哉。拙老、畫工ニハ一向懇意無之候處、旧對島藩主伯爵宗星石ト申人ハ先年来之門人ニテ、此頃モ被招參候事ニ御座候。其手紙モ入御覽候。此人之南畫近來高名ニテ、東京第一ト評判致候。已ニ野崎、大橋之邊曆筵ニモ掛幅出候様子ニ御座候。華族ノコト故、謝礼之定額モ無之、乍去一帖十枚餘有之、随分澤山アリ、人ヲ勞シテ謝礼ナシニハ難頼、先ツ一枚壹円ツ、ノ謝礼御キバリナレハ拙老ノ頼ミ出来可申と見込申候。不斗思付候ニ付、御相談申上候。併シ是非拜山トノコトナレバ、拜山へ一緒ニ送り可申候。強テ御勧め申体ニハ無之候也。 五月廿五日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 平安信

封 五月廿五日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

### 54 1 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四四年(一九一一年)六月二六日付)

愈御安康奉賀候。陳は兼テ御申越し之ニ大帖序文、并ニ中ノ二十枚余ニ揮毫、數日掛リ漸ク出来ニ付、小之分宗伯へ過日頼遣候。然ルニ、掛幅二枚拾円ニテ頼候様御申越ニ候へ共、畫は手間之掛り候モノニテ、都下他ノ大家ハ皆五拾円百円ト取候様承り候故、一枚五円ハ出サレ不申ニ付、一枚頼申候。ソレニテモ薄潤ト思ヒ、増額御申越被下候へは、其旨國本へ可申遣ト内明ケ申遣候處、別紙之返書參り候間、御含置可被下候。最大帖之分ハ今日大工を呼、釘打為致置候間、明日人力車ニテ新橋鉄道局マテ遣し可申候間、吉嗣拜山之方へ貴宅分案内書御出し可被成候。老人揮毫サへ厭候處へ、荷作り彼此甚面倒ニテ困入候。何卒以後ハ右様之御用無之様奉折候也。 六月廿六日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 親拆

封 六月廿六日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

### 54 2 三島中洲宛宗重望書簡(明治四四年(一九一一年)六月二六日付)

華墨拝誦、弥御清榮奉賀候。例之俗事耳ニテ、御無沙汰耳申上居候。書畫帖一帙、掛幅用絹本一筒、御親族之依頼ニテ揮毫方御申越、且潤筆金二十円御封中、何レモ落手致候。潤ハ贈レハ喜テ受領致候も、出来次第二有之、上出来ニ候時ハ増額シ御申越候候ハ、難有存候。不出来之時も有之、後日之事ニ相願可申候。右御含被成下、勿々貴酬耳。頓首。 六月二十四日 重望 中洲先生

### 55 小野達郎宛三島中洲葉書(明治四四年(一九一一年)一〇月一八日付)

金四拾參拾四錢也。右確受候。御手紙夫々細読仕候。多忙中御受ノミニ候也。 十月十八日

岡山縣浅口郡三和村 小野達郎様/東京 三島中洲

### 56 小野達郎宛三島中洲書簡(明治四五年(一九一二年)四月一九日付)

過日は為替金、壹百貳円 九十円 宗潤筆 絹代トモ 拾貳円 拙老へ潤筆 右御送り、正受取申候。然ルニ昨年は貴家之御依頼ニ付、薄潤ト思ナガラ師匠之権ニテ頼候へ共、今般ハ他家ノ御取次ト被察、絹代トモニ六枚ヲ九拾円ニテハ薄潤ト存シ、一應相談ニ遣候處、サスガ華族ノ事故貪ラズ承知致具ラレ候。併シ氣任ナレハ可然候へ共、青緑密畫ニテハ薄微ノ謝義ト被申越候間、氣任ニ頼置候。其證ハ別紙返書ニテ御承知可被下候。今般ハ氣任ニテ頼置、金ハ拙宅ニ預り置、畫之出来タル時ニ遣シ候積りニ御座候。左様承知可被下候。萬一青緑密畫、又ハ多贊等之御望アレハ、一枚ニ付絹代ノ外式拾円カ參拾円御越シ有之度候。併シ兼テヨリ毎々申上置候通、貴宅之義ナレハ御取次モ可致候へ共、他家分之頼ハ一切御免可被下候。其訊ハ老衰之上ニ多用、目ヲ振ル間モナキ程之義故、不知他人之世話迄出来不申、吳々御察可被下候也。 四月十九日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 御答

封 四月十九日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

### 57 小野慎一郎(松蔭)宛三島中洲書簡(大正元年(一九一二年)九月二二日付)

拜啓、秋冷相催候處、愈御安靜奉賀候。先般は御状被下、拜見仕候。如仰、先帝



御崩御は実ニ思掛無之御事ニテ、御同様恐惶哀悼無限御事ニ御座候。右ニ就テハ御儀式事々出勤、多忙ニ付返書モ大延引致候。拙老身分之事御尋被下、東宮侍講は自然消滅、迪宮殿下ニハ東宮ニ被為立候へ共、猶御幼年、小学程度之御学問ニ而、御進講申上候御用も無之、閑散養老ト存居候處、今上陛下萬機之御暇ニ猶御勉学被遊候思召ニテ、更ニ宮内省御用掛被仰付候。名ハ変り候へ共、矢張陛下之御侍講力職務ニ御座候。唯東宮之御時分拙老身分閑ニ相成申候。養老之為ニハ可相成、御同安可被下候。併シ作文揮毫等ノ雜用ハ益増加、困入申候。御崩御又ハ御踐祚之詩所望、承知致候。段々有之候へ共、吉凶一首宛ニ幅對ニ相成候様、認可申候。絹地下被仰越候へ共、御送りニ相成候哉、此地ニテ買入可申哉、御尋申上候。御序ニ御答可被下候。不尽。九月十二日 中洲 小野松蔭兄

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野松蔭様 拝答  
封 九月十二日「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 58 小野達郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)一月二七日付)

拝啓、今日郵便局頻リニ貴宅今本月二日出之小包着不着ヲ尋来り候へ共、葬式前後多勢入込居、一向貴宅之小包着之覚へ無之、尤包紙ヲ除キ塩蒸鯛一箇ニ養老糖二箱、拙老前へ出候モノ有之候處、其取次人ヲ忘レ、又包紙無之故ニ出處不分、于今不審ニ存候事ニ御座候。是方貴宅今被下小包ナリヤ。御問合申上候。

一其後御吊書御香料ハ慥ニ受取、忌明後、御礼可申上心得ニ御座候。  
一又絹本入りト被存候小包ハ到着致居候。  
一右御断り之手紙モ致拜見候。  
一是迄御頼之揮毫、皆々小包ニテ差出候。定テ御受取被下候事ト奉察候。此中ニ新年ノ作モ入レ置申候。  
右当用ノミ如此ニ御座候也。 一月十七日 中洲 小野達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村大谷 小野達郎様 急用  
封 一月十七日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 59 小野達郎宛三島中洲葉書 (大正二年(一九一三)一月二九日付)

貴書拜見、御送金五円確受致候。然ルニ多方面ノ澤山溜り居、今暫御待可被下候也。 一月廿九日

備中浅口郡三和村 小野達郎様／東京麴町 三島中洲

#### 60 小野達郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)二月二七日付)

春寒去兼候へ共、愈御安奉賀候。陳ハ兼テ御差向之絹本二十六枚、漸ク揮毫済ニ付、今日小包ニテ相送置申候。御查收可被下候。尤二枚書損致候へ共、断り書有之、無用ニハ不相成、押印致置候。却説、近来多方面ノ依頼益多ク、随テ潤筆モ増加シ、絹本ノ屏風ハ一四四五拾円參り申候。マシテ大文字ハ老腕一層骨折レ申候。縦ヒ貴家ノ御頼ニ而も今後ハ右様薄潤ハ御免可被下候。前以御含置可被下候也。 二月十七日 中洲 達郎君

尚々、詠史ノ分ハ年代ノ順序有之候間、絹ノ下方ニ一三ノ順ヲ付置申候。大文字ノ方ハ一枚ヅ、ノ確言ニ御座候間、順序ハ無御座候。為念申上置候也。

(封筒) 備中浅口郡三和村大谷 小野達郎様 親展  
封 二月十七日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 61 小野達郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)二月二七日付)

金五拾円、御贈リニ相成、正ニ落手仕候。然ルニ、当年之寒氣ニ当り肩ニ痠麻斯病起り、揮毫相休居候間、延引之段御承知置可被下候也。 二月廿七日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拝答  
封 二月廿七日 東京一番町 三島中洲

#### 62 小野達郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)三月九日付)

兩度之貴書拜見、愈御多祥奉賀候。陳ハ又々揮毫御申越ニ付、為潤筆 金七拾円也 御送り、正ニ落手致候。然ルニ肩痛之為ニ、先之分モ急ニハ難出来申上候位之事故、今度之分ハ極々延引ニ相成候段、御承知置可被下候也。 三月九日 中洲 達郎君

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拝答  
封 三月九日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 63 小野達郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)五月二日付)

拝啓、温暖好時節、愈御安静奉賀候。老拙頑健、御安意可被下候。却説、御令息ノ兼テ御頼之屏風二雙、絹地三枚、都合二十七枚、今日小包ニテ御送り申候。御查收可被下候。然ルニ屏風一及大字之御注文、是ニハ老腕大ニ疲勞仕候。何卒以來右様特別之御注文ハ潤筆五割増位御注意被下度、令息へ御傳言可被下候。且此

度ハ絹本御越無之故、買求申候。

都合一丈三尺五寸 四尺五寸ヅ、三枚 凡十錢切ニテ 式円七十錢

尚又是迄紙ハ皆々拙宅有合ニテ揮毫差出候へ共、紙毛段々高價ニ相成、殊ニ今般之分ハ厚キ上等ニ付、一枚五錢ツ、二当り申候。

二十四枚ニテ 志円式十錢 都合參円九十錢

右御送金可被下候。勿々不一。五月二日 中洲 小野松蔭君

再啓、今日御送り申候小包ニテ、一切負債拂ヒ、大ニ安心仕候也。

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拜答

#### 64 小野慎一郎宛三島中洲書簡 (大正二年(一九一三)一月二七日付)

臘尾愈御安康奉賀候。先日以来毎々御手紙被下候處、拙老義夏方怪我後、老体之事故、餘疲容易ニ取レ不申、湯治ニモ參り、彼此静養ヲ致シ、此節漸ク全快致候へ共、半年仕事不致候故、四方ヨリ催促集り大困却中ニ付、御返書延引、御海恕可被下候。○啓鑑翁碑文之事御申越、是ハ先年刻候文集ノ中ニ有之候ニ付、今日小包ニテ差出候。御覽可被成候。○御令息君モ朝鮮ヨリ無事御歸り之由、御手紙被下、宜敷御傳へ可被下候也。 十二月廿七日

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野慎一郎様/東京一番町 三島毅

#### 65 小野慎一郎・達郎宛三島中洲書簡 (大正三年(一九一四)三月一〇日付)

毎々御手紙被下、乍延引御答申上候。時下春寒料峭之處、皆様御清安奉賀候。老生儀只今は安全ニ候へ共、一月ニハ湯治ニ參り、二月中ハ風邪ニテ臥蓐罷在、彼此ニ而仕事不致、其故ニ追々揮毫御申越ニ候へ共、中々其暇無之、先ツ額七枚丈漸ク出来、今日御送り申置候。其餘は春中位ニハト存候位故ニ、近々朝鮮御出迄ニハ六ヶ敷、御留守へ御送り可申候。又屏風拙畫之事御申越ニ候へ共、畫工ニ無之故ニ、是ハ御免可被下候。一二枚ハ戲ニ別紙へ揮ヒ見可申候。宗氏へ屏風頼候様御申越ニ候處、同氏之畫價モ追々高ク相成、昨年日笠之統本聯落式枚ヲ四拾円ニテ頼遣申候。其例ニ從へハ一枚式拾円ナリ、屏風一雙ニテ式百四拾円ナリ。ソレデ宜敷候へは相頼可申候。一應御承知否、御申越可被下候。

松蔭君天道協合之御著述、漸ク風邪中ニ一通目ヲ通シ加筆仕候間、今日御送り申候。序御頼ニ候へ共、文ヲ考候暇無之候ニ付、題字差出候。是ニテ御勘弁可被下候。老衰ハ益加り、依頼事ハ四方八方々集り、一日二十本位之依頼手紙參り、手紙ヲ一見スル丈ニテモ二三時間ハ掛り申候。其手紙ハ皆々詩文ヲ作レ揮毫セヨト

ノ用事ナリ。ヤレ／＼学者商売モ困り果テタルモノト日々歎息、御憐察可被下候也。 三月十日 中洲 松蔭君 達郎君

御申越之名家書簡モ今日御送り置申候也。

(封筒) 備中浅口郡三和村 小野達郎様 拜答

封 三月十日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 66 小野慎一郎(松蔭)宛三島中洲書簡 (大正四年(一九一五)一月八日付)

拜啓、寒冷之候愈御清健奉賀候。拙老儀今夏進講之節、宮中階段ノ誤落候、輕キ中風ヲ引起シ、言舌不分明ニテ困居候。併シ他之身体ハ別條無之、徐々ト詩文モ作り揮毫モ致居候。御同安可被下候。却説、先日は新聞紙誤傳ヲ囃シ立、御歛状被下、又御肴料一封込被下、痛入候へ共、辱受納致候。右ハ此節漏レ承レバ、京都ニテハ一旦決議ニ相成、大隈ガ公爵ニ上り、宮内大臣ガ子爵ニ上り、次デ我ニモ男爵ト定り居、發表前ニ至り、大隈ガ政黨ノ議論ヲ入レ御辞退致し、宮内大臣モ御接伴ニテ辞退シ、我ニ迄貧乏筈ガ当り發表セズ、御帰京後、其次ノ御賞美トナリ發表シ、拙老ハ

叙勲一等、御紋附三組ノ銀盃、金式千五百円

メ右之通り拝領シ、御賞美ニ預り、斗モ角モ難有御事ニ御座候。多分右様之間違

ヨリ難産ニナリタルモノナラントノ事ト被察申候。詰り我ニ耳朶之薄キ故ナリト御笑可被下候。

一呉絹一枚有合候ニ付、御大典之詩揮毫、右御歎ノ答札ニ致進上候。是書ハ開封

ニテ差出可申候。先ハ乍延引御答如此ニ御座候。不宣。 十二月八日 中洲

小野松蔭君

(封筒) 岡山縣浅口郡三和村 小野慎一郎様

メ 十二月九日「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

#### 67 小野慎一郎(松蔭)宛三島復書簡 (大正五年(一九一六)一月六日付)

貴書拜見仕候。秋冷の候愈々御健勝奉賀候。当地老人其後特に異状も無御座候條、乍憚御省念被下度存上候。然は御仰せ相成候川手翁碑文、並に揮毫の儀敬承仕候に付、緩々御待ち被下度願上候。又小野翁碑文一篇相寫させて差上申候間、御落手被下度、先は御返事まで如此に御座候。延引の段は平に御容赦被下度奉希候。敬具。 復 十月六日 小野松蔭様御侍曹

(封筒) 岡山縣浅口郡三和村 小野松蔭様 侍史

メ 十月六日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

**68 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（大正五年（一九一六）一〇月一九日）**

老病中畧文御免。御取次之川出碑文、別紙之通綴り候ニ付、差出申候。川出へ御見せ、事実二間違アレバ附箋ニテ御申越被下候へは改正可致候。

一過日ハ外祖父様為写相送り置申候。御受書無之二付、着不着不相分、御報知可被下候。

一此碑文下案区別ナク延續ケニカキアリ、金神局長ハ壽夫ノコトカ元吉郎ノコトカ不分、葉書ニテ御尋申候へ共、御返書無之、因テ推察シ、壽夫ノコトナラント存ジ書置申候。又女婿熊巳氏ノコトカトモ被思候へ共、藝州ハ金神ノ出仕モ如何ト疑ヒ、壽夫ト定メ申候。

一此碑文ノ書ハ御地ニテ揮毫スルモノアリヤ。アレバ宜シ。拙老ハ老手顛、細楷ハ御断申上候。愈揮毫スルモノ無レバ、過日御申越シ礼金貳拾五円ノ内五円ヲ書家二分ケ遣シ、拙者名義ニテ代書サセラレテモ宜シト存ジ候。此段御相談申上候。

一愈当地ニテ為書候コトニナレバ、墓石ノ寸法御申越可被成候。又碑文舛稿モ御返シ可被下候。

一御申越之聯落詠史ハ今日認メ開キ封ニテ差上置申候也。

中洲 十月十九日 松蔭兄

（封筒）岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野慎一郎様 碑文在中

メ 十月十九日 「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

**69 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（大正五年（一九一六）一二月七日付）**

老病中畧答。

一過日差出候拙文中、岡山縣先覚ト申事、御氣ニ不入トノ御疑問被下、是ハ最初藤田ガ祖父ノ遺教ニ因リ岡山縣測量ヲ終ヘタルニ付、建碑スルト頼ミ来リタルニ

本ヅキ、祖父之数学モ縣内デハ第一ト心得居タル處ヨリ發シタル辞ナリ。実ハ拙者数学ニハ暗ク、祖父ノ数学ヲ天下ニ打出シ如何ナル度合ノモノカ分ラズ。実ニ過キタルコトヲ云テモ、井底ノ蛙トカボンクラトカ他人ニ笑ハレテト心配シ、縣

内一番位ニ謙遜シテ申シタルナリ。内心ニハ天下ノ先覚トカ世界ノ大家トカ申シ度ハ山々ナレトモ、縦令適當ニテモ自負自慢ヨリハ謙遜ノ方奥ユカシト存ジ、右ノ通り申置タリ。範雄ガ云タル辞ナレバ他人ノ評價故ニ、其通りカケトモ、身内タリ孫タル拙老ノ辞トシテハ十分ノモノヲ八分カ五分カ三分ニ云々方宜敷カト存

候。誰モ人ハウヌボレ心ノ強キモノナレトモ、自分ハ謙遜スルガ道理ナリ。縦へハ我親ヲ皆賢父ト思ヘトモ、他人ニ向テハ愚父ト云方奥ユカシ。又人ノ僕ニモ非レトモ、他人ニ對シテ自分ヲ僕ト稱スル如シ。内心ニテ不当ト思ヘトモ、謙語ヲ用キルガ礼義ナリ。右ノ旨意御熟考被下候へは、岡山縣先覚トカキタル辞モ御諒解ニ可相成ト存候。且先覚ト申字ハ孟子ヨリ出タル語ニテ、今日俗ニ發明者ト云辞ナリ。昔者、伊尹トカ伯夷トカ云人ハ世間ガ愚昧者斗リノ時ニ師匠モナシニ人間ノ道理ヲ先ツ一番ニ發明シ覺リ知リタト云字ナリ。数学デ云ハ世間ニ数学ヲ知ラサル時ニ師匠ナシテ数学ヲ發明シタリト云コトニテ、輕ク御覽被下間敷候也。

中洲 十二月七日 小野兄

（封筒）岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様 拜復

メ 十二月七日「東京麴町區壹番町四拾五番地 三島毅」

**70 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（大正六年（一九一七）二月一日付）**

老病中畧文御免

一過日は鄭重ナル一封、又御歌ニテ米寿御祝被下、辱壽納申候。此春中ニは度々壽宴モ開キ御臨席モ願度ト存候へ共、遠方御迷惑カト拝察シ、祝餅ノ代リニ続本ニ自壽之律詩相認メ進呈仕度、今日小包ニ御出置申候。御笑留可被下候。一枚ノ半折ハ源頼義公ヲ思フ詩進上致候。其訳ハ、拙老今ヨリ七十九年前、貴兒誕生之年、端午ノ時分ニ母ニ從ヒ貴家へ参リ、頼義公岩清水ハ幡宮参詣ノ幟リノ繪ヲ見テ羨シク、帰宅ノ上母ヘネダリタルコト思出シテ、此公ノ詩ヲ書キ申候。此公モ八十八ノ長壽ニ御座候。

一又乍序御吹聴申候。過日は兩陛下ヨリ御内使ヲ被下、左ノ品ヲ賜ヒ米壽ヲ御祝ヒ被下候。一銀製ノ鶏ノ雛三疋ガ亀ノ形ヲナシタル稲手把ノ上ニ集リ、純金ノ米ヲ拾ヒ居ル床ノ置物ヲ描金ノ臺ニ載セタルモノ一箇。泥金ノ浮繪ニテ群亀ガ數十尾表裏ニ泳キ居ル御朱塗りノ御盃壹箇。

加フルニ、伊丹酒六瓶ト、蒔繪ノ提ゲ重ヘ幾種ノ御料理ノ肴ヲ盛り賜り候。但シ拝領ノ器物ハ皆々返上セズ其マ、頂戴スルガ例ナリ。右恩賜ノ内、鶏雛ガ米ヲ拾ヒ居ル置物ハ米壽ニ適當ノ品ニテ、深く御心ヲ被用候モノニテ、別テ難有存居申候。

右ハ今賀ニ限ラズ七十八ノ賀年ニモ貴重ノ御祝品拝領致居り申候。匹夫ヨリ起リ、年賀毎ニ御祝品賜り候モノハ他ニ其例有之間敷ト自ラ喜ビ居申候。御同慶可被下候也。 二月一日 中洲 松蔭兄

(封筒) 岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様 親展

封 二月一日 東京府下荏原郡大井町庚塚 三島別荘四九九五ニテ  
「東京麹町區壹番町四拾五番地 三島毅」

**71 小野慎一郎 (松蔭) 宛三島中洲葉書 (大正六年(一九一七)二月三日付)**

此頃差出シタル手紙ニ書殘シタルコトアリ、左ニ。磯部成文ト申人ノ父ノ遺集ノ序文御頼之手紙カ着ノ時、風邪臥床中ニテ、ソノ下案ヲ紛失セリ。此葉書着次第、折返シ、右下案御越シ可被下、早々作り差出シ可申候也。 二月三日

(封筒) 岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様

東京府下荏原郡大井町鴻塚四九九五 別荘ニテ 三島中洲

**72 小野慎一郎 (松蔭) 宛三島中洲書簡 (大正六年(一九一七)二月一日付)**

口上。磯部翁遺詠序漸ク出来、別紙御届申候。然ルニ老眼ノ細字揮毫、横斜大小不整、見苦敷候へ共、御勘弁可被成候。文中ニアル繪原村莊ハ余ガ別荘ノ名ナリ。西望富嶽、景色如繪、因テ名ツケタルナリ。 中洲 二月十五日 松蔭翁

(封筒) 岡山縣備中浅口郡三和村大谷 小野松蔭様

二月十五日 東京府下荏原郡大井町四九九五

繪原村莊ニテ三島毅「東京麹町區壹番町四拾五番地 三島毅」

**73 小野達郎宛三島家執事書簡 (大正六年(一九一七)三月二日付)**

拝復、益御清榮奉賀候。先生益御健全被為在之、乍憚御休神可被下候。潤筆料式拾五円中、正ニ御預リ申置候。昨年末ハ揮毫ヲ求ムルモノ非常ニ多ク、今ニ昨年ノ分書キ不終ル様ノ次第、為メニ市価モ四十年前ノモノスラ拾円以上ニ有之、侍講以來ノモノハ其二三倍ニ売買サレ居候由。從而奸書画商等モ出来、執事等ノ取扱頗ル困難ヲ来シ候為メ、不得已今般左記ノ通り執事間ニ於テ内規取扱候間、内々御含迄申上置候。尤も御取次之御方、又貧富ニ依リ少シハ手加減致スハ勿論之事ニ御座候。先ハ不取敢御答迄、草々敬具。 三月二日 三島家執事 小野達郎殿

内規

一 屏風 一双

金壹百円以上

一 幅物、大額面 大小統紙ニ関ラズ

金拾円以上

一 額面

金五円以上

一 扇面、小切、題字、短冊等 金參円以上

以上  
(封筒) 岡山縣浅口郡三和村 小野達郎殿 御答

**74 小野慎一郎宛三島中洲葉書 (大正六年(一九一七)三月二三日付)**

達郎君御頼之八枚、今日小包へ出置申候。右絹代五尺ニテ式円、紙代六枚ニテ四十八銭、右送り可被下候也。

岡山縣浅口郡三和村 小野慎一郎様

三月廿三日 東京府下大井町三島別荘 中洲

**〔年代未詳書簡〕**

**75 小野慎一郎 (松蔭) 宛三島中洲書簡 (明治某年五月二〇日付)**

拝見仕候。輕暑之節愈御多祥奉賀候。然ハ過日御話申上候白神一件御仲裁云々、御申越二候へ共、熟考候處、三島モ味野紡績ニ而大ニ損亡致候上ニ、両家不幸相續キ、入用モ莫大ト被察候間、今少シ氣ヲ抜キ不申候而ハ折角之御仲裁モ難被行ト愚考候間、今暫ク時機御待可被下候。川出揮毫云々、承知ハ仕候へ共、多用中ニ付、今暫延引之段御承知置可被下候。過日御頼置之小絹一枚出来ニ付、幸便差出申候。先ハ御答旁如此ニ御座候。不宣。 五月廿日 毅 松蔭小野兒

**76 小野慎一郎 (松蔭) 宛三島中洲書簡 (明治某年七月一八日付)**

御細書拝見。梅霖斗角晴兼、不順之氣候二候へ共、愈御清健奉賀候。然ハ亡祖父君之儀ニ付、縷々被仰越、御尤ニ御同意申上候へ共、是ハ皆下より起ルコトニテ、已ニ三四月比縣庁ハ高梁郡長ナドへハ有名人取調之沙汰有之、直ニ取調ベ差出、最早内部へ差出ニ相成候事故、今日ニ而ハ手後レカト被存候。且縣分申出無之事ヲ拙者共横合より手ヲ入候トテ、迎モ出来候コトニ無之候。併、乍手後浅口郡長へ御内談有之、追願ドモ出来レハ無此上事ト奉存候。伝聞スルニ、岡山縣分沢山申出有之由ナレトモ、其上ヲ内部又内閣ニテ取調ベ、能々之人ニ無之ハ無覺束被察申候。是迄他縣之比較ニテ分り居申候。御熟考可被下候。

一 御別書被仰越、杜鵑云々之事ハ閑暇次第揮毫差出可申候。艸々拝答。 七月

十八日 中翁 松蔭兒

尚々、絹代壹円正ニ御預リ申置候也。

**77 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（某年八月二十五日付）**

拜啓、秋雨洗残暑、稍爽涼相成候處、御挙家御安祥奉賀候。拙老依然頑健、御省慮可被下候。陳は先般以来毎々御書被下、小閑谷之詩文御求之處、不相替文債多に付、詩二而御免蒙度存候へ共、折角亡母所生之地、景勝表頭は菩提之為二相成候事と思付、数日勉強して記文綴り申候。然ルニ記未見之處は甚困難、御材料二依り想像記述候へ共、大間違有之テハ虚偽ニ涉り候間、右艸稿一應入御覽申候。固ヨリ夢中ノ記故、少々之相違ハ構不申候へ共、大間違之箇所は附箋ニテ御申越可被下候。然ル上改正シ、絹本ニ浄書差出可申候。勿々不一。八月廿五日  
中洲 小野松蔭兄  
尚々、皆様へ可然御傳聲可被下候也。

追啓、二十年前ノ旧作ニ致呉候様御申越二候へ共、左スレハ官名位階勲等丸テ間違ヒ、記入出来不申候ニ付、今日之作ニ致申候也。

**78 小野達郎宛三島中洲書簡（某年九月二十九日付）**

秋冷相催候處、貴家皆様御安健奉賀候。拙宅一統無事、御省念可被下候。然ハ弓削氏へ御添書有之、心求数枚揮毫相渡置申、其序ニ御大人御頼之井上氏額面モ相認メ、弓削氏へ托置候間、御大人へ御差出可被下候。統代別紙之通取替置候。是亦御申上置可被下候。勿々不尽。九月廿九日 中洲 小野達郎君

**79 小野達郎宛三島中洲葉書（某年二月二十五日付）**

歳末御多忙之処、皆様御清健奉賀候。然ハ先日ハ潤筆金拾壹円御贈被下、致受納候。乍延引今日統本壹枚、紙本六枚揮毫、相送候間、御落手之上、夫々へ御配送可被下候。乍末行御大人初皆様へ宜敷御伝声奉願候也。

備中浅口郡吉備村 小野達郎様 十二月廿五日／東京一番町 三島中洲

**80 小野慎一郎宛三島中洲書簡（大正初期某月某日）**

此ハ菓子ハ皇后陛下葉山兮御帰リ之御土産ニ候間、其御積リニテ御戴キ可被成候也。 中洲 小野様

**81 小野達郎宛三島中洲書簡（明治某年某月某日）**

再啓、大書画帖云々御申越、拙老題字致候儀ハ承知二候へ共、他ノ書画ヲ集メ候事、拙老老人之力ニ不及候。来訪人ニ為書候様被仰越候へ共、来訪人ハ用談ニ参

り、用談済メハ去ル。主人モ多忙、長居ノ客ハ断ルト申場合、拙老為書候コトハ六數、無理ニ為書トモ印章ヲ持参セズ、跡ハ一里ニ里ヲ印ヲ取りニヤラネバナラズ。都下ハ実ニ多忙ノモノニテ、田舎ノ閑々タル御考トハ大違ノモノニ御座候。殊ニ老人ハ面倒ナルコト実ニ閉口ナリ。毎日東宮ニ出勤之帰後、少々之間ニ塾生ニ講訳モ聞カセ、四方ハ續々ト被頼候詩文モ作り、又添削モ致シ、其上ニ揮毫モ致シ、実ニ目ヲ振ル間モナキ多忙、御憐察可被下候。自分ナガラ此老衰ノ身ニテ能勉強スルト感心スル位ノ事ニ御座候。右御察被下、面倒ナルコトハ御免可被下候。今少シ若カケレハ何卒御世話仕度心底ニ候へ共、何分老人ノコト故、御勘弁奉願候也。

**82 小野慎一郎（松蔭）宛三島中洲書簡（某年某月某日）**

貴札拜見仕候。軽暑之節、愈御安寧奉賀候。拙老儀も頑健ニハ候へ共、早春ノ今日迄永々之供奉、留守中用向も溜り、御還御ノミ御待居候處、来ル十二日御還御ト被仰出候故、不遠帰京可仕候。

一川出氏自国栽培之梨子献上之儀御問合せ、承知致候。右ハ平人より直ニ献上ハ出来不申候へ共、東宮へ奏仕之自分、直ニ物品ヲ献上出来ル資格アル物へ頼ミ伝献ト申事ハ出来申候。例へハ川出氏ハ小生へ宛テ物品ヲ送り、御序之節御伝献被成下度ト書面ヲ添へ御越ナレハ、

何国何郡何村 自分 何某

右自国栽培之梨子壹籠、或ハ何十顆、伝献願遣間、御披露可被下ト申様之文言ニ而、東宮大夫へ出ス時ハ、御前へ披露之上、大夫ハ小生へ宛、何某自国之梨何程伝献御申出ニ付、入御覽候也ト申頼之書付ヲ被渡申候。其書付ヲ小生ハ御当人ニ差（以下缺）

(2) 三島中洲宛諸家書簡(差出人の五十音順)

01 足立正聲(あだち まさな 一八四一〜一九〇七) 鳥取藩士、芳野金陵門下、宮内官吏。男爵。

足立正聲 三島中洲宛書簡(明治三五年(一九〇二)二月二日付)

拝見、先頃来御風氣被為入、追々御快復之趣ニ候へ共、御加養ノ為メ供奉御延引と奉存候。折角御大事可被遊。さて牡蛎御傳献之儀、奉畏候。明日午後十時〇十一時頃、諸陵寮へ御執事御遣し相成候ハ、(牡蛎ハ車ニ置キテ先ツ御執事のミ御出被下度)、可然取計可申候。」同品御分与難有拜受仕候。当座拜酬如斯御座候。早々頓首。二月二日 正聲 二松先生 玉座下

(封筒) 三島様 執事/メ 足立正聲 (別筆) 諸陵頭

02 板倉勝達(いたくら かつさと 一八三九〜一九一三) 福島藩第十二代藩主。子爵。

貴族院議員。三男勝輝は塩業家野崎武吉郎の養子。

板倉勝達 三島中洲宛書簡(明治三一年(一八九八)一月二日付)

拝讀仕候。陳は来十一日、勝輝同道參館候様御招ヲ蒙り、難有鳴謝仕候。右御請込如斯御座候。敬具。 十二月八日 板倉勝達 三島様机下

03 稲葉正繩(いなば まさなお 一八六八〜一九一九) 松浦詮の子、淀藩主稲葉家の養子。子爵。宮中顧問官。娘英子は郷朔雄(純造九男)の妻。

稲葉正繩 三島中洲宛書簡(某年一月一日付)

拝啓、時下嚴寒之候ニ御座候處、益々御清迪、大慶之至ニ奉存候。陳は小生友人ニテ豫而先生之御揮毫熱望致候者有之、再三依頼越候ニ付テハ、御迷惑之御事ト存候へ共、御閑暇之節七言絶句御揮毫被成下候ハ、幸甚之至ニ奉存候。仍而乍粗末到来白紙為持差出候間、宜布願上候。先ハ右御願迪、得貴意候。敬具。 一月十七日 稲葉正繩 三島中洲先生 侍史

(封筒) 麹町区一番町四十五番地 三島中洲先生侍史

メ 青山北町七丁目老番地 子爵稲葉正繩

04 入江為守(いりえ ためもり 一八六八〜一九三六) 冷泉為理の三男。入江子爵家を継ぐ。開塾直後の二松学舎に学ぶ。東宮侍従長・貴族院議員などを歴任。

① 入江為守 三島中洲宛書簡(明治三六年(一九〇三)三月一日付)

春寒料峭之處、弥御安荐、奉敬賀候。小生去廿六日無事帰京仕候ニ付、乍憚御安心希上。却説、其地滞留中八種々御教訓ニ預り、又勝地へ御誘引被成下、御懇情深感佩、奉多謝候。御蔭にて五旬之間樂シク客遊、近來之快事ニ御座候。帰宅後早速御禮可申上筈之處、一兩日彼是取紛延引、御海知願上候。先ハ右御挨拶迄、一筆如此御座候。勿々不宣。 為守 三月一日 三島先生函丈

(裏面端書) 貴族院議員 子爵 入江為守

② 入江為守 三島中洲宛書簡(大正二年(一九一三)六月二日付)

拝啓。陛下より「讀乃木大将遺書」之御詠御垂示、速ニ次韻可差出旨、柳原局を経テ御沙汰有之候。仍別紙草稿差出候ニ付、乍恐縮直ニ御添刪、此使へ御渡願上候。一兩日前〆風邪ニテ臥床罷在拜趨難致、乍略儀以使御願申上候次第。不惡御承知奉願上候。早々頓首。 六月廿二日 為守 三島先生函丈

題ノ認メ方も可然御教示願上候。

(封筒) 麹町一番町 三島先生侍側/封 六月廿二日 入江為守

05 岩倉具定(いわくら ともさだ 一八五二〜一九一〇) 岩倉具視の二男。岩倉公爵家を継ぎ、貴族院議員、学習院院長、宮内大臣などを歴任。

岩倉具定 三島中洲宛書簡(明治四二年(一九〇九)一月一日付)

赤阪離宮御苑之製茶壹壺被下候間、御回申入候也。

明治四十二年十二月十七日 岩倉宮内大臣 三島東宮侍講殿  
追テ御礼之儀ハ取計置候間、御參ニ不及候。為念此段申添候也。

(裏面端書) 岩倉宮内大臣 是ハ書記代筆ナリ

06 岩崎奇一(いわさき きいち 生没未詳 熊本の人、号南野。大蔵省に入り、各

地の稅務監督局長を歴任。漢詩文に堪能であった。

岩崎奇一 三島中洲宛書簡(大正二年(一九一三)六月九日付)

奉拜啓候。御来示の如く梅前天氣不順ニ候へとも、益御清穆あらせらるへく奉敬賀候。聖像図献納方ニ付、種々尊慮を煩し奉り候段、奉拜謝候。高底ニ據り微誠を效すを得、幸甚之至るものなく難有仕合ニ奉存候。品物装置方等も御取計被下し由、殊ニ野調御内覽に御入れ下されし趣、唯々恐配仕候。又高作を賜り、榮

事と共に家乗二記し、珍寶として子孫ニ傳ふべく、御禮申上候。不日上京、親しく謝意を表し奉るへきも、不取敢鄙簡を捧呈し、貴翰ニ對し御受のみ申上候。時下御自重奉祈候。草々敬具。六月九日 岩崎奇一 三島侍講閣下

(封筒) 東京市麹町区一番町 三島毅殿 煩親展

07 岩溪裳川(いわたに) しょうせん 一八五二〜一九四三 名晋、字子讓。福知山出身。

東京に出て森春濤に学び、漢詩人として名をなした。

岩溪裳川 三島中洲宛書簡(某年六月二十六日付)

拝啓、弥御清安、奉大慶候。先日御預り申候詩箋ハ三宜亭上ニ置帰候間、別侍小統ニ拙作相認メ差上申候。悪札慚愧之至ニ候。草々頓首。 廿六日 岩溪晋 中洲先生

(封筒) 一番町二松学舎 三島中洲先生 梧石

メ 六月廿六日 平河町六三 岩溪晋

08 大森鍾一(おおもり) しょういち 一八五六〜一九二七 幕臣の家に生まれ、明治

政府に出仕し内務官僚として知事を歴任し、皇后宮大夫となる。男爵。

大森鍾一 三島中洲宛書簡(大正三年(一九一四)一月一日付)

拝啓、久敷不得拜晤、御無沙汰仕候段、不本意千萬奉存候。先以御健勝重疊奉恭賀候。扱過般三宅武彦より御揮毫相願候處、早速御認被下、難有奉存候。永珍藏可仕、厚御礼申上候。旧冬は不慮之御怪我被成候由、碌ニ御見舞も不申上、恐入候。此際御染筆相願候段、心なき儀と深恐縮奉存候。何れ其内參以御礼可申上候得共、不取敢一応之御禮まで如此御座候。拜具。一月十四日 鍾一 三島先生侍史 尚時下寒氣強候。御自重、為國家奉萬祈候。

(封筒) 東京麹町区土手三番町 三島毅殿 親展

メ 京都 大森鍾一

09 岡内重俊(おかうち) しげとし 一八四二〜一九一五 土佐藩士の家に生まれ、司

法官僚となり、貴族院議員に勅選される。男爵。

岡内重俊 三島中洲宛書簡(大正元年(一九一三)一月二四日付)

拝啓、愈御安勝奉賀候。扱ハ小生友人宍戸義知氏ノ事ニ付、御厚情ヲ以テ芳書ヲ賜り難有。現時ノ所ハ使用之途モ無之候得共、将来ニ於テ何歟必要之時機モ無キニ非ストノ御厚情、本人宍戸氏へ相傳へ候處、大先生ノ御厚情感銘仕り、宜敷御

禮申上呉トノ事ニ付、茲ニ小生ヨリ御禮申上候。宍戸家出身之地ハ大先生御出身地ト近ク御座候由シ。即刻又別紙謹白トアル作文出来候ニ付、之ヲ差上候。御閑暇之際、御一閱奉願候。先ハ御禮旁別紙進呈仕度、為其草々敬具。十一月二十四日 岡内重俊 三嶋大先生侍史

(封筒) 麹町區壹番町四十五番地 文学博士三島毅殿 親展

メ 十一月二十四日 本郷區丸山新町二十番地 岡内重俊

(別筆) 男爵

(宍戸義知の文稿「(与中洲先生書)」 「尊王名寔論」を同封)

10 落合為誠(おちあい) ためのぶ 一八六六〜一九四二 号東郭。熊本出身、元田永

孚の甥。漢詩人。七高教授を経て、宮内省に転じ大正天皇の侍従となる。

① 落合為誠 三島中洲宛書簡(大正三年(一九一四)一月一日付)

拝呈仕候。寒冷之候、弥々御清康奉欣賀候。猶十分御静養被成度奉願候。別紙御沙汰により御送附申上候間、御拝見済の上、御返附被下度奉願候。頓首再拜。為誠 一月十八日 中洲先生侍曹

(封筒) 相州湯河原温泉富士屋 三島毅殿 親展「書留」

緘 東京宮中侍従職 落合為誠「宮内省」

② 落合為誠 三島中洲宛書簡(大正四年(一九一五)四月一日付)

拝呈仕候。一昨日御使として御許に罷出候節は彼は御配慮に相成り、辱く存上候。御献上の薇は昨日帰京後、直に御覧に入れ候處、御満足被遊候御模様にて候間、此段一寸申上候。尊作も直に差上候。また小生に御示し被下候御作は不日御次韵申上候て、御教正を得度存居候。時下時候不順にて候間、十分御撰養被成下願上候。右まで申上候。敬具。 為誠 四月十六日 中洲先生侍史

(封筒) 神奈川県湯河原温泉富士屋 三島毅殿侍史

緘 東京麹町区中六番町四 落合為誠 (別筆) 侍従

③ 落合為誠 三島中洲宛書簡(大正某年三月六日付)

拝呈仕候。俄に春暖を覚え候處、弥々御清康奉賀候。過日御手書被下、辱く奉存候。今日出勤拝見致候。今又、皇后陛下御作差出候間、例の通り御添削御申上被成度候。敬具。 為誠 三月六日 中洲先生侍曹

(封筒) 三嶋御用掛殿 親展/緘 侍従職 落合為誠

11 小野湖山 (おの こざん 一八一四〜一九一〇) 名長愿、別号賜研楼。近江の医家に生まれ、各地に遊学し、勤皇活動に従事。維新後は詩文を専らとした。

小野湖山 三島中洲宛書簡 (某年某月某日付)  
高配萬謝。 耄愿再拜。 (別筆) 九十六翁 小野湖山 名長愿、詩人。

(封筒) 麴町區壹番町 二松学舎 御塾長様  
外神田五「欵」丁十五番地 小野湖山

12 楫取素彦 (かとり もとひこ 一八二九〜一九二二) 萩藩儒小田村家を継ぎ、吉田

松陰と親交。維新後、群馬県令、貴族院議員などを歴任。男爵。

楫取素彦 三島中洲宛書簡 (明治二五年 (一八九二) 四月二二日付)

拝啓、前日乞高評置候拙文、御多用之央、恐縮ニハ候得共、御清閱相願度候。著述者已ニ上梓ニ取掛候由ヲ以促シ来り、何卒朱批可被下、此段得尊意候也。 四月二十二日

糺町区一番町四十五番地 三島毅殿/赤坂新坂町三十三 楫取素彦

13 川北梅山 (かわきた ばいざん 一八三三〜一九〇五) 名長願。津藩士。津藩遊学中の中洲と親交。維新後、上京して中洲と交流し、二松学舎でも教えた。

① 川北梅山 三島中洲宛書簡 (某年一月一九日付)

本年ハ寒氣殊甚シク覚候處、此頃ニ至リ大ニ弛ミ、凌易存候。御地ハ兼テ暖氣ニ承り、定テ梅花モソロソ開キ候位ト想像致候。当地ハ中々開ク模様ハ無之、益梅ニテ漸ク春色ヲ知り候事ニ御座候。高文一二妄言返上。先ツ御出張中、愈御壯健奉賀候。老夫モ依然瓦全、乍憚御安意可被下候。本年ハ寂寞タル正月ニテ、一人モ賀客無之、閑中更閑、却テ無聊ヲ覚ヘ候。御一笑被下候。他付後郵、勿々不乙。 長願 一月十九日 中洲先生

② 川北梅山 三島中洲宛書簡 (某年二月七日付)

拝復。如高諭一旦ハ暖氣ニテ易凌候處、俄ニ奇寒加之、連日大雪六寸位モ積リ今ニ不消、老夫大ニ閉口擁炉ノ外萬事抛擲、御憐察可被下候。高作御垂示、何レモ感服、殊ニ記文ハ絶妙、筆力ノ自由ナルコト驚歎ノ外ナシ。南評尽之、一二吹求、返上仕候。序而ニ愚作少々有之、高覽ヲ乞フ。御痛正相願候。近来ハ懶之又懶、其上材料無之、歎息之至ニ御座候。右拝復願用旁草々不備。 二月七日 長願 中洲先生坐右

(封筒) 三島先生侍史 「東京麴町區三番町七拾五番 川北長「」」

③ 川北梅山 三島中洲宛書簡 (某年四月一八日付)

桜花好時節、雨天ニテ可惜。昨日小女ヲ携、靖国社園へ花ヲ始テ一覽ス。昨冬以来臥摩ノ處、頗愉快ヲ覚、ウカ、園中ヲ徘徊ス。既ニシテ目眩殆ト欲卒倒。小女ハ老爺ノ苦ヲ不辨、一時ハ試歩ノ初メニ過度ヲ悔ヒ、近邊ノ車夫ヲ備ヒ帰宅セント迫ニ思ヒ申候。老耄 (今朝ハ平常ノ通り) 御憐察被下度候。却説、兼テ申上候拙稿漸ク印刷デキ候間、先ツ別製本及並本一部ツ、呈上仕候。前以御一覽ヲ可乞ト存候処其暇ナク、且先生も御出張中ノ事故差扣、草卒付活版、校正ハ豚児ニ托シ候テ、再應ノ校正モナク、随分誤填不少。正誤一枚、近日出来候筈ヨリ、不取敢呈上ノ分丈宅ニテ直シ候。其積リニテ御一覽ヲ乞フ。于時隠者ナレトモ名利ノ心ナキニ非ス。未タ発行セザルニ他ヨリ数部注文アリ、旧縣ヨリも百部位ハ入用ノ由。於是乎大ニ利心ヲ起シ、三島先生ヨリ最初ニ百部ノ注文アリト称シ、宅へも百部ヲ残シ、進物も百部位ハ入り、僅ニ五部ヲ限リタル者ニテ、連モ足り不申、此分ニテハ随分ハケ口宜シカラント思惟ス。知己ノ間故、赤心ヲ吐露ス。御一笑可被下候。餘は其内拝趨、萬縷可申上候。春雨無聊、不堪愁悶。病中故、先ツ此位ニテ閣筆。 長願再行 四月十八日 中洲先生侍史  
諸君ノ評ニ、餘り溢美ノ處、又ハ非難ニ過ル分ハ少々取捨ス。請恕セヨ。以上。

④ 川北梅山 三島中洲宛書簡 (某年二月二五日付)

歳尾ナレトモ非多忙、但家累ノ勿々タルニ因テ閑人モ亦心中不得不勿々。是未タ仙境ニ臻ル能ハザルノ故耳。懇々。愚作御評被下、羽翁江も御廻し被下、重々難有奉謝候。高文両三日中ニ返上云々、拝承。猶又珍敷御品御惠贈難有、速ニ拝味可仕相樂申候。 右奉復迄。 十二月廿五日 長願 中洲先生侍史

14 川田甕江 (かわた おうこう 一八三〇〜一八九六) 名剛。備中玉島出身。江戸遊

学後、備中松山藩儒となる。維新後は修史局、宮内省に奉職、東宮侍講となる。

川田剛 三島中洲宛書簡 (某年某月某日付)

前公子御分籍之儀、華族云々御問合、致承知候。右ハ勤王トカ何トカ名義無之クテハ六ヶ敷候。小早川様も昨年来由緒等、史館江御取調相成、種々議論アリ、漸く特旨之事ニ帰シ相済候。逆も六ヶ敷とも存候得共、為念問合之上、御答可申候。

(封筒) 三島大兄侍史/封 葉山寓居 剛



15 日下部鳴鶴(くさかべ めいかく 一八三八〜一九二二) 名東作。彦根藩出身。太政官出仕し、退官後は書道に専心。碑学を基礎に近代書道を開拓した。

日下部鳴鶴 三島中洲宛書簡(某年三月一四日付)

拝讀。村上文稿正に落手致候。早速差出可申候。明日拜芝、萬御礼可申上候。勿々頓首。三月十四日 日下部東作 中洲先生

(封筒) 三島中洲先生 拝答 日下部東作

16 栗野慎一郎(くりの しんいちろう 一八五一〜一九三七) 福岡藩出身。ハーバー

ド卒業後、外務省入省。駐仏公使・駐露公使などを歴任。子爵。

栗野慎一郎 三島中洲宛書簡(某年一二月二日付)

拝啓、時下益御清康之段奉恐賀候。陳は亡父碑文之義ニ付、友人ヲ以テ御面倒相願申上置タル處、早速御承諾、御稿成被下候趣ヲ以テ、先便友人送越候。右拝閱致候處、御立稿之向、曩差出タル原稿中、精確ヲ欠キタル處有之候為メ、事実之点ニ於テ少々如何哉ト思ハル、個處モ有之、聊カ修正ヲ加へ、別書覚書相認、再ヒ呈覽候間、御繁務之御央誠ニ恐縮之至ニハ候得共、可然御訂正被下候得は、小生之幸不過之候。先ハ前段之御礼旁右御依頼迄、如斯御座候。勿々頓首。十二月二日 栗野慎一郎 三島毅殿

17 皇后宮職(こうこうぐうしょく) 皇后の家政のための組織。組織の長官が皇后宮

大夫。徳川達孝の在任期間は一九一五・三・二三〜一九一六・六・二二。

① 原皇后宮主事取扱 三島中洲宛書簡(大正四年(一九一五)七月二九日付)

一御菓子 一御野菜 右聖上以思召賜ハリ候間、御拝領可有之、此段申進候也。大正四年七月廿九日 原皇后宮主事取扱 三島宮中顧問官殿

(封筒) 三島宮中顧問官殿／原皇后宮主事取扱

② (皇后宮大夫事務取扱) 徳川達孝 三島中洲宛書簡(大正四年(一九一五)六月一五日付)

賜物有之候條、来十七日午前十時参入相成度、此段申進候也。大正四年六月十五日 皇后宮大夫事務取扱子爵徳川達孝 宮内省御用掛三島毅殿

(封筒) 宮内省御用掛 三島毅殿

／「緘」 「皇后宮大夫事務取扱伯爵徳川達孝」 「宮内省」

(別筆) 昔ノ田安卿

18 郷純造(こう じゅんぞう 一八二五〜一九一〇) 美濃の豪農出身。幕臣となり、

維新後は大蔵省出仕。男爵。二男誠之助は実業家。四男昌作は岩崎弥太郎養子。

① 郷純造 三島中洲宛書簡(某年二月一八日付)

益御清適奉欣拜候。陳ハ一事何度候ハ、私ニ男獨逸ニ八ヶ年程留学、過頃帰国仕候處、長年漢学ハさっぱり廢居候付、復修文章等も御教諭ヲ受度との事也。右ニ付、午後五時頃ハ一時間位宛御越ニ而御教諭相願度との事ニ御座候。御門人中ニ御相当之御方ハ無之候哉。可然御人も候ハ、被相願可申哉。乍御面倒、一応御申聞被下候ハ、難有仕合奉存候也。二月十八日 郷純造 三島毅殿  
二白、本文之御人も御座候ハ、何程位之月謝ニ而御越可被下哉も、御示し相願度候。以上。

(封筒) 三島毅殿 貴下／メ 郷純造 (別筆) 年八十六 男爵郷純造

② 郷純造 三島中洲宛書簡(某年九月八日付)

其後ハ打絶不得拜眉候處、益御清榮奉大賀候。陳ハ小生も腰痛ニ而難儀仕居候處、黒宮四方治と申者、水灸と申を致し、腰痛坏ニは至極宜敷旨承り、右ハ貴所様へ上り療治仕候趣、随分功能有之ものニ候哉。乍御面倒、一応御申聞被下度相願候也。九月八日 郷純造 三島毅殿

19 小松原英太郎(こまつばら えいたろう 一八五二〜一九一九) 備前出身。新聞記

者を経て官僚となる。文相、東洋協会専門学校長、斯文会会長などを歴任。

小松原英太郎 三島中洲宛書簡(某年一月二二日付)

拝啓、益御清福奉賀候。陳は森次太郎ナル者、東洋協会雑誌編輯長ニテ、拙生從來懇意ニ仕居候處、同人父本年八十歳、母ハ七十五歳ニテ、金婚式ニ相当候ニ付、老先生之御書相願度、紹介之儀依頼申出候。御迷惑トハ奉存候へ共、当人願望御許容被成下候へハ、甚幸奉存候。草々敬具。一月十二日 英太郎 三島先生 机下

(裏面端書) 今文部大臣 小松原英太郎

20 近藤久敬(こんどう ひさたか 一八五二〜?) 宮内省入省。内大臣(内府) 秘書

官・総務課長、宮中顧問官を歴任。

近藤久敬 三島中洲宛書簡(明治四三年(一九一〇)一月六日付)

来ル十日午前十時、御講書始可被為行旨、兼テ御治定之處、御都合ニ依リ十二日

午前十時二御変更相成候条、依命此段申進候也。 明治四十三年一月六日 宮内大臣官房 総務課長 近藤久敬 東宮侍講文学博士 三島毅殿

(封筒) 東宮侍講文学博士 三島毅殿

「緘」宮内大臣官房 総務課長 近藤久敬「宮内省」

21 西郷吉義 (こんどう よしみち 一八五五〜一九二七) 信濃松本藩出身。東大医学部卒業後、陸軍軍医となる。のち侍医、宮中顧問官。

西郷吉義 三島中洲宛書簡(某年七月一九日付)

炎熱酷敷候處、益々御健勝慶賀之至り二存候。陳は御繁忙之折柄、甚夕恐縮二御座候得共、別包粗絹へ何卒御揮毫被下度、懇望之至り、御許容被下候ハ、本懐不過之候。敬具。 七月十九日 西郷吉義拜 三島先生席皮下

(封筒) 長者園 三島先生 梧右ノ御用邸にて 西郷吉義

22 齋藤桃太郎 (さいとう ももたろう 一八五三〜一九一五) 幕臣の家に生まれ、明治政府に出仕し、宮内省に転じ、内府秘書官、宮中顧問官等を歴任。

齋藤桃太郎 三島中洲宛書簡(明治三五年〜一九〇二) 五月七日付)

皇太子殿下、明八日午餐二被為召候處、御都合被為在、来ル九日ニ御變更相成候條、同日零時三十分御参殿可有之、此段申進候也。 明治三十五年五月七日 東宮大夫齋藤桃太郎 東宮侍講三島毅殿

(封筒) 東宮侍講 三島毅殿ノ「緘」東宮大夫 齋藤桃太郎

23 阪谷芳郎 (さかたに よしろう 一八六三〜一九四二) 備中の漢学者阪谷朗廬の四男。東大文学部政治学科卒、大蔵省入省。蔵相、東京市長などを歴任。子爵。

阪谷芳郎 三島中洲宛書簡(大正六年〜一九一七) 五月三十一日付)

拝啓、御揮毫難有拝受仕候。右永ク珍藏可仕、厚ク御礼申上候。 勿々不一。

五月卅一日 芳郎 三島毅様

(封筒) 麹町区一番町 三島毅様 侍史

「東京市小石川原町百廿六番地 阪谷芳郎」

(朱筆) 礼状 (別筆) 男爵

24 阪本鈺之助 (さかもと さんのすけ 一八五七〜一九三六) 号蘋園。尾張の豪農永井家出身、永井久一郎の弟。内務官僚となり、福井・鹿児島知事を歴任。漢詩人。

阪本鈺之助 三島中洲宛書簡(某年一〇月二三日付)

雨天御同困に奉存候。尔来失礼奉打過候得共、益御清健被為涉、奉敬賀候。一昨朝拝趨、御留守中、執事迄御願仕置候、多田松莊追善会御展観之義、御多忙中殊に切迫之御願にて甚不堪恐懼候得共、本月卅一日開筵前、彼地にて装演もいたし度趣に申来居候間、可相成は明後朝は此地發送仕候事二致度候。自然明日之御休暇御寸閑も被為在候ハ、御舊作にて不苦候間、御一揮被成遣間敷哉。松莊之地下に感銘いたし候ハ勿論、發起人共にも一同欣躍仕候義と存候。明夕菟も角御玄闕まで使之者差出可申候得共、右再応御願仕置度候也。書中乍失敬、勿々如此御座候。餘は拝芝萬可奉陳謝候。頓首。十月念三夕 鈺之助拜 中洲老先生執事

25 (東宮職・宮内省) 侍従(じじゅう) 宮内省に属して、天皇・皇太子等の側近で奉仕する役職。

① 尚書侍従 三島中洲宛書簡(明治某年四月二四日付)

拝啓、別紙御詩御拝見之上、御添削可相成旨、御沙汰有之候二付、御廻申進候也。 四月二十四日 尚書侍従 三島侍講殿

(封筒) 三島侍講殿ノ尚書侍従 (別筆) 東宮侍従

② 上直侍従 三島中洲宛書簡(明治某年一月二九日付)

拝啓、昨日夕食之御下、貴官へ賜り候旨、御沙汰二付、及御廻候間、御拝受相成度候也。 十一月二十九日 上直侍従 三島侍講殿

(封筒) 三島東宮侍講殿ノ封 上直侍従 (別筆) 東宮侍従

③ 上直常侍官 三島中洲宛書簡(明治某年二月二五日付)

拝啓、今夜ハ大風二付、御参殿二不及旨、御沙汰有之候。此段御通知申上候也。 十二月廿五日 上直常侍官 三島侍講殿

(裏面端書) 東宮侍従

④ 上直侍従 三島中洲宛書簡(大正初期五月二七日付、落合為誠筆跡)

拝呈仕候。陳は貞観政要、太宗手詔答日より敬佇德音までの講義録を例の通り御差上被成度、此段御沙汰により申進候。敬具。五月廿七日 上直侍従

三嶋御用掛殿

(封筒) 三嶋御用掛殿親展ノ 五月廿七日 上直侍従「宮内省」

26 信夫恕軒 (しのぶ じょけん 一八三五〜一九一〇) 漢学者。名燦、字文則。鳥取藩出身。江戸遊学して漢学を学び、漢学塾を開き、東大講師となる。

① 信夫恕軒 三島中洲宛書簡(明治二三年(一八九〇)九月一日付)

拙文御覽被下奉謝候。陳は胡枝花、来る廿日頃満開之由申来候間、廿日土曜日午後御供申度候。乍憚、川田氏江右御報知願度候也。頓首。九月十四日

麴町區壱番町四十五番地 三嶋中洲先生侍史

「東京本所區龜澤町五十一番地 信夫燦」

② 信夫恕軒 三島中洲宛書簡(明治三四年(一九〇一)十一月二〇日付)

其後は久々打絶候。時下秋冷日相催候所、愈御清祥、大慶奉存候。御病氣ハ全ク御快然ニ候哉。御案事申上候。将又毎度恐入候得共、拙文一篇御叱正願度候。金石二付候者故、何卒痛ク御直し可被下候。扱別ニ一ツ御願御座候。明年義士二年忌ニ付、例之義士癖、追善之為、天下有数之名家詩ヲ四十七首集メテ上木仕度候。因先生ニも一首御吟詠願度候。御旧作ニテも宜し。右之本ノ題命ニ差支、歲寒詩トヤリテ見タレト未夕面白カラズ。何ゾ甘キ名ヲ御撰願度候。義士何トカヤリテ見度候得共、義士ガ自身作タル詩ノ様ニナリテハ面白カラズ。何卒御一考ヲ煩度候。先は兩様願度、勿々頓首。 廿日曉 燦拜 中洲先生

(封筒) 相州三浦郡葉山長者園 三嶋中洲先生侍史

緘 十一月廿日早天 東京小石川大和町拾貳番地 信夫燦發

③ 信夫恕軒 三島中洲宛書簡(明治四二年(一九〇九)九月一六日付)

尊翰久二而拜見、大慰無聊候。先以残暑之節、文履御清適大慶奉存候。小生碌々消光罷在候。御放念可被成下候。兼て御他出之様承知罷在候處、御帰宅ニテ更ニ大慶御座候。高文御垂示、一再拝読。妙不可言、別段可申上處も無之候間、拙評完趙仕候。益御長寿之程奉祈候。御詩作も定て沢山可有之、是も序ニ拜見仕度候。小生近頃評語ヲ苦心し、何卒一粒金丹驚人様ニト心掛罷在候。梅山翁遊り、百川ハ毫碌し、實ニ天下ニ名評家の者無御座候。頃重野氏ヨリモ第二編ヲ刊行スル故、評訂ヲ頼ト申来候。先は御返辭而已、隨時御自愛可被遊候様呉々も奉祈候也。勿々頓首。 九月望後一日 燦 中洲先生函丈

今朝之新聞ニ先生ノ八家文評点御座候由。拜見仕度候也。

(封筒) 麴町區壱番町四十五番地 三嶋中洲先生侍史

「信夫燦 東京市小石川區小日向武崎四十五番地」

(別筆) 友人ノ學者

封 九月十六日正午

④ 信夫恕軒 三島中洲宛書簡(某年三月一〇日付)

春寒料峭ニ御座候處、筆硯御清穆大慶奉存候。扱甚以御出張中恐入候得共、惡詩拙文一兩首、御叱正奉願候。其内何ゾ御礼申上度候也。早々頓首。 三月十日

信夫燦拜 中洲先生

留精松ハ石見国林氏ハ被頼、慥力先生も記文アリシカト存候。豊公ハ豊国会被頼、何レモ少々急ク由ニ有之候間、可相成ハ御早ク奉願候。然し五日ヤ十日有てもよろしく御座候。

⑤ 信夫恕軒 三島中洲宛書簡(某年某月二日付)

桜花爛漫之好時節、筆硯御清穆、大慶奉存候。拙文御叱正、奉謝候。高作妙不可言、實ニ不愧古人、真可謂妙。即一本ヲ写して返上仕候。一日も早く御帰京奉待候。先は御返事耳。勿々不一、頓首。 二日 燦拜 中洲先生

先生ノ文、上手ノ大工ガ画圖ヲ引タル如し。大家手段在於是。千萬年長寿是祈。

27 柴原和(しばら やわら 一八三二〜一九〇五) 龍野藩出身。森田節齋に学び、

新政府に仕えて、初代千葉県令、山形県知事、貴族院議員等を歴任。

柴原和 三島中洲宛書簡(某年一月一〇日付)

代舌。愈御清祥奉賀候。陳ハ兼而御依託仕候森雅治月俸并月謝金三拾圓さし上置候間、乍御面倒御預ケ置、月々会計方へ御廻し方宜敷相願、右御頼如是候也。一月十日 柴原和 三島先生

28 渋沢栄一(しぶさわ えいいち 一八四〇〜一九三二) 武蔵国の豪農出身。尊攘活

動から幕臣に転じ、新政府では大蔵省に出仕。のち銀行業等の実業に従事。

① 渋沢栄一 三島中洲宛書簡(明治四三年(一九一〇)一月一二日付)

尊翰拜讀。益御清適御座可被成、欣慰之至ニ候。然ハ小生昨年古稀之齡ニ達し候祝賀として、貴著之壽言、且御揮毫まで被成下、態々御惠投被下、忝拝受仕候。過日、阪谷を以て御願申上候拙宅邸内ニ目下建築中之愛蓮堂落成之上、御一覽被

下、其記文御撰相願度、又向庭之巨松煤烟之為二枯死之不幸二陥り候二付而ハ、一祭文をも相願度と存候。尤も昨今ハ時候宜しからず候間、少々春暄之氣候を待て尊臨之義申上度と存候。拜復旁前段豫め御願申上度如此御座候。敬具。一月十二日 澁澤栄一 三島先生坐下  
(裏面端書) 男爵澁澤栄一 高名之美実家

② 澁沢栄一 三島中洲宛書簡(明治四二年(一九〇九)六月二日付)

拝啓。時下薄暑之候、益御清適奉敬賀候。然ハ来六月八日午後一時より兜町拙宅へ徳川慶喜公爵閣下を御招待致し、御傳記ニ關する御話相伺候間、賢臺にも當日御繰合七被下、御光来被成下度候。此段御案内申上候。敬具。六月二日 澁澤栄一 三島毅様  
逐而當日ハ粗末之晚餐用意致置候。御諾否御一報被下度候。

(封筒) 麴町区一番町四十九番地 三島毅様 (別筆) 六月八日一時

封 澁澤栄一「東京市日本橋區兜町貳番地/澁澤事務所/電話浪花長一五八番・一〇一三番」

③ 澁沢栄一 三島中洲宛書簡(某年一月六日付)

拝啓。過日ハ參、御妨申上候。然ハ尾高惇忠之墓銘も一月之休日ニ漸く相認候二付、彫刻之上、摺物ニて拙筆御覽相願度奉存候。先頃さし上置候尾高之追吊會、席上演說筆記、御手許ニ御座候ハ、御下付被下度候。近々是も印刷ニ致し度と其親戚之ものニ申候二付、申上候義ニ御座候。右一書拝願如此御座候。不宣。一月六日 澁澤栄一 中洲三島先生玉案下  
(裏面端書) 澁澤手紙

④ 澁沢栄一 三島中洲宛書簡(大正五年(一九一六)一二月付)

拝啓。嚴寒之候、益御清適奉賀候。然ハ當下半季も詩文添削二付種々御厚配を蒙り、難有深謝仕候。茲二季末二際し聊か拝謝之験迄ニ、乍輕微別封進呈致候間、御受納被下度候。此段得貴意候。敬具。大正五年十二月 澁澤栄一 三島毅殿

(封筒) 三島毅殿/男爵 澁澤栄一

29 島田篁村(しまだ こうそん 一八三八〜一八九八)漢学者。名重礼。大崎の豪農出身。昌平學助教となり、維新後は東大教授として近代漢学の基礎を築く。

島田篁村 三島中洲宛書簡(明治三〇年(一八九七)四月二十九日付)

謹啓、過日は拙文相願候處、御繁用中、早速御刪正被下、一々適當、深感服仕候。先は右御禮まで、不取敢此段申上候。頓首。四月廿九日 島田重禮

麴町區志番町四十五番地 三島毅殿

30 島田泰夫(しまだ やすお 一八二六〜一八九〇)岡山出身。森田節齋に学び、維新後、地方官を経て文部省や内務省に勤務。漢詩文に堪能。

島田泰夫 三島中洲宛書簡(某年一月三十一日付)

日々寒氣甚候處、愈御安康奉賀候。無申訳御無音仕候。扱頑童昨年来、御役介二相成居候處、讀書之成否は姑ク置キ、尋常人トモ成り得ヘキヤ否ヤノ鑑定も未タ分り不申、甚掛念仕候故、暫時之内手元鞭答ヲ加ヘ申度、其上ニテ外史・十八史輪講仕、粗出来候上、貴塾江願度候。右二付暫時ノ間退校為致候心得ニ御座候。此段御承知被下度候。幹事衆迄書面差出置候。猶委細は拜趨可申上候。早々。泰夫 一月卅一日 中洲老兒  
童子之養成は實験も無之、甚方向ニ迷ヒ申候。御一笑可被下候。

31 杉孫七郎(すぎ まこしちろう 一八三五〜一九二〇)長州藩出身。名重華、号聽雨。維新後は宮内大丞、宮内大輔、枢密顧問官、皇太后宮大夫等を歴任。子爵。

杉孫七郎 三島中洲宛書簡(明治三五年(一九〇二)五月二十八日付)

御安康奉大賀候。陳過日御話有之候潭黨之字取調候處、全く小生覚違ニて、潭黨之方ニ候。内閣文庫 佩文齋廣群芳譜 李德裕 思平泉潭上紫藤  
故郷春欲尽 一歳芳難再 巖樹已青葱 吾廬日堪愛  
幽溪人未去 芳草行心礙 遙憶紫藤垂 繁英照潭黛  
右乍延引申上候。いつれ拝青之上、疎漏之御断可仕候。草々頓首。五月廿八日 孫七郎 中洲先生硯北  
(封筒) 麴町區一番町四五 三島毅殿 内陳  
絨 「東京麴町貝阪」 「杉孫七郎」 (別筆) 枢密顧問官、子爵

32 関義臣（せき よしおみ 一八三八〜一九一八）福井藩出身。昌平學に遊学し、更に海援隊に所属。維新後、地方官を歴任し、貴族院議員。男爵。

関義臣 三島中洲宛書簡（大正元年（一九一二年）二月二十九日付）

拜啓。珍敷時節柄、早キ飛雪寒威も殊ニ覚申候。先生御老體御恙も不被為在候哉、如何。尚御自愛被遊候様奉万祈候。陳ハ甚乍突然、服假略考ナルモノハ神代ニ初リ先帝御在世中迄ノ分ヲ綴リタル者、去明治四十二年頃ノ野著ニ御座候。刊行ノ資力も無ク、篋底ニ付シ置キ候處、近頃或友人來談ノ次キ、此著ヲ一見サセタルニ、諒闇中ニも有之、世ニ公ニセハ有益ナリナド勸メラレテ、其人ノ説ニ書肆ニ任セテ刊行シテ遣スナド言エリ。就而ハ其人ノ説ニ從テ草案（二百枚程ノモノ）可相渡事ニ致候。然ルニ先年ノ小生ノ自序ヲ見ルニ、如何ニも平凡ナル文字ノミ甚々力ナキ文章故、御多事中心恐入候得共、別紙旧稿差上候間、御少閑ノ折、充分ニ御潤削、瓦ヲ玉ト為シ被下候ハ、実ニ本懐之仕合、因テ不顧失敬奉願上候。稿中ニ刊修本令トアルハ養老年間ノ令ノ序文中ニアル文字ニ御座候。養老令ヲ新令ト云、大宝令ヲ本令ト云シハ、當時ノ習言ト相見申候。御参考迄ニ申上候。右ハ上堂可相願心得之處、少ク外邪氣ニテ在宅罷在候間、乍失敬書中願上候。是又御仁恕ヲ希上候。 頓首再拜懇願ス。 十二月廿九日 關義臣 三島先生 文壇下侍史 至急ヲ要セズ。乍失敬御返信用。

（封筒） 麹町區一番町四十五番地 文学博士三島毅先生 侍史「親展」

封 「關義臣」「東京市麻布區一本松町二十一・三番地電話芝局 千二百五十二番」 （別筆） 男爵

33 高辻修長（たかつじ おさなが 一八四〇〜一九二二）紀伝道の家生まれ、維新後は宮内省侍從、東宮侍從長、宮中顧問官を歴任。子爵。

① 高辻修長 三島中洲宛書簡（明治三十四年（一九〇一年）五月二十五日付）

拜啓。愈御清康奉賀候。然ハ今般御壽筵之趣、新聞紙ニ見及、目出度御儀奉大賀候。甚ハ龜末至候得共、右御祝儀印込、御肴一折進呈仕候。御笑留被下候は大幸存候。將又別紙拙作之中一首ニても宜候間、御間隙之節、大政御送付奉願候。更ニ清書寸志迄ニ呈笑覽度存候。於御許容難有存候。勿々頓首。 五月廿五日 在鎌倉 修長 中洲先生玉榻下

（封筒） 三島東宮侍講殿 親展

在相州鎌倉稻瀬川一六七ノ五 高辻修長 （別筆） 子爵公卿

（附箋） 前東宮侍從長 菅公ノ后 高辻修長

② 高辻修長 三島中洲宛書簡（明治三十五年（一九〇二年）一月七日付）

拜啓。益御清康奉賀候。然ハ今日人日好天氣、心氣快然。近作數首相認、入高覽候。御用間御答正被下候ハ、幸甚。新聞紙ニ妃殿下御目出度趣、來七月頃ニは分婉可被為在旨御座候。誠以為邦家奉大賀候。拙宅新婦今月下旬頃ニハ生産可致相悦居申候。時下寒氣御自愛專一奉祈候。頓首。 一月七日 修長 中洲先生梧下（裏面端書） 宮中顧問官高辻修長

③ 高辻修長 三島中洲宛書簡（明治某年一月三日付）

華翰薰披、益御清康奉賀候。近來ハ兩殿下へ御進講御繁忙之趣、御苦勞御儀奉存候。併殿下御勤勉奉欽仰候。扱拙作御答正相願候處、速ニ御添削、態々被送下、深難有奉存候。萬々御礼申上候。將又高吟三首拜見、卷舒再三、感吟仕候。是亦奉多謝候。当地此兩三日寒氣増加、午前八時頃、室内火爐有之候所ニて三十六七度之寒氣、庭中氷柱一面、甚閉口仕居候。其地ハ依舊温暖存候へ共、追々向大寒氣節候折柄、御自愛專奉祈候。先ハ御礼旁如此候。敬具。 一月十三日 修長 中洲先生梧下（裏面端書） 高辻

④ 高辻修長 三島中洲宛書簡（大正元年（一九一二年）一月二八日付）

秋冷之節、益御清康奉賀候。然ハ過般御添作相願候處、御懇諭実ニ煩貴意候段、恐縮至且難有奉存候。其後書試候得共中々六ヶ敷、且又如今回事柄諷詠吟哦致候様之趣ニ相成候てハ、甚失敬事ト存候間、記文ニ相改候間、入高覽候。拙文而多字数ニて、御面倒恐入候得共、御答正奉願候。早々敬具。 十月廿八日 修長 三島老先生 梧下

（封筒） 東京麹町區一番町四十五 三島毅殿 親展  
相州鎌倉稻瀬川 高辻修長 （別筆） 子爵

⑤ 高辻修長 三島中洲宛書簡（大正二年（一九一三年）二月一日付）

寒氣増加之處、益御安康奉賀候。然ハ過般御坐湯後、御痛所も御全快之事奉察候。近日、報知新聞ニ而先生紅茵上之御諧謔ヲ見、御壯健之事想像、欣悦致候。扱拙作入高覽候。御閑隙之節、御答被下候ハ、大幸至存候。猶時下御自愛專一祈候。

頓首。 十二月十日 修長 中洲先生 榻下

(封筒) 東京麹町区一番町四十五 三島文学博士殿 親展

十二月十日 相州鎌倉稲瀬川一六七ノ五 高辻修長

(別筆) 詩アリ

⑥高辻修長 三島中洲宛書簡(大正七年(一九一八)一月二日付)

恭賀新年。益御安泰御超歳奉賀候。然は例之拙作出来候間、呈高覽候。御閑隙之節、御斧正被下候ハ、大幸至存候。去月廿六日頃以来、此地寒氣甚敷、閉口致居候。貴地如何。御自愛專一祈候。今晚来降雨、塵埃一洗、心地宜候。年甫御祝儀申上度、旁如此候。勿々敬具。 修長 一月二日 三島老先生榻下

(封筒) 東京麹町区一番町四五 三島文学博士殿 親展  
相州鎌倉稲瀬川 高辻修長

(附箋) 前東宮侍従長 高辻修長 菅公ノ后

⑦高辻修長 三島中洲宛書簡(某年三月五日付)

昨日来駕、久闊拜眉、難有奉存候。併勿々之事残念至存候。其砌卒に願置候艸稿、入高覽候。御用隙、何卒御斧正希候。於御許容、大幸至奉存候。勿々拜具。

三月五日 修長 三島老先生 硯北

(裏面端書) 子爵高辻修長 元公卿 菅公末孫

⑧高辻修長 三島中洲宛書簡(某年某月某日付)

差急乱書、高免願候也。過刻は参上拜顔、難有存候。不存寄御菓子恩投、多謝候。将又願置候拙作、早速御斧正、態々為持賜、猶拜眉可鳴謝候。御受迄、早々敬具。

修長 中洲先生 榻下  
(封筒) 中洲老先生 榻下 高辻修長 (別筆) 子爵

34竹内正策(たけうち せいさく 一八五二〜一九二二) 土佐出身。陸軍軍人、日清

日露戦争に出征。日清日露戦間期に東宮武官を勤めた。陸軍中将。

竹内正策 三島中洲宛書簡(大正四年(一九一五)五月二〇日付)

尊體益御清穆奉賀候。扱突然直行申上候處、迅速高作ヲ賜候。幸甚々々。驚鈍の句ニ對シ惶入候次第御座候。別紙拙吟、供貴覽候。御斧正賜はり度候。御高齡ノ御筆トハ難奉伺、此向ニ候得八百廿五才ハオロカ八万四千歳も御請合可申上候。

何分時下御自愛御專一二奉存候。不取敢御礼迄。勿々啓具。 五月廿日 竹内正策 三島老先生閣下

(封筒) 東京麹町区一番町四五 文学博士三島毅閣下 親展

「静岡市西草津町百五十八 竹内正策」 (別筆) 陸軍中将

(別筆) 中洲翁百二十五ハヲロカ四千歳ハ竹内翁の受合文書アリ

35竹添進一郎(たけぞえ しんいちろう 一八四二〜一九一七) 名漸、字光鴻、号井井。

熊本藩校に学び、維新後は外交官。後に帝大文科大學に漢学を講じた。

竹添進一郎 三島中洲宛書簡(某年三月五日付)

貴郵捧誦。益御清康奉賀候。扱御叱正奉願候拙序、早速御添削ヲ辱し、御蔭にて面目一新、大方ノ咲を免レ候段、深奉謝候。全部之竣工は一年ヲ費シ候見込ニ付、印刷ノ紙葉其ノ間置き場無之ニ困却致し候ニ由り、上中下ノ三帙二分チ、一帙ヅ、三回之製本為致候積ニ候。竣工之上は更ニ御指正を奉願度、不取敢御禮詞迄早々頓首。 三月五日夜 進一郎 中洲先生侍史

(裏面端書) 竹添前朝鮮公使

36田内三吉(たのうち さんきち 一八五六〜一九四〇) 土佐出身。陸軍軍人。工兵

畑を歩み、宮中顧問官、東宮武官に転じた。大正天皇の侍従となった。

田内三吉 三島中洲宛書簡(大正二年(一九一三)一〇月一日付)

謹呈。時下秋冷之候、先以両陛下益々御機嫌克被為成、恐悦至極ニ奉存上候。偕而過日ハ尊翰難有拜誦、益々御健勝奉拜賀候。御轉地長途之御旅行も格別之御障も不被為在、御元氣も御恢復之由、何より之御事と奉遥賀候。早速、聖上へ奏上仕り、御詩も入御覽候處、至極御満悦ニ被思召候。将又侍従長其他へも御来意相傳へ置申候間、御承知被下度候。嘗而先生ヨリ御奉呈之川越地方大演習之御作ニ小生へ次譜可致との御沙汰被為在、悪詩入御覽候處、「三嶋二見セヨ」との御沙汰、誠ニ汗顔之至ニ御座候へ共、難有思召故、左記入貴覽候。何卒可然御添削を願上候。尚右之外日光ニ而之雜詠数首御座候へ共、此分ハ帰京之上ニ御願申上度奉存候。最早新聞ニ而御承知之通、両陛下ニハ来ル十八日御発鞞ニ而桃山御陵御拜、廿二日ニ還御之御預定ニ被為在候。先は右迄、時候不順之折柄、乍此上折角御自愛御静養御專一二奉存上候。早々敬具。 三吉拜 十月十四日 三嶋先生 帀皮下

(封筒) 相州湯河原富士屋方 三嶋毅殿 親展

／緘 東京四谷區元町五九 田内三吉

37 玉乃世履 (たまの よふみ 一八二五〜一八八六) 号五龍。岩国藩出身。廢藩置縣後、司法省出仕。初代大審院長となる。

玉乃世履 三島中洲宛書簡 (某年九月二三日付)

華翰拜見仕候。御起居御清適奉賀候。然而先日は御枉駕被下候由、折悪敷他適中、失敬仕候。御海容可被下候。地所賣買之事二付、御下問之趣、承知仕候。小生心得二而ハ、地所所有之権ハ地券書かへ二而所有之移候事、御布告面二而明瞭と奉存候。然二司法省之御指令二而ハ、外ニ故障あれハ格別なれ共、所有之権ハ双方之承諾之証あれハ右之承諾ニ而移り候事ニ相成居候と相考申候。右之故障と之事ハ、身代限などの如き事ハ故障之部分なるへき歟。且又隨時事ニ就而之指令ハ裁制之準據ニハ相成難キ事歟とも奉存候。先ハ右之如キ事ニ而、弥之處ハ聡とハ申上難く奉存候得共、小生ハ御布告ニ據ルコトが公平論歟と奉存候。此内ハ如何様之事を申上置候哉、覚へ不申候得共、即今之考ニ而ハ右之通ニ相考申候。左様御聞置被下度候也。餘ハ拜青可申上候。御閑暇之節、御來訪奉待上候也。頓首再行。 九月廿三日 玉乃世履 三島先生侍史拜復

38 土屋鳳洲 (つちや ほうしゅう 一八四一〜一九二二) 漢学者。名弘。岸和田藩出身。

相馬九方・池田草庵・森田節齋に学び、漢詩人としても知られた。

① 土屋鳳洲 三島中洲宛書簡 (大正二年 (一九一三) 四月三〇日付)

昨烏ハ御枉駕を賜ハリ難有感謝之至ニ奉存候。大稿昨夜以来反覆拝閲、只今午下二點鐘にいたり卒業仕候。例之むやみに加朱、失敬申上候。萬御恕諒被成下奉願候。先生之老て益御壯之段、為斯道可賀之至と奉存候。

小生経験ニてハ七十以上の人ハ大抵衰頹を免れざるやうに相覚え申候。獨先生ハ八秩をこえさせられ候て少しも其御態無きのみならず、學術上之御作に至りてハ愈老愈健、驚歎之外無之候也。

四月卅日 弘頓首 中洲先生御侍史

(封筒) 麹町区一番町 三島中洲先生

「東京市本郷区駒込東片町四拾七番地 土屋弘」

② 土屋鳳洲 三島中洲宛書簡 (大正四年 (一九一五) 三月三〇日付)

春光追日相生し申候。却説、此程御旅行少々御疲労云々。乍去最早復旧、御健全

之御事と奉存候。御垂示之高文、真ニ意外之御著想。却て妙と奉存候。一二蕪言、御取舍可被成下候。右御安否伺候旁、如此ニ御座候。 三月尽日 弘頓首 中洲先生御侍史

(封筒) 相州湯河原温泉場富士屋方ニテ 三島中洲先生

「東京市本郷区駒込東片町四拾七番地 土屋弘」

三月三十日発

③ 土屋鳳洲 三島中洲宛書簡 (大正五年 (一九一六) 一〇月五日付)

拝復。秋晴を得、御同慶奉存候。本日ハ美稿を賜ハリ難有拜受仕候。御作一綴り御垂示被下、其内鄙見も有之候ハ、可申上候。却説、昨日尾張名古屋市之水谷弓夫 (先年書画会を開き候節御賛成をいたゞき候人。此人十数年交ハリ候。詩文書皆可なり出来申候。詩ハ最長所ニ御座候)、明年ハ七十歳ニて賀宴を開き、朝鮮・満洲・臺灣迄へも賛成を求むる由ニて、第一ニ先生、次ニ小生ニも全様被求候。此ハ御重名をいたゞき候迄ニて、何の御厄介をもかゝること無之候間、御承諾なし被遣度、小生より御願ひ申上候。御諾否、葉書ニて御一報被成下候ハ、望外之幸ニ御座候。右御受旁如此ニ御座候也。 十月五日 弘拜具 中洲老先生御侍史

尚々近日臺灣所知之者より到来の文旦の砂糖漬づけ一箱差上申度、一種の珍珠と存候。點心之一ニそなはるを得ハ大幸ニ御座候。又拝。

④ 土屋鳳洲 三島中洲宛書簡 (某年一月二日付)

拝復。賜御次韻、難有奉存候。當地之門人 (此ハ生の誕生日有十二月ニ致し度と之事)、旧里之門人 (此方ハ四月頃か又ハ七月頃と申事ニ御座候) も賀宴を開度旨申出候。先是六十之時も其祝有之候へ共、弟ハ相断り候處、今般ハ断り兼候様ニ候。然れ共弟ハ賀詞等ハ一切求めず候處、先第一着ニ先生より此の佳製を賜はり、弟之喜不可言。就てハ誠ニ申上兼候へ共、全紙又ハ聯落にても御一揮之上御恵み被下候ハ、席上此を掲げ大ニ光彩を發せんとす。何卒御承知被下度、偏に奉願候。御示し之高作妄批完趙、餘期後信可申尽候。 一月廿一夕 弘拜 中洲先生侍側

⑤ 土屋鳳洲 三島中洲宛書簡 (某年二月一二日付)

又々さえかへり寒威甚敷候へとも、御安泰之御事と奉存候。却説別紙一篇被頼候

もの二御座候。御一閱被成下候ハ、難有候。右奉願候。二月十二日 弘頓首  
中洲老先生御侍史

(封筒) 麴町区一番町 三島中洲先生御侍史

二月十二日 本郷駒込東片町 土屋弘 (別筆) 友人

⑥土屋鳳洲 三島中洲宛書簡(某年三月七日付)

益御清穆之趣奉賀候。今しばらく御滞在之由、春寒之際至極御都合に奉存候。高製数々拝見、みために塗抹、失敬と存候へ共、尊命に従ひ又々如是。御恕諒可被成下候。近作両三首、御暇之節御一閱奉願候。 弘草々拜具 三月七日 三島先生御侍史

(裏面端書) 文章家 正五位 土屋弘

⑦土屋鳳洲 三島中洲宛書簡(某年五月二十日付)

肅啓。尔来御無音申上居候處、今朝ハ御光来被下候趣、生憎出勤不在中、失敬仕候。何寄之新著御惠贈被下、難有緩々拝讀相樂可申。定て得益不少候事と被存申候。右不取敢御禮申上候迄、如此二御座候也。 五月二十日夜 弘再行  
中洲文宗侍史

(封筒) 麴町区志番町 三島毅先生御侍史

本郷東片町 土屋弘

⑧土屋鳳洲 三島中洲宛書簡(某年七月一六日付)

炎熱中得一雨、頗覚清涼申候。過般御尋可申上居候處、鶴駕尾陪從之趣承り候。暑中御賢勞之程奉察候。乍去御清暇之節ハ定て御吟詠澤山御出来之事と奉想察候。御幸便垂示を賜り候ハ、難有奉存候。弟ハ尔来可乞正程之もの出来不申、愧入候。右時候御伺申上度、旁如此二御座候。 七月十六日 弘再行 中洲儒宗御侍史

⑨土屋鳳洲 三島中洲宛書簡(某年一二月二日付)

拝復。益御清穆之趣奉賀候。然ハ今般高著三卷御上梓相成候二付、御頒与被成、御厚情之段、感謝之至ニ存候。全体之製極て高雅、緩々拝讀相樂可申、且永く珍藏可仕候。右不取敢御挨拶申上候。他ハ拝龐可申尽候也。 十二月二日 弘再行 中洲儒宗御侍史

(封筒) 中洲老先生侍史「東京市本郷区駒込東片町四拾七番地 土屋弘」

⑩土屋鳳洲 三島中洲宛書簡(某年一二月六日付)

拜啓。多雨ニは困り候へ共、昨今快晴、定て御安適ニ在らせられ候御事と奉存候。却説、前日之一遊、他より逼られ、一記を草し申候。御氣分のよろしき節、御一覽被成下、始ニても終ニても何にか一言を賜ハリ候ハ、尤も難有奉存候。可成ハ題言の如きもの相願ひ申上度、しかし御氣分之御都合にていかやうニてもよろしく候。右御近況御伺ひ申上候、旁如此二御座候。 十二月六日 弘頓首  
中洲老先生御侍史

(封筒) 麴町一番町 三島中洲先生侍史

十二月六日 本郷駒込東片町 土屋弘 (別筆) 学者

39 東宮職(とうぐうしょく)、東宮(皇太子)と東宮妃の家政のための組織。組織の長は東宮大夫。侍従、侍医、内舍人、御用掛等からなる。

①東宮主事 中田直慈 三島中洲宛書簡(明治三四年(一九〇一)八月三十一日付)

一松魚節 壹連。右ハ本日皇太子殿下御誕辰ニ付、下賜候條、此段申進候也。 明治三十四年八月三十一日 東宮主事 中田直慈 東宮侍講 三島毅殿

②東宮職 三島中洲宛書簡(明治三五年(一九〇二)五月二七日付)

一凍蕎麦切 忝箱。右以思召下賜候旨ニテ、御巡回先ヨリ送來候間、御送附仕候也。 三十五年五月廿七日 東宮職 三島侍講殿

(封筒) 三島侍講殿/東宮職

③東宮職 三島中洲宛書簡(明治三五年(一九〇二)五月二九日付)

一干鱒 忝尾。右以思召下賜候旨ニテ、御旅行先ヨリ到着致候間、及御送附候也。 明治三十五年五月廿九日 東宮職 三島侍講殿

(封筒) 三島侍講殿/「緘」「東宮職」

④東宮職 三島中洲宛書簡(明治某年一月一〇日付)

本日午後四時參殿可有之御沙汰ニ依り、此段申進候也。 一月十日 東宮職 三島侍講殿  
追而、同刻迄二人力可差出候間、御含置相成度候。

(封筒) 三島東宮侍講殿/「緘」「東宮職」「東宮職」



⑤東宮職 三島中洲宛書簡(明治某年一月一〇日付)

今午後四時御參殿可有之御沙汰之處、御都合被為在、同四時半御參殿可有之、更二御沙汰候條、此段申進候也。 一月十三日 東宮職 三嶋侍講殿

⑥供奉東宮職 三島中洲宛書簡(明治某年一月一五日付)

明十六日午後四時御參殿相成候様、御沙汰候條、此段申進候也。 一月十五日 供奉東宮職 三島侍講殿

⑦東宮職内廷掛 三島中洲宛書簡(明治某年四月二五日付)

一鯛 壹尾。右ハ兩殿下より御上り合之内、思召ヲ以テ下賜相成候ニ付、御廻し候間、御拝受相成度、此段申進候也。 四月廿五日 東宮職内廷掛 三島侍講殿

(封筒) 三島侍講殿 / 「緘」東宮職内廷掛

⑧東宮職文書掛 三島中洲宛書簡(明治某年一月九日付)

一海苔 一包。右ハ早蕨典侍ヨリ貴官へ贈呈ニ付、為持差上候也。 一月九日 文書掛 三嶋侍講殿

(裏面端書) 早蕨典侍ハ東宮ノ御生母ナリ

40 外山脩造(とやま しゅうぞう) 一八四二〜一九一六 長岡藩出身。昌平黌に学び、

河井繼之助の遺命により実業に従事。関西財界の指導者として活躍。

外山脩造 三島中洲宛書簡(明治二三年(一八九〇)頃 某月二五日付)

拝啓。今朝ハ難有奉謝候。陳ハ御参考之為メ草シタル一書、別紙差出シ申候間、御落手奉願候。勿論取捨ハ老臺ニ一任仕候間、御随意御取捨之程奉願候。将又文章上之事ハ固より小生輩之彼是可容喙ニ無之、唯々事実上より斯之如を欲すると、一言一句にても可成ハ死者之精神ニ背違せざる様いたし度との熱心より茲に至り候次第二有之候間、其心情御洞察被下、事失敬に涉り候義ハ偏ニ御海容之程奉伏願候。頓首謹言。 廿五日 外山生拜 中洲先生席皮下

(封筒) 一番丁四十五番地 三島毅殿 親展 / 緘 別封添 外山脩造

41 永坂石埭(ながさか せきたい) 一八四五〜一九二四 漢詩人・書家・医師。尾張

藩出身。森春濤に漢詩を学び、また東京医学校に出講。晩年は詩書画を専らとした。

永坂石埭 三島中洲宛書簡(大正三年(一九一四)二月二一日付)

拝啓。春寒料峭之處、愈御萬祥奉敬賀候。過日ハ參趨、其節願置候御序文御改寫之義、速ニ御一揮被下、殊ニ隨鷗會へ御携へ被下候由、生憎小生欠席、失礼仕候。態々御郵送ヲ蒙り、感佩之至ニ奉存候。早速本人へ申遣置候。先ハ不取敢御禮沾申上候。右之趣宜布先生へ御上申願上候。頓首。 二月十一日 永坂周二 三島先生御執事御中

(封筒) 麴町区一番町四十五 三島先生御執事御中

× 神田松枝町廿三 永坂周二

42 南摩綱紀(なんま つなりの) 一八三三〜一九〇九 漢学者。号羽峰。会津藩出身。

昌平黌に学び、維新後は東大・東京高師・東京女高師に出講。

①南摩綱紀 三島中洲宛書簡(明治二五年(一八九二)三月二七日付)

昨日ハ御苦勞ニ御座候。彼席故、緩々不能得貴意、遺憾ニ候得キ。扱本年ハ小子七十二相成候ニ付、何歟一言ヲ叙シ、諸先生之尊作ヲ請ハント欲シ、別紙綴り見候処、不成語、何卒十分御叱正願上候。尤御評語ヲ併セ印刷ニ付シ、広ク詩韻ヲ求ント存候間、何分宜奉願上候。決シテ急キハ不仕、御都合ヲ以テ願上候。頓首。 三月廿七日 綱紀 中洲先生

②南摩綱紀 三島中洲宛書簡(明治某年二月一日付)

去月卅日附尊東、卅一日相届拝読。尔来益御安康、一日二三度つ、御進講、御多忙之旨奉慶賀候。東宮殿下如斯御勉学被遊候事、後來為国家洵ニ恐慶之至ニ御座候。乍御苦勞十分御啓沃被成候様、祈望之至ニ御座候。御近稿數篇御垂示、御勉強感服仕候。早々拝読、梅翁江相廻可申候。将又湖山より新年ノ作自筆ニテ寄示候ニ付、匆卒次韻、其他近稿遣候処、細評返却有之、依テ其俣御加評願上候。中ニハ先ニ御評正被下候拙詩モ有之候得とも、改書不致候故御抛弃、其餘ノ分ノミ玉斧願上候。○東京昨日来降雪、今朝ハ五寸程積り申候。是ニテ氣候順ニ復シ可申、御同慶ニ御座候。御地ハ如何ニ候哉。少々ハ降雪有之候半哉。時氣折角御自玉祈上候。敬具。 二月一日 綱紀 中洲先生

(裏面端書) 南摩

(封筒) 三島先生 願用 差上置

× 「東京麴町区富士見町一丁目三十七番地 南摩綱紀」

③南摩綱紀 三島中洲宛書簡(明治某年二月一日付)

雪意殊二覚、寒冷中文況愈御安健と奉想賀候。兼而高嘯之拙文甚遅延、殊二醜態不可見候得とも、御遣置の紙江揮毫差上候。御笑捨可被下候。願上置候送序、明日出起候とて甚催促セラレ候間、何とも申上兼候得とも、夕刻迄二御一閱被下、大ニ都合の処へ赤棒御抹殺被下候のミニ而宜候間、何分希上候。御繰合も可被「破損」急の処願上、恣之段幾重ニも御海恕願上候也。二月一日  
尚々、小笠原一条ハ急候訳ニ無之、其内昇堂相伺候様可仕候也。

④南摩綱紀 三島中洲宛書簡(明治某年某月九日付)

一昨日ハ御邪魔仕候。昨日は豚兒方へ美菓御惠賜被下、御厚情之程千万奉拝謝候。病勢少々挫ケ候様ニ御座候。医師も追々快方ニ可向よし診察致呉申候。毎度御尋問被下、難有奉深謝候。右御礼申上度、勿々閣筆。夜来一雨、大ニ覺爽然候也。  
九日朝 綱紀拜 三島中洲先生硯北

43西毅一(にしきいち 一八四三〜一九〇二)岡山藩出身。号薇山。明治初年、岡山県の学制改革を主導し、衆院議員となり、閑谷学校の復興に尽力した。

①西毅一 三島中洲宛書簡(明治三六年(一九〇三)三月二日付)

謹啓。餘寒料峭、益御清穆奉恭賀候。陳ハ舊藩遺老木畑坦斎翁八秩二躋り、小生共後楽園ニ於て祝賀之雅宴相催し度、玉作一篇御贈惠を蒙り候ハ、文苑一段之光榮を發揮可致、別紙相添、拜呈仕置候間、何卒御承諾被為下度、伏而奉願候。右御依頼迄、如此ニ御座候。草々頓首。三月二日 閑谷山中 毅一 中洲先生

②西毅一 三島中洲宛書簡(明治三六年(一九〇三)三月四日付)

謹啓。餘寒料峭、伏隠函丈萬福、奉恭賀候。扱近頃教育界之事不忍言、孔夫子をして觀せしめハ兄之子数十百人ありと雖も、尚不足の歎あらんと奉存候。実ニ痛哭流涕長息罷在候。せめてハ郷黨ニ尚齒之古風を存し度、同志申合等、為祝賀之筵を催し候ハ、風教之萬一二も相成候半歟トノ微意ニ御座候。過日拜呈仕置候用紙ニ、玉作一篇下賜候ハ、雅筵之光榮ニ御座候。別紙翁之履歴ニ加へ、拙作御教正被為下候ハ、大慶ニ御座候。重而御願迄。草々頓首。三月四日 毅一 中洲先生函丈

(裏面端書) 備前閑谷校長

③西毅一 三島中洲宛書簡(明治某年八月七日付)

謹啓。嚴暑難耐之候ニ御座候處、伏隠萬福奉恭賀候。随而野生碌々山居、獵魚熱ニ相罹り居候得共、頑然健康、乍餘事御放慮被為下度候。扱當春、兒島・井上兩氏より墓文囑託、先生へ御願申上候様、辭退仕候得共、閑谷之縁難通、別紙之通一起案相廻し候處、同家満足之旨申越候。先生ニ於てハ御差障無之候哉、奉伺候。若し御故障も無御座候ハ、序文御添削奉願候。尤价事之都合有之云々、時分柄申上兼候得共、早急ニ御答奉煩候。右ハ暑中御機嫌伺旁御依頼まで、如此ニ御座候。草々頓首。 八月七日 毅一 中洲先生侍重

44錦小路在明(にしきこうじ ありあき 一八六九〜一九二一)公家唐橋家出身。東京美術学校卒業後、教職に就き、錦小路子爵家を継ぐ。東宮御用掛となる。

錦小路在明 三島中洲宛書簡(明治某年一〇月二日付)

拜啓。陳ハ妃殿下御学課之儀、貴下ニモ未ダ充分御快方ニ無之、折柄一週間三回ハ御苦勞ニ被思召、當分一週二回ノコトニ御決定被為在候。就而八月曜午前九時四十分ヨリ十時二十分迄、金曜午前十時五十分ヨリ十一時三十分迄、右二回御進講之事ニ御承知相願度、猶詳細ハ明後十四日御參殿之節、可申上候也。頓首。  
十月十二日 在明 三寫侍講殿

(封筒) 三寫東宮侍講殿 親展ノメ 十月十二日 錦小路在明

45野口寧斎(のぐち ねいさい 一八六七〜一九〇五)漢詩人。名弑。肥前諫早出身。

森春濤・槐南に学び、森鷗外ら次世代の文学者からも尊重された。

野口寧斎 三島中洲宛書簡(明治三六年(一九〇三)三月一日付)  
啓、春寒未退候處、先生弥御萬福奉大賀候。百花欄二集出版仕候ニ付進呈。御旧製いたゞき置候。御近作隨時御下示願上度奉祈候。且かゝる小冊子なれども儲宮御消閑之資とも相なり候はゞ、初集より引續き發刊毎に御傳獻願上度、御都合如何之物に候や。御指教奉願候。過日碧堂氏ニも上參、両三度面晤いたし候。友人高野竹隱氏を野崎氏に聘致せられし趣、学問人物とも詩家中に少れなる人に候事故、小生も乍影為野崎氏賀、最為斯文賀之候。先ハ用事而已。頓首。 弑 病腕 三月一日 中洲先生侍重

46花房義質(はなぶさ よしかた 一八四二〜一九一七)岡山藩出身。適塾に学び、欧米遊学後、外務省出仕。駐朝公使、駐露公使、宮内次官等を歴任。子爵。

花房義質 三島桂宛書簡（大正六年（一九一七）四月二〇日付）

拜啓、御尊父様益御機嫌能、来廿八日は米寿賀会御催之由にて、御按内敬承、是非参上致度存候得共、当日不得止兼約有之、乍不本意欠席仕候。其前又ハ後日、参堂親敷御歎ひ可申上候得共、当日は右之次第にて不参仕候間、不悪御含願度、此段得貴意置度、一応之御歎迄寸書如此御座候。敬具。 花房義質再拜

大正六年四月廿日 三島桂様

（封筒）東京府下大井町九九五番 三島桂殿 親展

／封 花房義質（別筆）男爵

47馬場三郎（ばば さぶろう 一八五五〜？）内蔵頭、伏見宮別当、華頂宮宮務監督などを歴任。

馬場三郎 三島中洲宛書簡（大正四年（一九一五）六月一〇日付）

謹啓。益御清穆奉恭賀候。陳は過日御願申上候皇族方講話會ノ儀ハ愈来ル十二日午後三時ヨリ紀尾井町伏見宮邸ニ於テ御開催之事ニ決定候間、同日時御参邸御講話被成下候様奉願候。右御願用迄、草々敬具。 大正四年六月十日

伏見宮附別當馬場三郎 文学博士三島毅閣下

（封筒）文学博士三島毅閣下／伏見宮附別當馬場三郎

48林学斎（はやし がくさい 一八三三〜一九〇六）幕府儒者、最後の大学頭。維新後、

司法省明法寮出仕。のち群馬師範教諭や日光東照宮禰宜などを勤めた。

林学斎 三島中洲宛書簡（明治三三年（一九〇〇）八月二八日付）

本年は残炎殊ニ甚敷、御地は清涼と不堪健羨候。愈御壮榮奉賀候。陳は別昏拙作備電警候。御削正被下候ハ、大幸不過之候。抑過日は久ニ而陪游、終日拝晤、病老御兄快全、御蔭ニテ難有存候。御作拝見仕候處、実ニ当日之実況、何人か拝見候テモ忽チ分明ニ御座候。感服不堪候。又学校設立之義ニ付テハ彼は御心配難有、何卒成功仕り、抵死、奕葉書香ヲ不失様仕度ト奉存候。座業は一向差支無之、御地ヲ退去は実ニ遺憾無極候得共、凹凸地ノ奔走ハ六ヶ敷候間、神靈ヘ對シ過誤失錯無之内之退去ニ決心シ候次第、御推察可被下候。将又一事申上候は、過般拜語ニ申上候東宮殿下捕鯉之御遊覧は如何。就テハ先第一小林氏より溪利之鯉ヲ内献上は如何。表向献上と申テは中々順序六ヶ敷趣故、本人より賢臺へ呈上、賢臺より御献上とか申御都合ニは参ル間敷哉。其辺御内考之上、御賢慮可被仰下候。御遊覧は必ず被仰上候ハ、一廉ノ御慰ニも可被成下之愚考ニ御座候。先右申上度、

草々不具。 八月廿八日

尚々、時下御自玉專一ニ存候。御序ニ高辻侍従長閣下へ宜敷奉願候。早々。又曰、令次息君、山田君等へ過日之失敬御序ニ宜敷奉願、又白。 昇 中洲君侍曹

晃山偶得

移居晃山下 既過十年強 不雨礎常湿 無風夏亦涼  
從來非俗地 畢竟是仙郷 領得延齡福 神恩何可忘

五月十八日北河原堤上所見

靡蕪堤下綠蒲汀 剖葦知時轉不停 忽想墨田川上景 柳陰深處植筇聽  
勝地偶為泛宅遊 斯身恰若在滄洲 平沙十里無涯際 一道長流昇二州  
欲收烟景入新題 行過平蕪長短隄 桑拓成陰麩麥秀 午風薰處遠聞鴉  
筵螺隱頭夕陽斜 罷釣回舟欲到家 兩岸蛙如惜子別 天然鼓吹奏平沙（臨  
婦有此作）

遠樹如山水接天 水天一色望無邊 輕舟短棹從流沝 曲渚回灣逐眼遷

詩思每於閑處動 真情好向靜中觸 晚來況有獲網魚 手擊新鮮杯酒傳

七月卅日竹井水亭即日

小亭枕小池 竹樹綠為圍 水淨魚應數 林涼鳥忘飛

日光無至地 昔色欲侵幃 盛夏不知熱 坐間冷襲衣

題高砂翁媪圖

夫妻守素掃心塵 壽福誰知自有因 請看世間招禍輩 每婦玉食錦衣人

大斧 昇懶稿

村居偶成

欲投筆硯試耕耘 齒豁頭童漫倦勤 百事自知叵成行 不如仍舊講斯文

（封筒）栃木縣日光町西町御寓居 三島毅殿 親展（朱筆）詩アリ

「拜師」 武州熊ヶ谷在柿沼 林昇（別筆）徳川家旧大学頭也

49原田一道（はらだ かずみち 一八三〇〜一九一〇）兵学者。備中鴨方藩出身。山

田方谷・伊東玄朴に学び渡欧。兵学校教官や東京砲兵工廠長を歴任。男爵。

原田一道 三島中洲宛書簡（明治三四年（一九〇一）一月一日付）

御書拝見。過日ハ御發病之處、追々御全快之由、奉大賀候。小生義も昨年以來殆黄泉へ旅行之處、漸快方、其後も老朽病故、迎も全快ハ思寄らす候へ共、ヒクラ

し致し居候。夫故御無音相過候。扱御申越之件ハ外封差上候間、相整候様御代書御門生ニ御命シ、安藤氏へ御送可被下候。何レ其内參上拜晤可致候。右御答已。拜具。十月十五日 一道 三寫君

(封筒) 糀町区一番町四十五番地 三嶋毅殿  
× 神田区裏猿樂六番地 原田一道

50 土方久元 (ひじかた ひさもと 一八三三〜一九二八) 土佐藩士出身。号秦山。七卿落ちに從い西国下向。維新後は天皇側近グループに属し、宮内大臣を務める。

① 土方久元 三島中洲宛書簡 (大正七年 (一九一八) 一月二四日付)  
拝誦、愈御安康敬賀。陳は願置候記文、御草稿ヲ以御垂示被下、拝覽熟考仕候處、一言之加可キ無ク、筆至り意至り、御蔭ヲ以更ニ一家之光榮ヲ増シ申事ニ御座候。何卒御閑暇ヲ以御揮毫被成下度、頼上候。将又来八日ハ沼津へ御出罷之由、御苦勞拝察仕候。不取敢右貴酬迄。勿々頓首。九月五日 久元 三嶋賢台  
来七日午前ニ參堂可仕含ニ御座候得共、万々一差支候ハ、其中沼津へ罷出候而拜顔可仕候。折角御自愛被成度、祈上候也。

② 土方久元 三島中洲宛書簡 (大正七年 (一九一八) 一月二四日付)  
貴墨拜見。寒威甚敷候處、愈御安康奉賀候。陳ハ岡山縣下赤松三朴家額之義云々、承知仕候。新年之高作数多拜見仕候。敬々服々。先ハ貴酬迄、勿々敬白。大正七年一月廿四日 土方久元 三島先生机下  
時下十分御自愛被成度祈上候。以上。

(封筒) 東京麹町区一番町二松学舎 三嶋毅殿 貴酬  
封 一月廿四日 相州茅ヶ崎 土方久元

51 広橋賢光 (ひろはし まさみつ 一八五五〜一九一〇) 公家広橋家出身。広橋伯爵家を継承。内務省に入り、貴族院議員、帝室制度調査局御用掛などを務めた。

広橋賢光 三島中洲宛書簡 (明治某年一月二五日)  
拜啓、過頃大磯谷氏ヲ以テ御面倒なる儀相願候處、早速御作成御郵送被下、難有存候。先方ニ於テモ大ニ満足可致下存候。何れ御復礼可申上候得共、不取敢御請迄如此ニ御座候。呉々モ宜布御礼申上候。早々頓首。一月廿五日 賢光  
三島先生坐下

52 福島安正 (ふくしま やすまさ 一八五二〜一九一九) 松本藩出身。講武所・開成学校で語学を学び、陸軍に入り、更に二松学舎に学び、情報将校として活躍。福島安正 三島中洲宛書簡 (明治某年一月一四日付)

御書翰拝接。益々御健勝奉大賀候。小生病氣ニ付テハ御心ニ掛サセラレ、御芳情御厚礼申上候。御蔭ニテ追々快方ニ赴キ、傷口モ不日全癒之様子ニ有之候間、乍憚御放神被成下度候。日々寒威相加り候時節、御老体御自愛之程奉祈上候。右御礼申上度、勿々如此ニ御座候。敬具。一月十四日 安正 三嶋毅先生

53 増戸武平 (ますど ぶへい 生没年未詳) 上山藩出身。  
増戸武平 三島中洲宛書簡 (某年九月三〇日付)

拜啓、秋霖鬱々敷、御同困此事ニ御座候。先以弥御清康被為入、奉大賀候。扱碑文之義ニ付テハ実ニ不一通御高配ヲ煩ハシ候處、厚ク御引受け被成下、成功ニ至候段、難有奉鳴謝候。然カノミならず、長谷氏ヲ以テ至極御無理之儀願上候處、御承諾之由ニ而、金拾五円也御寄付被下、重々難有仕合、右金円長谷氏ハ落手候ニ付、其掛リノ者ニ回付候處、別紙請取証さし越候間、御廻申上候。前記之趣ハ国元委員江も申遣候付、追而一同ハ謝意ヲ表シ可申候得共、不取敢小生ハ御礼申上置度、以書中如此御座候。草々頓首。九月三十日 増戸武平  
中洲三島先生案下

54 股野琢 (またの たく 一八三八〜一九二二) 号藍田。龍野藩出身。教部省・太政官を経て宮内省に転出。帝室博物館総長や宮中顧問官を歴任。

① 股野琢 三島中洲宛書簡 (明治四五年 (一九一二) 三月二六日付)  
拜啓、過日願置候拙文二篇、何卒御刪潤可被下候。右御依頼まで、草々。三月廿六日 琢 中洲老兄

再白、一昨日は失敬仕候。其節之次韵、別記之通改竄いたし置候。乞察正。槐南一周年祭席上、次中洲老友韵。  
盛名豈是與人亡 絶代詞章字有香 時俊滿楼追祭譚 鬢霜髭雪倚斜易  
七十五翁弟藍田草

(封筒) 麹町区一番町二松学舎 / 三嶋毅殿親展

② 股野琢 三島中洲宛書簡 (大正二年 (一九一三) 五月九日付)  
× 自赤坂仲之町 股野琢 (別筆) 帝室博物館長

拜啓、過日は參堂、拜晤陪飲、難有奉存候。別紙小文二篇、又々御一讀御刪潤可

被下候。右御依頼申上候。草々。 五月九日 琢頓首 中洲老兄

(封筒) 麴町一番町 三嶋毅殿 親展

自赤坂仲之町 股野琢

③股野琢 三島中洲宛書簡(大正六年(一九一七)六月三一日付)

朶雲薫披、過日懇請之御序文、速ニ御起稿御廻し被下候。御厚意之段、不勝感謝之至候。但推奨過當ニは慚汗洽背之思ひたし候。併此好序を得而、大ニ老生之面目を顯し可申と深く忝存候。御申越に従ひ、鄙見加記いたし置候間、可然御取捨被下度、御定稿之上、御惠投可被下候。草々拜復。 五月尽 琢 中洲老兄

(封筒) 麴町區壹番町/四十五番地/三嶋毅殿親展

自赤坂仲之町 股野琢 (別筆) 学友

④股野琢 三島中洲宛書簡(大正六年(一九一七)一月一日付)

拝啓、過日は参堂、御妨いたし候。其節奉囑候拙文之義、早速御意見御申越、御同感之至ニ奉存候。是にて大ニ得力申候。兎角素人之我侷に困り申候。御寄示之尊稿、不相替失敬、御返璧申上候。以上。 十二月十日 琢 中洲老兄

(封筒) 麴町一番町/三嶋毅殿 親展

自赤坂中之町 股野琢

(附箋) 前帝室博物館長 前東宮侍從 股野琢 號藍田

⑤股野琢 三島中洲宛書簡(大正六年(一九一七)一月一日付)

過日は御邪魔仕候。別紙小記、一寸御一讀御裁定可被下候。草々頓首。 十二月十四日 琢 中洲老兄

(封筒) 麴町一番町/三嶋毅殿 親展

自赤坂仲之町 股野琢

⑥股野琢 三島中洲宛書簡(某年二月二日付)

換舌。故三条公碑文、又々少々改竄いたし見候間、今一応御評定被下度、外二故大原公之碑文起草いたし見候間、是亦御批評可被下候。以上。 二月二日 琢 中洲老兄

(封筒) 三嶋毅殿 琢持参 (別筆) 友人

55松浦詮(まつうら あきら 一八四〇〜一九〇八)最後の平戸藩主。廃藩置県後、

宮内省御用掛。伯爵に叙される。貴族院議員当選。鎮清流茶道家元を兼務。

松浦詮 三島中洲宛書簡(明治三二年(一九九九)か 一〇月五日付)

謹啓、秋冷相募り候処、愈御安清珍重之至奉賀候。過日於沼津拜鳳大慶奉存候。尤失敬申上、恐入候。頃日ハ御帰京之義奉存候。兼而拝領之御詩作之御序文中、素水之字、御序ニ御修正希望仕度。右事実ハ、小子ハ八世ノ祖鎮信ハ、山鹿素行之門人御座候而、其築城法ヲ以庭池之南岸ハ石を組候と申傳候。御認直被下候ニハ及不申候得共、若ヤと料紙さし出置申候。尤決而差急相願候義ニハ無御座候。扱沼津ニ而席上愚詠入貴覽候。詠草ハ御手許ニ御座候や。実ハ席上俄ニ而、甚不出来のミならず、書損も有之、帰京後再案仕候。是とも野調赤面ニ御座候得共、過日のと御引かへ相願度、相覧候。もしや保養館主人へ被下候ハ、従是取かへニ可遣候間、鳥渡此段相伺候。何も右拝啓早々、再拝頓首。 十月五日 松浦詮 三島先生玉机下

56松浦厚(まつうら あつし 一八六七〜一九三四)号鸞洲。詮の長男。ケンブリッ

ジ大に学び、父没後、伯爵家繼承。漢詩にも堪能であった。

①松浦厚 三島中洲宛書簡(明治四二年(一九〇九)九月一三日付)

肅啓、愈御清福奉大賀候。陳は来廿九日、古中秋観月小宴を蓬萊園詠帰亭ニ於て相開度存候。御多用之砌、恐縮ニ候得共、萬障御差繰り、午後五時頃より御枉來被下度奉申上候。右御垂案内申上候。敬白。御高来、否、速ニ御一報願上候。

九月十三日 松浦厚 三島中洲先生梧右

(封筒) 麴町一番町/三嶋毅殿 親展

②松浦厚 三島中洲宛書簡(某年七月一七日付)

拝啓、中秋観月小集へ御高来相願候處、御入念の御返書被下、奉謝候。無論、御随意ニ御帰途ニ就かれ差支無之候。暫時御列席被下候ハ、仕合ニ候。同夕ハ許渾中秋七律、即ち、團。煙。、。天。、。前。、。年。和韵御願可申候。もし御高来前ニ御出来相成候際ハ、別昏ニ御揮毫御持参被下候ハ、難有存候。右ハ鳥渡為念申上候。頓首。 七月十三日 松浦厚 中洲先生玉案下

57 萬里小路幸子 (までのこうじ ゆきこ 生没年未詳) 公家萬里小路家出身。東宮職の女官の一人。大正天皇の漢詩にもその名が見えている。

萬里小路幸子 三島中洲宛書簡 (某年某月某日付)  
口上。弥御障りもおはしまさず候御事、恐悦二思しめし候。扱此御くわし、御めつらしからず候へ共、御息所様より思召にて給はり申候。明日夕葉山御用邸へ御出張の御事、御苦勞二思しめし、随分余寒御いとゐのやうと思しめし候。右のミ早々。めて度かしく。

三嶋殿へ 萬里小路幸子 (東宮老女)

58 村岡良弼 (むらおか りょうすけ 一八四五～一九一七) 法制官僚・歴史学者。下総香取郡出身。昌平鬘や大学校明法科に学び、司法省明法寮等に奉職。

村岡良弼 三島中洲宛書簡 (大正二年 (一九一三) 五月一八日付)

啓上仕候。とかく冷気勝二御座候處、益御萬祥奉拜壽候。扱先刻得拜容、尊慮も奉伺度義有之、参上仕候處、既二御参内之御跡にて、不得其義引取申候。因テ大略左二申上候。如蘭社話之義、昨秋主任幹事志水文雄死去いたし、老生も公務 (六国史校訂ナリ) 忙しく、為之刊行相怠り居候處、此程渡邊宮内大臣殿より該書ハ有益ナル者、是非継続いたし候様との御内意有之、且ツ本社之顧問として御添力可被成下由二御座候間、引継キ出版之都合いたし居候。此義御聞置被下度、又自然宮中ニ於て大王殿へ御逢被為在候ハ、可然御致意被成下度奉願上候。又社長本居先生薨去せられ候ニ付、此程井上頼国翁へ右後任之事願入候處、承諾二御座候。此段も御承知被遊被下度奉願候。老生近来脚痛ニて歩行不自由ニ付、不顧失禮以書面右申上候。愚文不介意、幸垂諒察。誠恐頓首拜。 癸丑五月十八日 村岡良弼 再行 如蘭社長 三島中洲先生函丈 追而、不調之気候、御自玉奉祈申上候。頓首。

(封筒) 麴町区一番町四十五番地 三島中洲先生 御直披

封 五月十八日 「東京牛籠區廿騎町十一番地 村岡良弼」

59 本居豊穎 (もとおり とよかい 一八三四～一九一三) 宣長の義曾孫。神祇官・教

部省・東大・東京女高師に奉職。東宮侍講・御歌所寄人を勤める。文学博士。

① 本居豊穎 三島中洲宛書簡 (明治三五年 (一九〇二) 六月三日付)

去月念八之貴楮拝見、殿下益御機嫌能、妃殿下も御同様之御事と恐悦至極奉存候。随而先生ニも別而清壯と奉敬賀候。御發途後、天氣能相續き、新潟ニて一日と、

去三十日高田より当地へ御着、翌日共二日ハ雨天なりしも、昨日よりハ晴天ニ相成候。但晴候へハ中々暑く、去廿八日柏崎石油會者へ御供仕候節などハ、炎天ニ困り候位ニ御座候。日々之模様ハ新聞紙上ニて御閱覽と存候間、別ニ記し不申候。蕎麦御頂戴ニ付ての御作感吟、先日之老伸達御召之節之御作共、高田ニて御門人森錢五郎氏來訪、同人より落手、即殿下へ差上置候。さて今後御巡遊之山形、福島、宮城、岩手等之諸縣地ニ麻疹患者發生之趣ニて、右地方ハ御見合ニ相成、何方へ御巡回可相成哉、専ら評議中ニ御座候。先ハ拜酬迄、匆々頓首。 六月三日 本居豊穎 三島先生侍史

(封筒) 麴町区一番町四十五番地 三島毅殿

緘 群馬縣前橋市本町一丁目白井屋方 本居豊穎

② 本居豊穎 三島中洲宛書簡 (明治某年一月二〇日付)

拜啓。益御清適奉恐賀候。陳ハ老生儀、昨日途上落車致し、少々面頭及右手腕ニ負傷して、明日より一週間内引籠治療仕度、大夫へ届書差出、委曲足立寛へも申遣置候。此節之事故、老生負擔御日課時間ハ暫ハ休業ニても可然歟。もし先生御引受被下候方ニ候ハ、大夫より沙汰可有之候。右腕故、甚不自由、執筆も出来ざるニ非れと、可成静ニ安め置候様、医師ニ誠められ居候。右之次第故、明日新橋之奉迎ニも得罷出不申、これハ唯御含迄、申上置候。尤些少之事故、不日全治可致、御懸念等被下候程之儀ニハ無之。右一寸得貴意置度、匆々頓首。 十一月廿日 豊穎 三嶋先生侍史

③ 本居豊穎 三島中洲宛書簡 (明治某年某月某日付)

過刻御談話有之候御復習負擔之日割之事、殿下へ申上見候處、夫レニテモ直シトノ御沙汰ニ候。付テハ今日ヨリ其事ニ相成り、即月木ハ先生御引受、火金ハ小生引受ニ候。然テ、今日ハ午後二時ニ参り候様トノ御事ニ候。乍御苦勞、本日ハ二時ヨリ御參殿と御心得被下度候也。 豊穎 三嶋先生

④ 本居豊穎 三島中洲宛書簡 (明治某年某月二九日付)

昨日高作数首拝見、難有。御途中之御作、塩湯山中之御作等、別して面白き様ニ拝吟罷在候。次ニ愚作入電覽候様貴示候。以て一二相認、試候へとも、いつれも未意ニ御座候。頓首。 廿九日 豊穎 三島先生御研北

60 横田香苗 (よこたかなえ 一八四五〜一九二二) 近江出身。内閣賞勳局に奉職し、同局副総裁となった。

横田香苗 三島中洲宛書簡 (明治三二年 (一八九九) 三月二十八日付)

寅啓、春暖之候、益御清榮被為在、奉大賀候。陳ハ過日諸新聞ニテ尊作拝見仕候處、本年ハ古稀之寿域ニ躋ラセ候趣、尚又今朝ノ官報ニ據レハ、此度ハ學位御拝受ノ由、重々目出度御儀ニ奉存候。又て、岡本黄石翁碑銘之儀ニ付、度々御改刪ヲ奉願、非常ニ御骨折被下候段、小生共ニ於テモ深ク奉感謝候。御承知ノ通りノ舊藩情ニテ、故老之輩ハ今以テ解ケ不申、依然トシテ徳川時代之思想ニ在之。之ヲ以テ聊カ先候之事ニ関シ候へハ中々ハ釜敷、翁ノ功績ヲ顯揚セント欲スレハ事情ノ許サ、ル所も有之、舊藩之事情ニ泥メハ翁ノ事蹟ヲ湮滅ニ帰セシムルノ虞も之レアリ、御執筆上甚タ御迷惑トハ奉存候得共、何分御諒察被成下候テ、御寛量之程於小生共奉希候。昨夜、翁ノ長孫九半吉、再須永元同伴御地へ出向候趣承り、兼テ拙作御賀詞出来居候際ニ付、忽率執筆相托候處、今日ニ至リ思ヒ違ヒノ廉心付候間、更ニ別呈進申候條、御落手被成下候上、最前ノ分ハ何卒御破棄可被成下候。餘在拝芝、草々頓首。 三月廿八日 横田香苗 中洲先生侍史

61 吉田庫三 (よしだくらさう 一八六七〜一九二二) 長州出身、吉田松陰の甥。松下村塾に学び、次いで二松学舎に学び、各地の中等学校で校長を務めた。

吉田庫三 三島中洲宛書簡 (明治四三年 (一九一〇) 一月八日付)

拝啓、寒氣相加候處、益御多祥奉賀候。昨日御講書始ニ当り、御老體御進講、深く叡感被為在候御事傳承、欣慶至極ニ奉存候。御紀恩の高作可有之、拝誦願上度候。次ニ生事、病後、健康始と平常ニ復シ、校務ニ従事罷在候間、乍憚御放念奉願上候。別記尊稿御教政、奉謝候。其内今時御自玉尊一二奉存候。先ハ乍略儀御悦旁、奉呈愚書候。謹言。 庫三 一月七日 中洲先生函丈

元旦賦得御題社頭杉

喬杉槍戟列

鬱々獲脩廊

蟠石虬身勁

攫空爪爪剛

甲寅新啓曆

天地始生陽

宗祀享儀厚

皇家寶祚昌

肅雍觀聖德

溫麗拝宸章

野性參清域

千年帶寵光

歲晚讀曾祖遺集書感

行路易蹉跎

年光疾似梭

淋漓臨死字

悲壯七生歌

天下異端起

人間姦物多

古今堪俛仰

掩卷涕滂沱

政 庫三草

(封筒) 東京麹町区一番町 三島毅先生 親展  
緘 横須賀市佐野 吉田庫三

62 依田学海 (よだ がっかい 一八三四〜一九〇九) 漢学者。名百川。佐倉藩出身。

文部省に出仕し漢文教科書を編纂。演劇改良運動にも参画した。

依田学海 三島中洲宛書簡 (明治四二年 (一九〇九) 二月二十四日付)

拝讀候。追々月迫に候處、益御多勝奉賀候。尊作賜高示、拙評可仕被仰付、加之結構之賜、恐縮奉存候。然ルニ、小生本月十三日午後三時俄然胃痛を發し卒倒候次第、今日ハ漸々こゝろよく候得共、今以絶食いたし、牛酷肉汁にてさし下候始末、しかし文章の嗜好ハ病中といへともわすれかたし。もつて一両中臥床にて是非とも拝見仕度候間、左様御承知被下候。此病不愈候ハ、甕江之迹を追ひ泉下二文を談すへしとたのしみ居候。早々呵々。 十二月廿四日 百川力疾 中洲先生

63 渡邊千秋 (わたなべ ちあき 一八四三〜一九二二) 信濃高島藩出身。地方官を経て、

宮内省に転じ、内蔵頭・宮内次官・宮内大臣を歴任。伯爵。

渡邊千秋 三島中洲宛書簡 (明治某年十一月一日付)

謹啓、寒冷相催候所、弥御安泰奉賀候。陳ハ、先日中ハ毎々御面倒奉願候處、時々御芳情ニ浴し、奉感謝候。早速御禮に出可申處、日々豫算時機ニ而取込候間、乍略儀不取敢以一書御禮奉申上候。却説、此品輕微之至ニ御座候へ共、郷国産ニ付、左右ニ奉呈仕候。幸ニ寒日御防寒の御備の一ニ加へ候ハ、光榮之至ニ存候。書外拝晤と、早々敬具。 秋 十一月十一日 三嶋先生函下

## 主要参考文献

- ・「啓鑑亭小野翁碑」『中洲文稿』第一集（一八九八年）、卷一下所収。
- ・「先妣小野君墓碣銘」『中洲文稿』第一集（一八九八年）、卷一下所収。
- ・「故長岡藩総督河井君碑」『中洲文稿』第二集（一八九八年）、卷所収。
- ・「随鷗小野先生碣」『中洲文稿』第三集（一九一一年）、卷二上所収。
- ・「幕府大学頭従五位下文靖林先生墓銘」『中洲文稿』第三集（一九一一年）、卷二上所収。
- ・「題論語算盤図賀洪沢男古稀」『中洲文稿』第三集（一九一一年）、卷三下所収。
- ・「従六位勲四等外山君墓碣銘」『中洲文稿』第四集（一九一七年）、卷二下所収。
- ・「移建愛蓮堂記」『中洲文稿』第四集（一九一七年）、卷三上所収。
- ・「大中寺梅園記」『中洲文稿』第四集（一九一七年）、卷三上所収。
- ・「中洲三島先生年譜」『二松学舎六十年史要』所収、財団法人二松学舎刊、一九三七年。
- ・「三島中洲詩全釈」全五卷、石川忠久編、二松学舎刊、二〇〇六～二〇一九年。
- ・『啓迪算法指南大成』小野光右衛門以正著、小野四右衛門必正編、一八五八年刊。
- ・『洪沢栄一伝記資料』全六八巻、デジタル版、shibusawa.or.jp。
- ・『大中寺と沼津御用邸』高橋有道編、大中寺、一九七六年。
- ・岸加四郎「備中の和算家と算額」『和算』二二二号、一九七八年。
- ・「浅口郡大谷村小野家」[goshu.or.jp](http://goshu.or.jp/)、[www.bunko.jp](http://www.bunko.jp/)。



後	編
記	集

数年来の懸案だった小野家旧蔵資料の展示を創立一四五周年記念展示として開催できることを心より嬉しく思う。展示図録の編集を終えて、あらためて大正天皇と中洲のつながりを示す資料の多さが印象に残った。大正天皇とその侍講である中洲の関係は周知の事実であるが、その交流の実態を裏付ける資料が必ずしも本学には多く伝えられていなかった。ここにあったのかというのが正直な感想である。貴重な資料をご寄贈いただいた小野重五郎先生を始めとする小野家の皆様に厚く感謝したい。

一方、二〇二七年の創立一五〇周年まで、残すところあと五年となったことにも思いを致さざるを得ない。二〇一五年四月から二〇二〇年三月まで五年間にわたり、東アジア学術総合研究所日本漢学研究センターを中心に推進したSRF事業（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本と漢学」）によって、本学に芳野金陵・加藤天淵・加藤復齋・市村器堂・佐久間峻齋・阪谷朗廬・山田濟齋・大沼枕山らの旧蔵資料が収蔵されることとなり、更に事業終了後も研究資料の基盤整備事業は継承されて、新妻莊五郎・清宮宗親らの旧蔵資料も増えつつある。我田引水と言われるかもしれないが、研究所収蔵の日本漢学関係資料はこの期間に少なく見積もっても倍増し、本学の一五〇年を回顧する上でも不可欠の史料群となったと考えている。

また、本学一〇〇年史が刊行された一九七七年は終戦後三〇年余の時点であったから、占領下の公職追放、五〇年代の経営混乱、中台関係と戦後中国学界の問題、附置研究所設置（東洋学研究所、陽明学研究所）などまだまだ言及されていない問題があるのは止むを得ないことである。学徒動員や校舎被災など大戦中の状況に関しても、その後に資料が見つかった事柄が少なくない。もちろん四、五十年間の関連諸分野における研究の進捗、研究動向の変化もある。したがって、一五〇年史が一〇〇年史の焼き直しで済むはずがないのである。コロナ禍が社会全体に先行き不透明感を醸成しているのは確かだが、時の流れは一刻も止まってはくれない。一五〇年史編纂に関して焦慮感が募る昨今である。

（町 泉寿郎）

二松学舎創立一四五周年記念

三島中洲と近代 ―其八―

新収の小野家旧蔵資料

発行日 令和四年一〇月一〇日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松学舎大学附属図書館

〒一〇二―八三三六

東京都千代田区三番町六一―六

印刷  
製本  
株式会社 サンセイ

